

# 探偵依頼書

在中

探偵依頼書



東 瑠美

『東校舎の階段』

馬場 楓

……  
19



龍巳 (タツ)

『高額バイト』

佐野 文哉

……  
7



『護り刀』

大石 龍侑

……  
35



諸事情により

失踪



アドラーさん？

『カピバラ狂騒曲』

渡邊 真

……  
95



ハロク  
羽麗  
サジ

『次に会うときは』

四角い箱の中』

熊谷 美咲

……  
53



渡  
遊大

『まじわる』

くりすていの

アヤノ

……  
111



カリウ  
雁雨

『十五年越しの依頼』

藤吉 直樹

……  
81

NO DATA



黒瀬  
ハジメ

『鎮魂曲を君に』

イトメ

……  
125

諸事情により

失踪



鳥羽

裕貴

『二乗探偵』

遠山 晴人

……  
155



シャーロット

『シャーロット・

ホームズの事件譚』

渡辺 結香

……  
143

以下、探偵の実績記録である。

依頼する際、参考にすること。



高額バイト

佐野  
文哉

これまでの猛暑が嘘だったかのように涼しくなった。

一年の中でも過ごしやすい季節。スーパーマーケットが隣接する駅ビルから改札を出て、バスターミナルを早歩きで後にする青年が一人。

青年は駅から四つ横断歩道を渡り、コンビニやドラッグストアを通り過ぎ、とあるマンションへ入って行った。ロビーから階段を上がり、陽の差す外廊下を歩いてゆく青年は『804』と書かれた扉の前で、とうとう足を止めた。

インターホンに軽く触れると、扉が開き、二十代前半ほどの男性が顔を覗かせた。

「依頼だな、入れ」

「お邪魔します」

男性は、青年を居間とは別の小さな部屋に招いた。

小さな部屋は外が見える窓、そして真ん中に四角いテーブルがあり、座布団いくつかが隅に積み重なっているだけの質素な風景だった。

「俺は龍巳。『タツ』と呼んでくれ」

テーブルの前に腰を下ろし、804号室の住人が名乗った。

「広澤和樹、二十歳の大学生です」続いて青年も自己紹介を

した。

「ここについては誰から？」

「警官を務めてる知り合いです。不可解な出来事を解決してくれる『探偵』がここにいるって聞いたんです」

龍巳は広澤の姿をまじまじと観察しながら質問した。比較的痩せ型で、あまり生活面は恵まれている方ではないようだった。

「なるほど、話を聞こうか」しばらく黙って龍巳は口を開いた。

「僕はアパートで一人暮らしをしている者です。アルバイトの給料と親の仕送りでなんとかやりくりしていたんですが、あまり親にも負担をかけたくなって、新しく高収入のバイトを探していたんです」

広澤が話をしている最中、突然扉が開いた。

「ん？ お客つすか？」もう一人の男性が目を擦りながら部屋に入ってきた。龍巳よりも若く、どちらかと言うと広澤に年が近いような顔つきをしている。

「ごめんなさいね、散らかってて。ゆつくりしててくださいいね」男性は一番上の座布団を取りながら、テーブルを挟んで反対側にいる広澤の方へ向かった。

「い、いえ、お構いなく」広澤は愛想笑いをしながら座布団

を受け取り、尻に敷いた。

「お前もお客みたいなもんだろ、ヨシ」

「助手って言うってくださいよタツ先輩」

『ヨシ』と呼ばれた男性は、龍巳に対してとっさに答えた。

「広澤さん、紹介しておこう。こいつは居候の義一。俺は『ヨシ』って呼んでる」

「邪魔しちゃったみたいですね。じゃ、ごゆっくり」

義一は先ほどのもてなすような態度とは打って変わって、あつさりとした口調で扉に手をかけた。

「待て、お前も話を聞いておいたほうがいい」

龍巳は自身の隣に座布団を放った。それを見た義一は目を輝かせながら腰を下ろした。

「だいぶ話が逸れたな。すまない、続けてくれ」

龍巳は穏やかなトーンで言った。

「親に負担をかけたくなかったもので、高収入のバイトを探していた僕は、半年ほどSNSで繋がっていた友人からこんなバイトを紹介されたんです」

広澤はスマホの履歴からとあるページを開き、二人に見せた。

「プログラミングのバイト募集、月給十二万……。なるほど」

「はい。僕自身プログラミングも少々かじっていたので、まあほぼ未経験のようなものですが、うってつけかなと思って応募しました。応募から二日後に連絡が来て、電話で伝えられた住所へ向かいました。永代にある『千福ビル』という見たところ普通の雑居ビルで、僕はエントランスで待ち合わせしていた男性にそのまま4階へ案内されました。案内してくれた方は『山本』と名乗りました。事務所にはデスクトップのパソコンが置かれた机が三台並んでいるだけでした」

「質素な環境ですね。高収入バイトにしては」

「はい、しかし後悔だけはしたくなかったです。僕は詳しい仕事内容を聞きました。なんとそれが『山本さんの指示の通りプログラミングを行う』というだけのものなんです。契約書にサインした後そのまま作業に取り掛かりました」

「指示通りのプログラミングだけで月十二万か。給料は出たのか？」

「最初は僕も半信半疑ではありましたが、でも、給料日にちゃんと振り込まれていました。で、ここからが不可解なんです。バイトを始めてから四ヶ月ほど経った昨日のことです。いつも通り僕は事務所に向かいました。しかし、エントランスの看板に書いてあったはずの4階の部分が空白

になつてたんです。急いで4階に上がると事務所のドアに鍵がかけてありました」

広澤の話聞いていた二人は、「瞬間を見合わせた。」

「その山本という者と、その後連絡は？」

龍巳が聞いた。

「ええ、真つ先に山本さんの連絡先に電話をかけたんですが、番号はもう使われていなかったんです。それから、他のテナントにも回つて聞いてみたんですが、誰も山本さんについて知っている人は誰一人いませんでした」

義一は二人の顔をちらちらと見た後、質問した。

「仕事中、何か様子がおかしいと感じたことはありませんか？」

「勤務中、事務所は常に山本さんと僕の二人だけでした。一度、他にこのバイトをしている者はいるのか気になって聞いてみたら、別の日にそれぞれ一人ずつ仕事をさせているというんです。何かこれ以上余計なことを聞いたらまずいとは感じてましたし、自分にとつてかなり条件が良かったんで、給料が入った時の興奮で疑いも全部吹っ飛んでしまつて……」

「でもしっかり給料は入つてたんでしょ？ 詐欺というわけでもないし広澤さんは被害を受けたわけじゃないつすよね」  
「しかし、バイトを紹介してくれた友人のアカウントが突

然削除されていたんです」

「アカウントが？ それは事務所が閉まった昨日、だな？」

「はい。バイトを紹介してくれたというのも、話題のほんの一部でしかなくて。今年の初め頃から知り合つたんですが、それなりに仲も良かったんです。DM(ダイレクトメッセージ)もほぼ毎日してましたし」

「実際に会つたことは？」

「ありません。完全にネットの中での関係でした」

「そのアカウントはいつから利用されていた？」

「去年の十一月だったと思います。知り合つたのは今年の上月です」

「……なるほど、わかつた。引き受けよう」

一、二秒ほど黙ってから龍巳が言った。

「これ程のなら、まあ明後日には片付く」

「ありがとうございます！」

広澤はお辞儀をした。

広澤が帰り、部屋から出ようとする義一に龍巳が話しかけた。

「この依頼についてどう考える？」

「どうって言つたつて先輩、今回の依頼は謎すぎるつすよ。」

犯罪が起きたってわけでもないですし」

「不可解な事件ほど真実は単純なものだ」

「うーん……」

義一は唸るような声を出した。

「少し考える。出てっついで」

「わかりました。なんかわかつたらすぐ呼んでください」

義一は戸を締めた。

義一はかすかな物音で目を覚ました。

一時間ほど経っていた。

正午は過ぎてきたが、まだ空は明るく、うつろな目をした義一の顔を日光が指した。

「おい起きろヨシ、出かけるぞ」

龍巳が思いつき扉を開けながら言った。

「あ、はい！ ちょっと待って！」

義一は飛び起きながら玄関に向かった。

二人は地下鉄に乗り、三十分ほどで駅に到着。龍巳は乗車中、スマホで誰かと連絡をとっていたようだったが、義一は特に気にも留めなかった。駅の階段を上り、交差点の先をしばらく歩くと龍巳は足を止めた。

「なるほど、ここが問題の千福ビルつか。ほんと見たところは何の変哲もないって感じっすね」

義一がビルをじっくり観察する一方、龍巳はすでに道路の向こうを見ていた。

「道路越しの建物……銀行？」

「よし、これで大体の仕事は済んだ」

「え？」

龍巳は雑居ビルの道路越しに銀行があるということを確認すると、さらにビルの裏側へまわった。

義一も不思議そうに後に続いた。そして、路地裏から道路に出ると来た道を戻り駅に向かった。

「駅に着いたら俺は用事があるから離れる。ヨシは家に帰るだろう？」

「まあ、そうっすね……」

「この件は、お前にも協力してもらいたい。夕方、六時からいには俺も家に戻るからよろしく」

「了解っす」

二人は交差点にある駅の出入り口に入ると、改札口で別れた。

義一は電車の中、一人で考え続けた。

プログラミングをするだけで十二分に稼げるという高額のアルバイト。それが四ヶ月程度経った頃、事務所がいきなり閉鎖されたということ。依頼人のSNSの友人は、なぜ突然姿を消したのか。

どれをとっても、何がどうつながっているのか、義一には全く理解できなかった。

「今回もお手上げかぁ。タツ先輩の指示に従う他ないか」

義一は、心の中でそう呟いた。

義一は家の最寄り駅に到着した。夕方まで暇があると思っただ上、難しく考えすぎることへの気分転換も兼ねて駅前の某ディスカウントストアに入った。

他の店舗よりも規模が大きいせいか、義一が店を出ると空が少々暗くなっていた。

「早く戻らないと」

夕暮れのなか、カップラーメンやら、お菓子やら、ドリンクやらを詰め込んだレジ袋を左手にぶら下げ、義一は帰路に着いた。

「俺の手も借りたいってことは、先輩一人じゃ解決しないって意味だよな……」

義一は再び神妙な面持ちになりながら考えた。

そして、彼は自分が少し情けなく感じた。

「タツ先輩は現地調査もあれほどあつけなく済ませていたのに」

家を失い、あてがなくなった義一は、事件の後、彼に憧れて助手として住み込ませてもらった。そこまでは良かったものの、数々の依頼をこなしてゆく内に、やはり自分と彼の大きな差を毎度感じるようになってしまったのだった。

しかし、考えているうちに気が少し楽になった。

なにせ今回の依頼は、彼から積極的に助手の手を借りたということなのだから。

義一は家に着くと、キッチンに向かいレジ袋に詰まった商品を仕舞った。

それから少し暇な時間があることがわかると、ペットボトルとスナック菓子の袋を一つずつ持ち出し、自分の部屋に入った。

テレビをつけながら、ペットボトルのジュースと菓子を貪っているとインターホンが鳴り出した。

「ハイハイ」

義一はそそくさに玄関の戸を開けた。

そこには龍巳の姿ともう一人、彼よりもほんの少し身長

の高い男性が立っていた。

「タツ先輩、この方は？」

「そういうえば会うのは初めてだったなヨシ、彼は烏丸丈二。警官をやっている」

「はじめまして、ヨシ君。僕が烏丸丈二、呼び方は『ジョウ』で構わないから」

彼も呼び名を名乗った。

龍巳の性質上なのか、効率化を図るためなのか、彼の周りの人物は皆こういった簡単なあだ名で呼び合うことが定番となっていた。

「よろしくお願ひしますジョウさん。じゃ、二人とも上がって」

先ほどの来客用の部屋に入った三人は、テーブルを囲んで座った。

「何か飲み物とかお菓子とか、持ってきました？」

気を利かそうと、義一が座つてすぐ立ち上がった。

「ああ、お気遣いなく」

「ジョウさんは警官をされてるんですか？」

「うむ、タツとは昔からの付き合いでね、広澤くんを彼を勧めたのも俺だよ」

「そうだったんすか」

「これで揃ったな」

龍巳は淡々とした口調で言った。

「今回の件なんだが、『福沢健太』が関わっていることは間違いないとみる」

「フクザワケンタ？」

義一が龍巳の方を見て聞いた。

「五年前に強盗未遂事件を起こしたんだ。一度逮捕されてはいたんだが、未成年だったもんで刑が軽く済んじゃったんだよね」

「その福沢健太が今回の件にどう関わってるんすか？」

「彼が逮捕された当時、高校生だった彼はAIの開発で話題になってたんだ」

「AIの開発？　じゃあプログラミングのバイトを求人したのって……」

「おそらく福沢健太、依頼人にバイトを紹介した者、そして広澤さんと連絡をとっていた山本という人物は、皆グルと見ていいだろう」

「昨日で事務所を閉めたということは犯行は早くて今日中行われるだろうね」

「彼らを再び捕らえる事ができれば、今回の依頼は片付く」

辺りはすっかり暗くなり、時刻は午後九時をまわっていた。先ほどの千福ビルへ向かうため、二人は烏丸の運転する車に乗った。

三十分ほどで目的地に到着した彼らは、コインパーキングからビルの目の前にたどり着いた。

「電気がついてますね……。となると空き部屋にはなっていないし、事務所の閉鎖というより休業です」

四階の窓はブラインドに覆われていたが、光がかすかに漏れていた。

「テナントの表記は確かに剥がされているが、敵はまだこのビルにいるということだね」

「ああ。昼にも一度みたが、このビルの裏に階段があった。それ以外の出入り口は真前のエントランス以外ないということだ」

三人は四階の電気が消えるまでの間、待ち伏せをすることにした。

涼しい季節とはいえ、夜の風は肌寒さを感じさせる。「五年前の強盗事件の際、彼に仲間はいたんすか？」

義一が聞いた。

「いいや、単独犯だったよ。腕っぶしが強いというわけではなかったからすぐに取り押さえる事ができたみたいだ」

烏丸が答えた。

「しかし、今回はグループでの犯罪だ。一筋縄でいく事件とは言えない」

「それで先輩は俺の手を借りようとしたんすね？」

「そういう事だ。うまくやれよ」

「はい」

元氣よく返そうと思ったが、潜伏中の今はまずいと思った義一は控えめな声量で返事した。

それから十分間ほど経った後、ついに四階の電気が消えた。

『敵』はエレベーターからやってきた。

先陣を切るようにエントランスを歩く、フードをかぶったパーカー姿の男。

メガネをかけたダウンジャケットの男。

そして、ビジネスバッグを持った黒いジャージ男の計三人だ。

あたりの様子を伺いながらいかにも怪しげな雰囲気醸し出している。

義一が聞いた。

パーカー男が道に足を踏み入れた瞬間、真っ先に飛び出したのは龍巳だった。

「うわあ！」

夜の町に絶叫がこだました。

龍巳はパーカー男をヘッドロックした。

「早く行け！ 吉田！」

それを聞いたジャージ男はビジネスバッグを抱えて走り出した。

「待て！ 逃げんな！」

義一がほぼ同時に駆け出した。

『吉田』の『吉』に反応したのか、ほぼ反射的に動いていた。

義一のタックルを喰らったジャージ男は、バッグを落としました。

「なんてことしてくれたんだ！」

反撃しようとして追いかけてくるジャージ男をかわし、義一は銀行とは反対の方向にバッグを滑らせようと思いい切り蹴り付けた。

「痛ッ！」

しかし、バッグは異様に重く、義一の足に激痛を走らせただけだった。

それでも彼は諦めず、バッグを掴んでぶん投げる。

「よくやった！ ヨシ」

龍巳は男を解放し、ビジネスバッグを拾った。

パーカーの男は思わずフードを剥がし、その場に膝をつき咳き込んだ。

「やはり福沢……！」

龍巳はパーカー男の素顔を見て声を漏らした。

主犯格と思われたパーカー男の正体は、その人だった。

「そう言えば後一人！」

焦ったように、キョロキョロと義一は烏丸の姿を探した。

烏丸は既にダウンの男を取り押さえていた。さすが警官といったところである。

「動くな。観念しろ」

男を取り押さえている烏丸からは、これまでの穏やかな雰囲気は一切感じられなかった。

他二人はビジネスバッグを持った龍巳を見ながら様子伺い、誰も銀行へ向かおうとはしなかった。

「この鞆が必要不可欠ということか」

何か機械類のようなものが入っているようだった。

サイレンが鳴り響き、パトカーが到着した。

「ご協力感謝します」

証拠品としてビジネスバッグを龍巳から受け取り、警官は、ほぼ諦めたのか放心状態のような様子の三人を連行していった。

二日後の夕方、依然変わらず過ごしやすい天気の中、マンションの804号室に客人がやってきた。

「こんにちは、ヨシさん……でしたっけ？」

「ああ、広澤さん！ どうぞどうぞ！」

義一は広澤を客間に案内した。

客間には既に座布団が敷かれ、窓側に龍巳が座っていた。

「広澤さん、事件は無事に解決した」

龍巳は広澤へ事件の概要を簡単に説明した。

「タツさん、ヨシさん。本当にありがとうございました」

広澤は深々と頭を下げた。

「それでお二方、依頼料の件なんですけど……」

顔を上げて広澤が質問したのを見て、義一が封筒を取り出した。

「広澤さん。警察から謝礼をいただいたんすよ」

「これほど面白い依頼も久々だ。これ以上の報酬はない。こちらからも感謝する」

「いえいえ、そんな。お礼をいうのはこつちですよ」

広澤は愛想笑いしながら言った。

二人はマンションの外廊下で広澤を見送り、部屋に戻った。

義一は龍巳に対して今回の事件についての質問を始めた。

「まず、今回捕まった犯人ですけど、福沢の他に二人いましたよね？ 彼らは福沢とどういうつながりだったんすか？」

「二人はそれぞれ『山本』と『吉田』という苗字だ。まず山本だが、これはヨシもわかっているとは思いますが依頼人を事務所に案内した者。そしてもう一人、吉田は依頼人がSN Sで繋がっていた友人だ」

「あの吉田って人が広澤さんに接触してバイトをさせたってことっすか？ でもどうして？ バイトでプログラミングをさせていた意味は？」

「どこのつまり、彼らの目的はATM強盗だ。銀行のATMを誤作動させて、現金を引き出すための偽の信号を送る装置を作ろうとしていた。あの時、カバンの中身が異様に重かったのは、その装置が入っていたからだ」

「事務所を急に閉めてしまったのは？」

「事務所を閉めたのは、装置に必要なプログラムが完成したからだろう。プログラミングが完了したとわかった彼らは

雇った人間を用済みと判断したためと考えられる」

「なるほど……。そんな推理を」

義一は感心した。

「しかし、そんな装置のプログラミングをバイトとしてやらせていたんすかね？」

「バイトで作らせていたプログラムは一部分に過ぎなかった。それから、別の日にそれぞれ一人ずつ仕事をさせていたという件についてだが、吉田が広澤さんの他にも二人にこのバイトを紹介していたようだ。事務所になかった福沢と吉田は本業があつたせいか、合流できる機会が少なかったらしい」

「広澤さんが依頼に来なかつたら、銀行も危なかつたつすね。本当は彼の功績みたいなもんすね」

「そうかもしれないな」

「これにて一件落着つすね」

義一は一息おいて言った。

「今日の夕飯買いに行きますか。一緒にどうつすか？」

「ああ、行くか」

外へ出ると、半袖では少々寒いくらいの気温になっていた。

秋は近かった。



東校舎の階段

馬場  
楓

「幽霊がいるんです、この学校」

青ざめた顔で彼はそう呟いた。埃っぽい椅子に体を縮こませ、視線を斜め下に向けている。その様子に彼女はほほうと相槌を打ち、新たな謎の予感に目を輝かせた。

「いると思う根拠は？」

「そうでないと、説明がつかないから、です」

「うーん、それじゃあ根拠に弱いわ。ねえ裕介、貴方ならもつと詳しい話を知っているんじゃないかって？　なんたってお前が連れてきた依頼人よ」

にこりと笑い、此方を振り返る彼女——東瑠美は、いたくこの件が気になるようだった。依頼人を連れてきたのが自分自身とはいえ、あくなき探究心に思わず呆れてしまう。今説明するからと断りを入れ、俺は依頼人から事前に聞いた話を振り返った。

依頼人である彼、高橋優斗はこの大学に通う学生だ。新入生である彼は右も左もわからない状態であるサークル勧誘を受け、そのまま流されるようにサークル参加を決定してしまっただけだ。そのサークルが【オカルトサークル】というものだった。如何にも怪しいといった感じのサーク

ルだが、参加している三人の先輩は皆心優しい人なのだそうだ。特にリーダーの倉田健は面倒見が良く、性格も非常に温厚で、内気な性格である高橋をよく気にかけてくれる良い人であった。他にもオカルトに一番興味のある原田美代子に、倉田の誘いで入った宮崎剛志が所属している。三人とも三年で、どうやら今年でサークルを抜けるらしい。元々二十人近く人数がいたが、最後に残ったのはこの三人だけだったとか。少々強引に高橋を誘ったのは、サークルの存続のためでもあったのだと参加してから打ち明けられた。高橋としてはもうその時すでに三人の先輩を大事に思っていたため、この場に残ることにしたらしい。

しかしサークルに入ってから二ヶ月、オカルトサークルにある話が入ってきた。リーダーである倉田が嬉々として持ってきた話だった。

『東校舎の階段には幽霊がいるらしい』

なんでも昔、まだ大学が建てられていなかった頃、大学の東校舎のあたりでとある恋人が待ち合わせをしていたが、男はついぞ訪れなかったのだとか。そのまま待ち続けた恋仲の女はやがて死に、ここで未だ待ち続けているのだという。聞けば聞くほどそれはオカルトサークルならではの話題だった。その話を聞いてただ高橋が思ったのは非常に胡

散臭いなどということであり、他は何もない。そこまでオカルトを信仰しているわけではなかったため、その程度でしかなかった。そもそも調査をすること自体も、あまり乗り気ではなかったという。

そして二週間前の金曜日、ついに調査をする日がやってきた。サークルメンバー全員でその場所に訪れ、高橋は懐中電灯を持って東校舎の階段に集合した。その際倉田はビデオカメラを、原田はメモのセットを持ち、校舎へと向かった。

校内は暗く、懐中電灯なしではかなり厳しかっただろう。警備員は既に帰宅しているのか、校舎内には四人しかいないように見受けられた。一応夜分に滞在する許可証を出してはいるものの、電気節約のためか階段や廊下には非常灯しかついていない。緑色のぼやけた明かりでは何もできないだろうと高橋は感じたのをよく覚えていた。

どうやら噂の幽霊は男女が揃ってその場を訪れると現れるという幽霊らしい。そこで倉田はチームを分けることを提案してきた。単純に記録係と幽霊を釣るための餌係ということなのだろう。必然的に、懐中電灯とビデオを持っていた高橋と倉田は記録係、残る原田と宮崎は餌係という分担になった。

そんな時である。分担を決め、即座に別れてしばらく経った頃だった。階段に立ち続けていた原田が、何かに取り憑かれたように大声で泣き叫んだのだ。その様子に呆気に取られたが、原田は尚も階段に響き渡る声で叫ぶ。

『私は待っているだけじゃない！ どうしてそれを咎められなくちゃいけないの!?!』

原田は物静かで随分と落ち着いた性格だ。部員の中では一番オカルトに興味を持っていたが、決して突然叫ぶような狂人ではない。一瞬サークルの存続のためにこのような場所で演技したのかとも思ったが、そんな器用なことが出来る人でもない。それに長い髪の毛から覗く原田の目は、普段の様子とは異なり血走るほど見開かれていた。そばにいた宮崎も後退り、何かの冗談だろ、と零す程に。

想定していた事態よりも遥かに酷い現象に、高橋は酷く恐怖した。持っていた懐中電灯を放り投げ、早くこの場を離れようとしたらしい。しかしそれを倉田が止めた。ビデオカメラを回していた彼は、焦りながらもこの様子を記録に収めたいのだと主張し、原田を照らして欲しいと高橋に頼んだ。勿論高橋は拒絶したが、普段は温厚な倉田が早く！と狂気じみた声で頼むものだから、気圧されて投げた懐中電灯を拾いに行ってしまった。この間も原田は何か訳の分

からないことを叫び続け、更には誰かを襲う気なのか酷く暴れており、それを必死で宮崎が止めていた。その際がしゃんと何かが落ちる音がしたが、ライトを照らしていなかったためあまりよく見えない。確認の意味も含めて恐る恐る再度照らした原田の顔はひどい有様で、今までに見たことのないような歪み方をしていた。

『やっぱり帰りましょう先輩！ 僕は無理です、別にオカルトが好きなわけじゃない！』

高橋は顔を背けビデオカメラに夢中な倉田へ再度告げた。だがそれでも倉田は引かない。ビデオカメラを見ながら悍ましい笑みを浮かべ、その光景に目を輝かせている。

『何を言ってるんだ高橋、これはスクープだ！ これで僕らは生き残れる！ 素晴らしい瞬間なんだぞ！』

『生き残る……？ 一体何を言っているんです、早く！ ビデオカメラなんて置いてください！ ほら宮崎先輩も！』

とにかくこの場所から離れなければならぬと、高橋は確信していた。この場所では誰しもが狂気の沙汰に吞まれしまうかもしれないと直感で理解した。ビデオカメラから離れようとしないうちに倉田を一度放棄し宮崎に声をかけたものの、宮崎もまたその言葉に首を振る。どうしてと疑問を投げかける前に、宮崎は原田から視線を外さずに叫んだ。

『原田を……美代子を置いていけない！ こいつがこのままだったら、俺は……！』

『そんなことは後にしましょう！ 一度離れるべきだ！』

『俺には無理だ！ 高橋、倉田を連れて早く外へ！ 俺は後から行く！』

頼む、と真剣に出されたその声に、やはり高橋は頷く他なかった。一度懐中電灯を消しポケットに突っ込むと、倉田の腕を掴み外へ引つ張ろうと試みたのだ。だが力にあまり自信のない高橋は倉田を動かすことができない。それどころか倉田は懐中電灯を勝手に消した高橋を睨みつけ、腕を振るとそのまま高橋を床へと叩き落とした。

『何やってるんだ!? 誰が勝手に消して良いと言った！ この瞬間の重要性はさっき言ったばかりじゃないか！』

『で、でも宮崎先輩が逃げろって……！』

『君は本当に馬鹿だな！ あんな男の言うことを聞くなんて！ もういい、懐中電灯を貸せ！ 僕がやってやる！』

その言葉に高橋は耳を疑った。今まで優しいと信じてきたリーダーが一気に信じられなくなるほどに、その言葉は重くのしかかった。どうしたらいいのか分からず床に座り込んでいると、痺れを切らしたのか倉田が舌打ちをして、床に座った際転がってしまった懐中電灯を拾った。そのま

ま左手に持つと、ビデオカメラと共に原田へと迫る。その顔は興奮しきつていて、酷いものだった。

『おい倉田、何してる!? 早くビデオを止める!』

怒声と共に暴れている原田を必死に抑えつけていた宮崎が痺れを切らしたように言う。しかしその声は倉田に全く届かず、倉田は原田を撮るのをやめようとしない。カメラと懐中電灯を持ったまま迫り続ける。いよいよ宮崎も様子がおかしいと気が付いたのか、困惑したような声で倉田に呼びかける。

『聞こえてんのか!? これはマジでヤバイ、早くビデオを止めて外へ出ろって!』

『煩いな、これは命綱になるんだよ! 原田が掴んだチャンスを逃すわけにはいかない! ツハハ、いいぞそのまま、そのままだ!』

『お前、何言つて……!?』

その時だった。今まで宮崎ばかり気にしていた原田が、グルンと首の向きを変えて倉田を見たのだ。そうしてビデオカメラの存在に気がつくと、彼女はこれでもかと言うほど顔を赤くして奇声をあげた。

『地獄へ堕ちろ貴様ああ!』

あまりの迫力に高橋も宮崎もたじろいだ。だが倉田だけ

はさらに笑みを深め、興奮したように一步を踏み出す。瞬間、倉田の体が反り返り、そのまま仰向けにころりと床に倒れた。突然の出来事に高橋は動けず、ただ呆然とその場面を見ていることしかできない。原田はその後、響き渡るほどの声量で笑い声をあげると、そのまま事切れたようにぶつりと気絶した。そばで押さえつけていた宮崎もそれには驚いたように、床へと倒れそうになる原田を必死に抱え、慌てたように声をかける。

『……おい、おい美代子? 美代子!』

しかし何度声をかけても反応はない。脱力した体は揺さぶられた振動を伝えるだけで、原田が目を開けることは無かった。倉田も起き上がる感じはなく、ただただそこには妙な静けさだけが広がっていた。

このまま揺さぶっても反応を得られないだろうと悟ったのか、宮崎はゆっくりと原田を地面に下ろした。そのまま倒れた状態の倉田の元へ行き、倉田にも声を掛ける。

『倉田……おい、倉田、おいつてば』

だがこちらも反応は得られなかった。まるで本当に呪われたかのように倉田は動かない。何度も何度も倉田に呼びかけるが、反応は一切返ってこなかった。二人とも起きない状況に不安が膨らんだ頃、宮崎が何かに気が付いたのか、

びたりと声をかけののをやめた。一体どうしたんですかと高橋が掠れ声で聞くと、宮崎が怯えたような声で呟く。

『倉田が………血を、流して』

『え………?』

『喉が、掻き切れて……おかしい、どうして、コイツは上向きに倒れて、刃物なんて、なかったのに!』

緑色の非常灯が照らす照明の中、どろりと何か黒いものが倉田の寝ているあたりから出たのがわかった。あまりにもイレギュラーな事態に益々高橋はパニックになっていく。叫び出しそうなその瞬間、宮崎が高橋の方を向いて話しかけてきた。

『……高橋、外へ出るんだ。ここは電波が悪いから外へ出て救急車を呼ぶんだ。頼む、早く行ってくれ!』

そう言った途端、噴水のように黒い液体が倉田の体から溢れ出るのが見えた。ヒ、と後ずさると、宮崎が再度助けを呼ぶことを催促する。その表情は見たことがないほど真剣で、高橋はパニックになりながらも校舎外へと懸命に走り出すしかなかった。

非常灯しか明かりがない廊下を走るのは困難だったが、先程見た景色を早く消したくて高橋は出口へと走り続けた。そして自身の携帯で救急車を呼び、事情を話した。救急隊

の人は話に信じがたいような声で返事をしていたが、怪我がいることを伝えると即座に動くと言ってくれた。学校の名称を伝えそのまま到着を待っていると、程なくして救急車がやってくる。救急隊の人を連れて東校舎の階段へ戻ると、高橋が離れる前よりさらに事態は悪化していた。

『原、田が……』

震えた声でそう言った宮崎の左肩にはボールペンが突き刺さっており、血がシャツに滲んでいる。更に床には血を流し続ける倉田と、先程とは違う体制で倒れている原田。あの後きつと原田が目を覚まして宮崎を襲ったのだと言わんばかりの現状に、高橋は遂に悲鳴を上げるしか無かった。完全にパニックになってしまった高橋はそのまま泣き崩れ、救急隊の人と共に病院へ一度運ばれたという。

その後応急処置が施されたものの、頸動脈を切られて時間が経っていた倉田は死亡。原田は現在も眠りから覚めず、宮崎も肩の傷が深いため一時入院という事になった。唯一無傷で終わった高橋はその後警察に事情聴取され、現在はカウンセリングに通いながらも普通の生活を送っている。

「——というのが、今回のあらましだ」

「ふうん。それでどうしてこんな平凡な学生に……西田祐介に事件の話をしたの？」

ひとまずの問題はそこである。確かにこれだけ細かなことを高橋には話されたが、高橋と俺は何の共通点もない。ましてや警察が既に動いている案件を一学生に話すなど、正直どうかと思う。事件自体は既に広まっており、現在も東校舎の階段は封鎖されたままだ。つい最近まではマスコミが学校に張り付いており、学校も迂闊に登校できる状態では無かった。それが漸く最近になって解除され、どうにか大学としての機能が始まったようなものである。そんな状況下、相談するのが警察ではなく単なる学生二人というのは、はつきり言つて妙だ。

「だつて西田先輩と東先輩は、その、学校内で有名じゃないですか」

「ええ？　そうか？」

「ゆ、有名です！　東の名探偵つて……元々は東校舎の一階の空き教室で活動されましたよね？」

「ええ、確かに活動していたわ。封鎖されて今は南校舎だけだ」

そう。確かに活動はしていた。然程噂になる程でもないかと思つていたが、どうやらそうでも無かつたらしい。何の活動かというところ——謂わば、相談所のような事だ。不可解だと思ふもの、納得がいかない事象に対し、ほんの少しのアドバイスを伝える……それだけの活動だ。何故そんな活動をしているかというところ、東瑠美が大の謎好きであるからだ。不可解だと思われるもの、納得がいかない事象をこよなく愛し、その全ての答えを探す工程を何よりも尊ぶ者だからである。俺、西田祐介はというと、端的に言えば彼女の助手だ。彼女が好みそうな不可解なものを調べ、提供する者。要は窓口である。依頼は全て俺を通すことが暗黙の了解として知れ渡つているのは知つていたが、まさかただの噂のみで俺へ相談してきた高橋には随分と驚いた。大々的に相談に乗ると明言していない以上、有名だという自覚はなかつたのだ。

「貴方がた二人は、どんな謎も解いてくれると聞きました。だから、西田先輩を探して、探して……昨日、漸くお会いすることが出来たんです」

「それで祐介は彼の話を聞いた、と」

「ああ。俺が聞いた話は今ので全てだよ」

「ふうん。そう」

そう言うとき東は足を組み替え、顎に手をあて考え込んだ。

高橋はというと依頼内容を話されて興奮気味なのか、部屋に入ってきた時よりも饒舌になり彼女へと語りかける。

「確かに、この件は警察の方で解決しそうだと聞きました。

宮崎先輩の肩に刺されたボールペンから、原田先輩の指紋が検出されたんです。でも僕にはどうしても原田先輩がやったとは思えない！あの場にいた全員が見たんです、原田先輩は原田先輩ではなかった。あれは、あれはもつと別な……そう、幽霊に違いありません。幽霊が、僕らを……！」

「ああ、別に私はオカルト話が聞きたいわけじゃない。その辺でいいわよ」

「つ……すみ、ません」

喋りすぎたという自覚はあったのだろう、高橋は自分の体を縮こめ、視線を逸らした。その様子に全く目もくれず、東は考え続ける。彼女はいつもそうだった。依頼人の話を何よりも尊ぶが、依頼人自体に興味はまるで無い。謎に興味はあっても、人に興味はないのだ。はつきりとわかるその様子に思わず、はあとため息が漏れ出る。いつだって依頼人のフォローは俺の担当だ。せっかく解け始めていた緊張がまた露わになっている高橋を何とかしなければならぬだろう。彼にすまないと笑いかけると、いえ、大丈夫で

すとごく小さな声で答えられた。

「そうだね。では質問をしていくとしましょうか。ええ一つ、君。タカハシ君……だったかな？ 私の質問に答えてもらえるかしら？」

「は、はい」

「祐介はメモを忘れずに。また一つファイルの中身が増えるだろうから」

「了解」

返事を返した俺は、速やかにバッグの中のファイルを漁る。ピンクのバインダーに閉じられたそれらは、今まで彼女が解いてきた謎達だ。俺の仕事は謎を見つけ出すこと。他に、謎を整理し補完する役割を担っている。謎に飢えた時間はこれを見返して、彼女は優越に浸るのだ。全く、人の気も知らないで。それらを誰が管理しているのか、忘れないで欲しいものだ。

ファイルを捲ると、ちょうど真ん中あたりから白紙になっている。まだ事件が綴られていない場所だ。その場所にボールペンを当て、記入事項を書き記していく。依頼内容に関しては既にまとめていたため、これから書き記すのは依頼人と彼女の言葉達だ。謎を解くための手掛かりが散りばめられた言葉達を落とさないよう、ボールペルを握りなおす。

それが彼女の中で合図となったのか、東はニヤリと笑って高橋を見つめた。

「よろしい。ではまず、君が聞いた物音について聞きたい。原田が暴れ出し宮崎が押さえ込んでいた時、何かかがしゃんと落ちたと言ったわね。あれは一体何？」

「ええ、と。ああそうだ、確かあれは筆箱でした。原田先輩はメモの準備をする係だったので。あのなあ見えてずばらで、筆記用具を数本持つてくるなんて事をしないんです。いつも使用していた筆箱を持ってきました。でもあの中には鋏だとか、そういう刃物が入っていないんです。警察の方もあつたとは言つてませんでした」

「そう。やはりね。ではビデオカメラはどうしたの？」

「ビデオカメラは壊れてしまいました。倉田先輩が倒れた時ビデオカメラも一緒に落ちましたしその時だったと思います。後で見せてもらえたのですが、明らかに床に叩きつけられた時の壊れ方をしていました。画面が曲がっていました」

「メモリーカードは？」

「いえ、予算がもうだいぶ削られていて。暗闇でもきちんと取れるいいビデオカメラを買つてしまつて、メモリーカードは買わなかつたんです。そんなに長く回さないからと、

ビデオカメラにある内蔵メモリーでどうにかなるだろうと思ひ、メモリーカードは入れてませんでした」

「ふうん。じゃあ次は倉田のセリフ。『生き残れる』とは一体？」

「それは僕にもわかりません。あんな映像をどこに出すつもりだったのか、何の為に使うつもりだったのか……」

「君では無い人はわからなかったの？」

「僕では無い人？ ああ、宮崎先輩ですか。あれ以来お会いできてないんです。面会しようとしても先輩から断られてしまつて」

「へえ、そう。では次。君は倉田が調査の案件を持ち出してきた件について。それは何故持つてきたのかわかる？」

「確かいいなネタが入つたから、と。予算があまり無いことは元々話題になつていて。僕を誘つた理由もサークル存続のためだと仰つていましたし。調査をしようと思つて出してきた時、これで有名になつたらメンバーも増えるかもしれないと仰つていたので覚えてます」

「オーケー。では最後。貴方はサークルに勧誘されたから入つたのよね。それは倉田、宮崎、原田。誰から勧誘を受けたの？」

「宮崎先輩です。それが何か？」

「うん、もう良いよ。出揃つたわ」

その言葉を目処に一度ボールペンを止める。高橋は目を丸くし、もう良いのかという顔で彼女を見つめていた。東はそんな視線を気にもせず、頭の中で繋がったピースの喜びを噛み締めている表情をしている。どうやら犯人が見えたのだろう。メモしていた会話文を振り返っても、俺にはよくわからない。要所要所引つ掛かるところはあったものの、結論を出すには少し足りない。これは今回も解説を聞くしか無いかと溜息を吐いた。

「あら、祐介は分らなかったの？ 貴方考える頭はあるのに結論が出ないなんて、本当に残念な頭をしているのね」

「うるさいな、俺は良いんだよ」

ふい、と顔を逸らしたものの、その行動すら彼女はおかしくて仕方ないのかもしれない。くすりと笑い、勝ち誇ったように微笑んだ。

「ど、どういう事なんですか！ 僕にもわかるように説明してください！」

高橋が慌てたように告げる。その声に更に笑みを深くし、東は高橋を見た。

「安心しなさいタカハシ君。この学校に幽霊なんていないわ」

「幽霊は……いない？」

「ええ。この話はただの殺人よ」

高橋の顔色が一気に悪くなる。それもそうだろう、大事な先輩達を殺し、傷付けたのが幽霊でもなく人間だと知ったら、誰でもそのような反応をする筈だ。想像した通り高橋はふるふると首を振り、否定するように声を荒げた。

「そんな、そんなはずはありません！ だってあの場には僕を入れて四人しかいませんでした！ そのうちの二人は明らかな攻撃を受けているし、原田先輩は正気じゃあなかつた！ そんな中で人が人を……つ冗談も大概にしてください！」

「冗談、ねえ。そうやって君が随分と流されやすい性格のお陰で、人間が一人死んだようなものだというのがに」

「おい瑠美。高橋は被害者の一人なんだぞ」

「確かに被害者ね。彼はいいように利用されただけ。でもね祐介、被害者だからといって非がないわけじゃあないのよ」

そう言うのと彼女は椅子から立ち上がり、高橋の前へと歩いて行く。完全に怯え切ってしまった高橋は椅子の上で後退りしていたが、やはり真実が知りたい気持ちもあるのだろう。震えながらも彼女のことを見つめていた。

「まず君の間違いは、怪我人イコール被害者であるという先入観のままその場にいたこと。次の間違いは人を信用し過ぎたこと。そして最後は、物を知らなさ過ぎたことね。い

いえ、少し違いかしら、知ろうとしなかったことが全ての間違いのよ」

「どういう、ことですか？」

「うーん、しょうがないわね。祐介の為にも一から説明しましょうか」

よく聞いておいで、と東は手を叩く。その癖は事件のパズルのピースが揃った時の、彼女の癖だった。結末を綴る瞬間が来たのだと告げる音。その手の音は俺の気分を高揚させ、ペンを握らせる。事件ファイルの続きを残すために、俺はまたボールペンを手に取った。

「まず第一の疑問点は倉田の死でしょう。刃物も無いのに血を流して死んだ。血の吹き出し方からして頸動脈からの大量出血による死。倒れただけなのにどうしてそんなことになったのか。そこでまず疑うべきは何処だと思おう？ はい祐介」

「うーん、そうだなあ」

何故死人が出たのか。今までの事件を思い返すと、必ず死んだ前に何かが起きている。では疑うべきは、死体が生まれる直前。つまり――。

「血が出た寸前、宮崎の行動だ」

「大正解。察しはいいのよね」

「それはおかしいです！ だってあの時僕は二人の先輩を視

界に入れていたんですよ!」

「だからこそ除外してはならないのよ。視界に入れていたからといって殺人を犯していないなんて事はないわ。現に懐中電灯は消えていて、視界は悪かったのでしょうか？ それに殺せるような道具はいくらでも転がっていたようだし」

「道具が、転がっていた……？ そんなはずは、だってあそこには何も」

「あら？ おかしいわね。貴方はさっき、筆箱の中身が撒かれていたと言ったじゃない」

その言葉に疑問を持ち、メモを振り返る。先程の質疑応答の中を確認してみると、確かにその旨が記入されていた。しかし筆箱の中身が撒かれていたからといって凶器が転がっているようには思えない。ハサミの類もなかったという。では一体何が凶器になってしまったのか。筆箱に入っていて、人を傷つけられそうな、混ざっていても問題なさそうなものは。

「ああ、ボールペンか」

「ボールペン!」

俺の声と高橋の声に彼女は頷くと、言葉を続ける。

「ボールペンってね、とても便利なのよ。ファスナーを開けることも出来るし、上手くやれば心臓を一突きで殺す事も

出来る。なら勿論、頸動脈も。ましてや相手は頭を打って意識が混濁していた。薄暗い闇の中、手元を隠しながら殺すなんて簡単なことよ。それに宮崎は、錯乱していた人間を押さえられるくらいの力がある。喉に刺すのは簡単だったでしょうね」

「でも、でもそれじゃあ先輩はどうして肩に怪我を？」

「それは貴方が良い例よ。自分も怪我をしておけば被害者として扱われる。犯人と見られる可能性は圧倒的に低くなるわ。それに凶器も隠せる。頸動脈を切ったんだからたっぷり倉田の血は浴びてるでしょうし、返り血がボールペンにかかったと思えば宮崎に刺さっているボールペンの血痕は説明が付く。あとは適当に原田を持ち上げて地面に落とし、ボールペンの指紋を拭いて原田に触らせておく。原田の服にも宮崎の指紋は付くけれど、暴れたのを押さえ込んでいたのならその時のと混ざって判別はつかないから安心だわ」

「そんな」

「だから言ったのよ。怪我人イコール被害者の先入観が間違いだよね。大体、状況を並べたら宮崎しか倉田を殺すことは出来ないのよ」

う、と高橋の顔がくしゃりと歪む。そのまま顔を覆い、

堪えきれない嗚咽が部屋に響いた。それなりに信じていたのは事実なのだろう。どう声を掛けようかと悩んでいると、泣いている高橋を放置して東は解答を続ける。

「第二に、何故そんなことをしたのか。人間行動には理由がつくものよ。何故宮崎は倉田を殺そうと思ったのか。それはタカハシ君、貴方が関わってくることよ」

俯いて泣いていた高橋は、その言葉にゆっくりと顔をあげる。目は泣いたせいか真っ赤になっており、随分と痛々しい顔になっていた。

「貴方をかなり強引に誘ったのは宮崎。そして強引に誘った理由はサークルの存続。だけどメンバーは君以外は入らず、予算はだんだんと減らされていくばかり。これは一年である貴方が知らないのはしょうがないことだけれど、この学校はサークルに一部援助金を出す代わりに、成果を提出する義務がある。何でも良いのよ、要は渡した援助金が何に使われているかの確認だもの。だけどお金には限りがある。援助金も無限には出せない。……部員数も五人以下、口くいな活動報告が無いオカルトサークルが援助金対象外にされそうだったのは、確かだと思うわ」

けれど、と彼女は語るのをやめない。

「少なくとも、ビデオカメラにメモリーカードを買える程度

の予算はくれる筈よ。そもそも援助金以外にも、報告さえすればサークルが自分で賄っても良いものなの。ビデオカメラを買ってもう無理なんて、明らかに虚偽の申請が入っているわ。……つまり、リーダーであつた倉田は、予算を不正利用していたんだと私は考えてる」

高橋の目が見開く。信じられない内容ばかりで、どうしたらいいのかわからないからだろう。信じたく無いかのように首を微かに横に振り続けるが、それでも彼女は止まらない。彼女は一度請け負つた依頼は必ず全うする。それが酷い話であろうと、全てを暴いて伝えてしまうのだ。

「此処からはただの空想よ。恐らく学生課から連絡が来たのね。その連絡を取つたのが、偶々宮崎だつた。宮崎は信じられなくて、まず原田に相談をした上で三人できちんと話し合いをしたんじゃないかしら。そうして倉田は不正を認めただ。でも悪びれもしなかつた。タカハシ君、貴方と同じように単純にあの場所が好きだつた宮崎は相当ショックだつたでしょう。そんなサークルでも、彼にとつては残したい場所だつた」

「それで、無理やりの勧誘か」

「ええ。何も知らない後輩が頑張れば、この場所は残るかもしれないと考えた。もしかしたら後輩を騙す罪悪感で改心

してくれるかもなんて期待もあつたのかもね。でもそれは失敗に終わり、援助金欲しさに倉田は例のネタを持ち出した。彼は彼で、このサークルを失いたくなかつたのよ。援助金が欲しいから」

「でも、そんな、先輩達のそんな証拠は」

「じゃあ聞くけれど。タカハシ君、貴方が持つてた懐中電灯、予算から買ったの？ どうせ今だけ立て替えてくれとか言われて買ったんじゃないかしら。間違つてる？」

その言葉に高橋は俯いてしまった。凶星だつたらしい。確かに彼は流されやすいところがあるが、まさかこんなにもあっさりと手を貸してしまつていたとは。サークルに彼が来てしまつて、倉田はきつと喜んでしまつただろう。騙しやすい良い後輩が入つたと、もしかしたら宮崎に打ち明けていたのかもしれない。

「薄暗い場所。騙しやすい人間が一人。目的の悪党は打ちどころが悪く気絶中。近くにはボールペン。……確かに、気が狂つていたかもしれない。けれどその瞬間、宮崎は条件が揃っていることに気が付いてしまった。サークルを守るため、最後に自分を犠牲にしてオカルト話へと仕上げた。普段とは全く性格の異なつた人間が手当たり次第襲つたように見せるために、自分の肩に突き刺したんでしょね」

後はビデオを提出するだけで、完成したかもしれないオカルトシナリオ。しかし肝心のカメラは落下時に壊され、結局全ては水の泡となった。

「それにね。残念だけど、今回の件で貴方のサークルは解体を余儀なくされる。既に掲示板に貼つてあつたわ。三年二人の停学処分、及びオカルトサークルの解体がね」

そう。一番の水の泡はそれだった。そこまでして守つたサークルは学校によつて解体を決定されてしまつた。きつとそれが一番の悲劇だろう。宮崎が体を張つて守ろうとした場所は、罪だけを残して跡形もなく霧散した。

突然、携帯の着信音が鳴り響く。出所は高橋のポケットで、どうやら何かメールが届いたようだった。呆然とした状態のまま、すみませんと一言断りを入れて高橋が携帯を開く。そうして差出人の名前を見た途端、ガタリと音を立てて席を立ち、ただ掠れた声でみやぎせんぱい、と呟いた。

数分間、メールの文章を追うように目が行つたり来たりさせていたが、段々と高橋の顔はくしゃりと歪み、ぼろぼろと涙を零した。聴て堪えきれなくなつたのだろう、少しずつ漏れ出る嗚咽は大きくなり、床に膝を屈して大声で泣き出した。その際落ちた携帯に思わず目を向けると、そこには先程彼女が語つた概ねの内容が記されている画面が見

える。自分が倉田を殺した犯人であること、倉田の餌食になつていく高橋を見ていられなかつたこと。その他様々な事に対する謝罪、そして巻き込んでしまつたことへの懺悔が綴られており、最後はもう二度と会うことはないとの言葉で締められていた。

「これにてこの謎は終わり。命を張るほどのものじゃないつて言うのに、頑張つてしまつた男の話だつたわね」

はあと一言ため息を吐き、彼女は座つていた椅子へと戻つた。本当に彼女は依頼人に興味がないらしい。こう言う時くらい、気の利いた言葉をとほ思うが、それもまた彼女らしいところだ。こればかりは仕方がない、と気持ちを切り替え俺は高橋に声を掛けたが、高橋はショックでその場を動こうとしなかつた。とにかく椅子に座つた方がいいと話しつつ高橋の携帯を拾うと、偶々指が滑つてしまいメールが下へ下へとスクロールされていった。いけない、人のメールなのに、と思い大急ぎで戻そうとしたが、その最後の言葉に俺は動きを止めてしまつた。

『高橋。きつとお前にこの事を言つても信じてもらえないかもしれないが、どうしてもお前に言つておきたい。俺はあの時、あの瞬間に初めて殺せるかもしれないと考えたんだ。』

最初から殺す計画なんてしていない。つまり何が言いたいかというと、原田のあれに、俺は関与していない。あれは、本当に何かがいたとしか思えないんだ。俺たちを狂わせ、そして原田を狂わせた何かがいたんだ。あの瞬間、俺たちは確かに、原田では無い何かに出会っている』

そうして、最後に一行。

『高橋、頼む。お前はどうか、取り憑かれるな』

耳元でふと、女性の甲高い笑い声が聞こえた気がした。

終



護り刀

大石  
龍侑

奴が現場にやってきたのは、僕が現場についてからすぐのことで、しかし、それに僕たちが気づいたのはだいぶ時間があったことだった。

「おい、それに触るな。高いんだぞ」

そう言われてゆっくりこちらを振り向いた老人は、どう見ても一般人ではなく、何かしらの罪を犯しているに決まっていると、二年目のあてにならない刑事の勘は言っていた。

茶色の古ぼけたジャケットはどこどころつぎはぎがあり、頭に毛はなく、その代わり白い口ひげは丁寧に揃えられている。背は年の標準より少し低いくらいはやせ型で、顔にはしわが刻まれているが、目には驚くほど強い光があった。年季の入った革の鞆を床に置くと、何が入っているのか、ガチャリと重い音がして、しかし本人は怒鳴られたことに何か言うわけでもなく、カメレオンの目のように突き出た単眼のアイルーペの奥から、真つ黒な瞳がぎよるとこちらを見据えていた。

「高い」

老人は言われた言葉を咀嚼しなおすように、ゆっくりとつぶやき、飾られていた立派な日本刀を撫でた。

「そんなことは、ここにいる誰よりも知っているし、それを決めるのは私の仕事だ」

言い返されて思わずひるんだ山谷さんと違って、僕はほとんど挑戦的な目で老人をにらんだ。

「誰ですか」

「質屋。出張型の質屋です。人が死ぬというのは、何よりの質草なんですよ。とくに、こういう立場のある人の死はね、いい」

そういつて、部屋を見渡す老人は宝の山を目の前にした子供のようで、部屋いっぱい詰まった血のまとわりつくような匂いなど、まるでないかのようだった。

「ここは関係者以外立ち入り禁止です。今すぐに帰ってください」

老人は思ってもいないことを言われたように、振り向き、僕ではなく、山谷さんを見た。

「お金がいるんでしょう？ たくさんのお金が。葬式代、墓、それに……そうですね、あなたはまだ若いから、学費とかですか。金、金、金、人はどこまでいつても金がかかる。でも、こんな死に方をした、いわくつきの品々を高く買い取ってくれる人はほとんどいない」

僕が老人を外に無理やり連れだそうと足を前に出した途端、山谷さんが震える声で、僕を制した。

「つまり、あなたなら高く買い取ってくれると」

「もちろん」

あつげにとられた場の全員が山谷さんの顔を見た。

「あなたのお父さんは生前のいいお客さんでもあったし、高くときますよ。あ、言い忘れてました。私、陰屋と言います。以後、お見知りおきを」

そういうながら老人は、もうこちらには見向きもせず、刀を撫でていた。

「ずいぶん覚悟がいる方法を使ったねえ」

僕の前輩でもある同じく刑事の吉田さんは遺体に手を合わせながら、のんきなことを言った。

事件があったのは、地元でも有名な資産家でもある山谷恵三の家の寝室だ。亡くなった山谷恵三（五十八歳）は今日、九月十四日、朝の八時寝室に飾ってあった日本刀の脇差を自分の胸に刺して死亡しているのを発見された。遺体の状態から死亡推定時刻は午後八時前後。刀は心臓を貫いていて、死因は刺し傷による失血死とみられる。山谷さんは寝室の暖炉のそばで、あおむけに倒れていて、鞆は丁寧に脇に置かれ、胸から抜いた脇差を胸の上に握ったままだった。切腹に似た自殺だった。

「で、佐藤さん。あなたは何年くらい恵三さんに？」

先輩が聞いかけると、やや青い顔をした世話係の五十すぎの女性は、ゆつくりと話し始めた。

「私が山谷様のお手伝いを始めたのは、今からちようど一九年前のことです。忙しくなって家のことに手が回らなくなるからと、働き始めました」

「で、金欲しさに殺してしまつた、と」

すると、女性はキツとこちらをにらんだ。目に涙を浮かべてさえた。

「よくそんなことが言えますね」

「すいません。この人のよくあるジョークなんです」

僕は慌てて、とつてつけたように笑いながら身を乗り出し、質問を変つた。

「恵三さんを発見した前後のことを教えてください」

女性はため息をついて、先輩を一瞥すると、話し始めた。感情の高ぶりと抑えているようだった。

「山谷様はいつも七時に朝食のため下に降りてきます。でも、あの日は全然降りてこられなかつたので、一時間ほどしてから様子を見に行くことにしました。書斎にいつも鍵がかかつているのは知っていたことなので、鍵を持って、開けてみると、血まみれの山谷様がいて、慌てて、救急車を呼んだのです」



れることに少しうんざりしているようだった。長くなる  
踏んだのか、大きな黒い布の鞆を足元に置いて、冷めた口  
調で話しはじめた。

「あいつと会ったのは、記憶の中では一昨日がはじめてなん  
です。あいつは私が一歳の時に母と離婚したので、ほとん  
ど他人みたいなもんです。今だって、息子として事情聴取  
を受けてることに腹立たしささえ感じますし、父と呼ぶ気  
にもなれません」

「直近のことについて教えてくださいませんか」

「私があいつに会ったのは、一昨日の九月一二日のことです。  
手紙で呼ばれて、初めてこの家に来ました。昼頃だったと  
思います。少し話をして、夕方には帰りました。で、今日  
の朝もう一度来てみたら、家の前に救急車があつて、家の  
人に事情をきいたら……」

「あれ、でも昨日も訪れてますよね」

僕は先輩を遮るようにして聞いた。他のお手伝いさんに  
そう聞いていたからだ。た。

「ええ。昨日の六時四五分ごろに家に来ています。でもそれは  
財布をうっかり忘れたからで、あいつには会っていません。  
屋敷が広いもんで、七時半ぐらいままでお手伝いさんと一緒  
に探して、帰りました」

「なぜ今日の朝来られたんです？」

「本当は泊まっていたホテルからそのまま帰る予定だったん  
ですが、あいつにあることを断りに行ったんです」

「というと」

食いつくと、まだ若い青年は、露骨に嫌な表情でこちら  
を見た。

「刀です」

「刀？」

「はい、あいつは初めて訪れたときに、僕が二十になったら、  
代々伝わる刀をどうしても受け取ってほしいと言ったんで  
す。自分の息子はお前ひとりしかいないから、と。渋々了  
承したんですが、やつぱり受け取りたくないと思いなまし  
まして、それで、いらなと言おうと思つていたんです」

「ちなみにそれはどの刀でしょうか」

「さあ、知りません。御覧の通りあいつは刀のコレクション  
が趣味だったようで、多すぎて僕にはわかりませんが、よ  
ほど有名なものだったんでしょう。でも、正直に言います  
が私があいつのことがあまり好きではなかつたので、どう  
でもいいです。受け取る気もありませんし、あの老人にとつ  
とどお金に換えてもらおうと思います。気持ち悪いし」

「ちなみに、ホテルはどこに」

「駅前のビジネスホテルです。タクシーでここから二十分くらいでしょうか」

「そうですね、ありがとうございます」

「通り、書類を作るのに必要な最低限の聞き込みが終わったところで、先輩はため息をついた。

「よし、もういいだろ」

「僕、あの息子がどうも引つかかるんですが」

「あ？」

先輩は眉をひそめ、僕を見た。

「確かに動機は十分なほど父さんを恨んでいるようだったし、行動は少しおかしいところもあるが、完全に不自然とは思えない。別にあれぐらい父さんを恨む奴なんていくらでもあるし、それにアリバイもしっかりしている。第一、殺したとしてもどうやってやるんだ。お前も見ただろう。山谷恵三は、刀を深くまで刺して死んでいる。足の脛部分にほとんど血液が付着していないことから、おそらく、正座していたんだろう。苦しんだのか、仰向けになって刀が胸から抜けているが、ご丁寧に胸の上に本人がしっかりと逆手のまま握っているし、おかしい痕跡もない。第一、部屋は密室だったんだ。体を自在に変えられる幽霊みたいな犯人でもなかったらムリだ」

しかし僕はどうしても府に落ちなくて、黙ったまま聞いていた。

「わかったよ、お前の気の済むまでやればいい。でもな、俺はごめん」

先輩は手帳を閉じた。

警察による自殺の捜査は、形式上のものでしかない。それは、普通のことだ。

警察になつてからわずか二年。あまりにも多くの自殺した人と、その家族を見てきた。数えきれないほどの現場を目の当たりにしていくうちに、自分の感覚が擦れて、麻痺していくのがわかる。もう口を利くことのできない彼らの心に、どんな変化があったのかは、誰にもわからない。わからないから、考えるのをやめる。自殺は自殺で、ただそれ以上でも以下でもない。事件であっても、犯人はいない。だから、説明できないものを無理やり説明する書類を作成するためだけに、警察は形式上、捜査をする。この擦り切れた感覚を受け入れることが、警察官になるということなのか、僕にはまだわからないでいた。

先輩は、しばらく僕を見ると、ため息をついて外へと歩いて行った。

「先に戻ってるから、気が済んだらかえって来な。ただし、

今日中に終わらせろよ。書類作成が遅れたらゆるさんぞ」

先輩の声は、広い屋敷に響いて、覆いかぶさるように、責め立てるように、僕に跳ね返ってきた。

「いくらになりそうですか」

現場に戻ると、熱心に刀を見る老人と田中治が話していた。

「さあ、まだなんとも」

「ただね、あの刀は少し高く買いますよ」

そういつて老人が指さしていたのは、山谷恵三の心臓を貫いた、血まみれの脇差だった。

「いいものなんですか？」

「いえ、物自体はいたって平凡な刀です。この部屋の中でもダントツに安いですがね、まあお父さんと私の生前の交流を踏まえた特別価格です。これから、調べればもつと高くできるかもしれませんが。というのも……」

しかし、その言葉をはねつけるように身震いした田中治は、目をそらして、声を荒げた。

「いらぬ。あれは一番いらぬ。気持ち悪いし、大したものでもないでしょう」

「でも……」

「いらぬといったら、いらぬ。タダでもいいくらいだ」

「そうですか」

薄笑いた老人は、あきれたように青年を見た。

「それと、お父さんなんて言わないでくれ。あいつはほとんど他人なんです」

田中治は、汚いものでも見るかのような目で、血まみれの脇差を見た。

「こんなに多くの高いものと立派な刀に囲まれて、最後に握ったのは、安いなまくら刀なんて、あいつも哀れなものだ」

吐き捨てるように言うと、部屋に僕がいることによく気が付いて、まだおどけなさが顔に残る青年はうつむいて部屋から出て行った。

もう一度部屋を見渡すと、寝室というにはあまりにも広い部屋が僕の前に広がっていて、めまいのするような生活の違いに僕は少しの嫉妬さえ覚えた。隙間などどこにもない、完璧に作られた部屋の壁には、所せましと刀が飾ってあって、赤や黒にそれぞれ輝く刀たちは、均一に置かれ、それ自体が部屋の模様のようになっていた。その部屋の真ん中の一つだけ空になった台座がひと際目立っていて、脇差が置いてあっただろう台座の上には、脇差と対になっていた太刀が置いてあった。近づくものすべてを切り刻んでしま

いそうな威圧を放つ黒い鞆の太刀だった。

豪勢な部屋の装飾たちは整然とそこにたたずみ、語らず、静かだった。部屋の暖炉に少し炭が残っていたくらいで、ほかにはゴミ一つ見当たらなかった。

その部屋の真ん中で、老人は一人座って鑑定をしていた。黙々と刀たちを取りだし、切っ先を眺め、やさしくいたわるように撫で、かと思えば、問いかけるように激しく指で叩き、その音に耳を澄ませていた。老人は、それぞれの物たちにどう接すればいいのか、最初から知っている旧知の友人のようでもあり、しかし、そのあたたかな眼差しには礼節と尊敬があった。一連の動きは迷いも無駄もなく、洗練された一つ一つの動作が生み出す流れは、物に語り掛ける儀式のようで、神々しさすら感じられる。部屋には含めたくさんの人の音があったが、その老人の周りだけは、音が無いように思えた。老人と物は、確かにここにいて、それでいて、ここにはいなかった。

僕は胸につかえるものの正体をつかめないまま、ほとんど惰性で聞き込みをしていた。すると、いろいろなことがわかってきた。まずこの資産家、めちやくちや評判が悪い。三か月目の若い新入りお手伝いさん竹中さんは、噂話をす

るように僕に長々と話した。

「前から普通の死に方はできないと思つてました」

「とうとう?」

「私、このお手伝いさん募集に応募して受かったと聞いたとき、辞退しようかよつほど悩んだんです」

そう言うとき、竹中さんはせきを切つたように話し始めた。

「山谷様はあんまりしゃべらない方で、何を考へてるか正直わかりませんでした。そのせいかこの家にやつてくるのはお金目当ての人ばかりで、お友達もいなかったと思います。だいたい息子さんがお財布忘れてとりに来られた時だつて、自分は部屋の奥にこもつて一緒に探してもしないで。息子さんこの広い屋敷で少し迷子になつたみたいで、私たちも息子さんを見失なつちゃうし、財布も見つからないし、大変だつたんですから。私なら一緒に探しましたよ。ちよつと変な人なんだと思います」

「それに」

ここで竹中さんは声を落としました。(が、十分大きな声だつた)

「若い頃に一度お酒飲んで人を殴つて逮捕されたこともあつて、有名なんです。株やビジネスの才能だけはすば抜けていたんですが、あまり外にも出ないので、外での評判

も悪いみたいで、景気が悪くなったりすると、妬んだ人や  
変な団体からしょつちゅう殺害予告が届いたりするんです。  
傍から見れば、富を独り占めする、極悪人というわけですね。  
なので、評判は最悪なんです。でも、ここのお給料はどつ  
てもいいから、私は仕方なく応募したんです。そうでもし  
ないと人が来なかつたんでしょね。でも山谷様の崇りを  
見たという人もいたし、私もできるだけ早くここをやめま  
す。どのみち、早くやめたいと思つてましたし」

しかし、この資産家への評価は数少ないベテランからす  
ると別のものとなる。

佐藤さんの次にベテラン、十年目の浪岡さんは、急な主  
人の自殺に困惑しつつも絞り出すように記憶を話してくれ  
た。

「不器用な人だつたと思うんです、私は」

そう言う彼女はまつすぐ目で僕を見た。

「悪い評判ばかりで、私も最初は怖かつたんですが、五年目  
くらいから、やつと何を考えているのか、なんとなくわか  
るようになって。実は優しい人だつたんじゃないのかなと、  
今でも思います。私が失敗したときも、いつも見て見ぬふ  
りをしてくれて、怒ることはほとんどありませんでした。  
それに、亡くなる十日前に、殺害予告が届いて、私たちは

いつもすぐに処分するんですが、その日はたまたま、それ  
を山谷様が直接受け取つてしまつたんです。それを見て山  
谷様は最初は何も言わなかつたんですが、夜、寢室の前を  
通りかかると何だか、すすり泣く声のような音が聞こえた  
んです。いくら知らない人からとは言え、シヨックだつた  
んだと思います。だから、なんというか、こういう最後になつ  
てしまつたのは、本当にかわいそうです。相当、思うところ  
があつたんだと思います」

そして、お手伝いさんの間での奇妙な崇りの噂を聞くと、  
浪岡さんはそれを一蹴した。

「亡くなつた日、財布を探して庭に行つていたお手伝いの一  
人が、屋根の上で人魂を見たといつたんです。青い人魂で  
ゆらゆら揺れているのを見たつて。日が浅い子たちは恨ま  
れたとか呪われるとかなんとか言つてましたけど、たとえ  
こんなひどい死に方でも、そんなことをするような人じゃ  
ありません」

僕がその話に興味を示すと、浪岡さんは怪訝な顔をした。  
「刑事さんまで、そんな噂話を気にするんですか。申し訳な  
いですけど、私はさつきもあの奇妙な質屋に根掘り葉掘り  
聞かれたばかりで、うんざりなんです。もつと詳しく知り  
たいのなら、別の若い子に聞いてください」

僕は思わず顔を上げた。いらだちがふつふつとわいてくるのを自分でも感じた。

「あのじいさんそんなことしてるんですか」

「ええ、あなたに話したとおんなじことを話したと思います。他の人はどうか知りませんが」

「ありがとうございます、と口早に切り上げた僕は、あの老人を探すことにした。

「なにを探偵の真似事なんかしてるんですか？」

皮肉たっぷりに言うと、老人は手にしていた柵のワインを眺めながら、目につけたアイルーペを外し、ポケットに入れた。

「それは刑事さんのことですか？」

僕は老人を睨みつけた。

「あんまり余計な口をきくと、課長のお気に入りだか何だか知らないが、逮捕するぞ」

「するならどうぞしてください」

そうして冷めた目で老人はこちらを見た。

「私は何も犯人が知りたいわけじゃない。鑑定をしているだけですよ」

「人の鑑定ということか？」

「とんでもない。あいにくだが私はそれが最も苦手なんです。人の感情は、私たちが一生かかっても理解できないほど深く、この世に存在するものの中でも特にわかりづらい。私はね、刑事さん、物の声が聴きたいんですよ」

「声」

「そうですね、物の声、つまり意思です。あなたにわかってもらえるかどうか、わからないが、意思というものは物にも宿る。物が勝手に考え出すわけじゃない。正確には、物に人の意思が宿るんです」

「オカルトですか」

「とんでもない。私はあんまりそういうのは信じないんだ。しかし、物たちの声はあなたもよく知っているはずですよ」

そう言うと老人は僕の手を覗き込んだ。

「例えば刑事さん、その腕時計は、だいぶ古い型のお見受けするが、どういう経緯であなたの手に？」

「これは…」

僕は手につけた古ぼけた腕時計を見た。

「これは、同じく刑事だった祖父のものです。祖父が亡くなる直前に、私にくれたもので、以来、ずっとつけています」

「それはいい。では、例えば、まったく同じ型の物を私が持っていたとして、刑事さんはそれを交換できますか」

「いいえ。絶対にしません」

僕は息を飲んだ。老人が言わんとしていることが、僕の目の前にあった。老人は、微笑んでいた。時計に向けられた、語り掛けるような優しい微笑みだった。

「そうでしょう。それはあなたのおじいさんと、刑事さんの大切な大切な時計ですから、例えば同じ型のまったく同じ傷がついたものであっても、それは別物です。あなたのおじいさんがその時計を渡したとき、いろいろな想いを込めたと思います。そして、あなたはそれを受け取って、身に着けて仕事をしている。おそらくそれを見るたびに、あなたはおじいさんの想いを感じ、励まされてきたはずですよ。確かに、それを科学的に証明することはできません。しかし、だからと言ってそこに意思がないといえるのでしょうか。確かあなたを励まし、同じ時を刻むその時計が、なんの声も持たない、ただの物体であると、言い切っていないでしょうか」

老人は僕をまっすぐ見た。

「だから、私は物の声が聴きたい」

今、建物の全ての物たちが僕に語りかけてくるような気がした。

「そのものが、どうやって、どういう人に、どういう気持ち

で所有されていたのか。それは物の意思であり、声であり、すなわち価値です。鬼を切ったと伝えられる刀にはたとえ物が同じ刀があったとしても、価値が生まれる。芸術家の全盛期に大量に作られた作品よりも、生涯を閉じるその最後に、残り少ない時間に抗いながら作った作品の方が、価値がある。それは物に人の声があるからです。今回の場合も、同じです。山谷恵三がどういう想いを託したか、それを知らないことには、私は鑑定などできない。声を聴く必要がある。それが私の質屋という仕事なんです」

老人はワインを棚に戻した。

「おわかりいただけただけでしょうか」

僕は、なにも言わなかった。窓から射す、オレンジ色の光が部屋を満たし始めても、僕は声を出すことすらせず、まじまじと老人を見ていた。しばらくして、僕はやっと声を出した。

「では、あなたの推理、いや、物が言っていることを聞かせてください」

「いくらだせますか？」

「お金がいるんですか」

老人は心外だというような顔をした。

「当たり前でしょう。鑑定というものは一見価値のわから

ないものに、見ることででき、誰にでもわかる値段という価値をつけることです。つまり、値段というものはそのまま価値なんですよ。あなただつて、刑事の仕事に給料という見合つた価値をつけてもらうから、今こうしてやってるわけだ。無給という訳にはいかないでしょう。私にとつて、値段がつかないものには価値がないのと同じなんですよ」

僕は、出会つたときの老人の言動を思い出し、半ばため息をつきながら、財布を取りだした。

「わかりました。いくらでしようか」

「そうですね、今回の場合、まだ確定ではないのですが、私の考えが当たっているのなら、一億ぐらいでしようか」

「い、一億っ」

僕は思わず財布を落とした。

「これでも安いほうですね」

「聞いた僕が悪かつたです。僕には僕の信じるものがある。

僕だつたら、そんな値段、絶対に請求しません。だから、自分でやることにします」

「そうですね、せいぜい頑張ってください」

僕は財布を拾つて、書齋を出ようとすると、老人は、僕に向かつて思い出したように呼び止めた。

「私は最初、人間どこまでいっても金がかかると言いました

が、例えば単純に“行く”ということにさえお金がかかる場合があることをお忘れなく」

僕は狐につままれたような顔で、ゆっくりと部屋を出たが、頭の中には老人の声が延々と響いていた。幽霊のような犯人、人魂、いろいろなことが頭の中を駆け巡る。その時、僕は自分の中に引つかかっていたものの正体をつかんだような気がして、近くにいたお手伝いさん呼び止めた。

「すみません。そういうえば、忘れ物を取りにきた息子さんは何でこちらまで」

「タクシーだつたと思いますよ。大きな黒い鞆を持っていたし。あれ、でもそういうえば帰るときは確か持っていなかつたような……」

「どうもありがとうございます」

僕は言うが早いか走り出していった。向かう先はもちろん、屋根の上、煙突の先だ。

日が暮れてから、僕は寢室に田中治、第一発見者である佐藤さん、老人の三人のみを呼び出した。

「田中さん、あなた、私に嘘をついていることがありますね」  
そういうと、田中治は少したじろいだ。

「まず、初歩的なミスとして、あなたは十三日の夕方、財布

を忘れて取りに帰ったと言いましたが、では、十二日、ホテルに帰るまでと、忘れ物を取りに来るまで、いったいջえんたいどうやってここまでできたんでしょうか」

「それは、タクシーです」

「そうですか、財布がなくてお金が払えないというのに？」

「それは、非常用のお金があったんです。鞆に入れていたんだ」

「非常用のお金があったのなら、屋敷を総動員してまで焦つてくることはないでしょう。今日の朝、刀の受け取りを拒否するついでにすればよかったですは？」

「刑事さんだつて、財布がないのは不安でしょう」

「わかりました。では、そうだとして、田中治さん、あなたは十三日の夜、本当に財布を探していたんでしょうか」

僕は田中治の瞳を探るように見た。

「僕が考えるに、あなたは、十三日の夜、財布を探すふりをして、屋上へと向かった。山谷さんが寝るのは七時すぎと知っていたから、煙突の上で大量の練炭に火をつけ、不燃性の紐のようなものを使って、練炭を煙突から一つずつ部屋の暖炉へとおろした。屋上の煙突には、紐の跡のようなものがありました。お手伝いさんたちが見た人魂は、あなたが練炭に火をつけるために用意したガスバーナーの青い

炎だったわけです。それからあなたは、黒い鞆をそのまま煙突の蓋として下に押し込み、一酸化炭素を部屋に充満させた。暖炉に練炭があることを誰も怪しいとは思いません。しかし、今はまだ九月初旬、よく考えてみれば、暖炉なんて、使うはずがないんです」

「すばらしい」

老人がいきなり声を張り上げたので、僕は驚いて老人を見た。

「刑事さん、ありがとう。これで鑑定は完了だ。私一人ではできなかった。助かったよ。どうも私の老いぼれた、か弱な足腰は、屋根の上の煙突を調べる余力を持っていなくてね」

「いや、まだ私の話は終わっていません。まだこの佐藤さんに聞きたいことが……」

「いいえ刑事さん。ここまで来たら十分です」

僕は強引に話を終わらせようとする老人に困惑して、声を荒げようとした。しかし、そこで老人は静かに言った。

「では、田中さんはいったいどうやって山谷恵三さんの胸に脇差を刺したのでしょうか」

「それは、一酸化炭素中毒で倒れている山谷さんに佐藤さんが……」

「いいえ、それはあり得ません。大勢のお手伝いさんの目がかいくぐつて、血が服につくような大変な作業を佐藤さんが実行できるはずがありません。私のいうことが信じられないのなら遺体をよく調べてみるという。おそらく、遺体からは致死量の一酸化炭素は検出されずはじです。検出されたとしても、せいぜい軽傷で済む程度だ」

「では……」

老人は僕の手をつかみ、まつすぐにこちらを見た。黒い瞳には、確信があり、そこにうるたえる僕が映っていた。

「ここからは、私の鑑定をお伝えします」

「その気になったんですか。ずいぶん早い、心変わりですね」

僕は老人の手を払い、老人を軽蔑の眼差しで見た。

「いいえ、これは物の声です。もとからこうする予定でした。お金がいるのは、あなたが刑事という立場でかかわるときのみです。つまり、今からあなたに刑事として聞いてもらうことはできない」

「どいうことですか」

「今から話すことを誰にも言わずに、秘密にしてください」  
理解するまで、僕は答えられなかった。

「そんな…僕は、僕は、刑事なんです。そんなことを許せるはずがない。悪を問いたただすのが、私の仕事です」

「ならば、あなたに聞かせることはできない。十分ほとぼりが冷めてから、私があなたのいないところで話すことにします。刑事さん、人というものは白と黒だけに分けられるわけじゃない。それとも、一億円を払いますか？」

老人は、鋭く言い放った。

僕は、老人と、部屋の床に広がった血のシミを交互に見た。血は黒く、床にぼっかりとできた穴のように広がっている。

底は遠く、暗い。

「わかりました。ただし、新たに危害を加えられる人間がいる可能性があれば、私は職務を全うします」

「よろしい」

老人はうなずくと、振り返り、田中治に向き直った。

「刑事さんの推理は途中まで当たっているはずですよ。なぜ血のつながった父を殺そうとしたのか、教えてくださいませんか」

「……母さんのためだ」

田中治は深く息を吸い込んで、無理やり絞り出すように記憶を話し始めた。声は冷たく、怒りに満ちていた。

「二年前、母さんが死んだ。交通事故で、俺の目の前で車にはねられた。俺は母さんからあいつのことをほとんど聞いていなかったから、自分に父がどんな人だったか、知りも

しなかった。母さんが死んで初めて、俺は母さんが一方的にあいつに手紙を送っていることを知った。そしてあいつからもお金だけが送られているのも初めて知った。昔から母さんは夜、夢にうなされたりする時に、あいつの名前を言うんだ。母さんはあいつを愛していた。それなのに、あいつは一向に俺たちのところへ来てはくれなかった。

母さんが自分の知らない人の名前を一生懸命呼ぶ、その隣に、俺はどんな気持ちでいたと思う？ さみしくて、惨めだった。あいつから母さんへの手紙は、一枚もなかった。母さんは、車にひかれて、下半身がぐちゃぐちゃになっても、俺の腕の中で、俺の名前とあいつの名前を呼びながら死んだよ。俺はあいつによく似てるとも言った。まだ一歳の俺を抱えた母さんを簡単に捨てたあいつが許せなかった。母さんは、最後まであいつの妻だった。だったら一生あいつにとらわれて死んだ母さんの人生は、いつたいなんだったんだ」

血まみれの床に田中治の涙が染み込んでゆく。

「だから、殺したかった。今回が初めてじゃない、何回も殺そうとしたんだ。母さんのためだ」

田中治は、歯ぎしりをして床の血の跡を見た。

「でも、俺が殺す前に、あいつはくたばった。自分で、無様に

俺がやったんじゃない。あいつは自分に負けたんだ」

「それは違う。それだけは違います治さん。山谷様は、あなたのことを愛していました」

佐藤さんが、涙をぼろぼろとこぼしながら、震えた声で、言った。

「山谷様が、あなたのお母さんと治さんと別れたのは、家族のためです。私がこの家に来たのはあなたが生まれたからで、私はお母さんの冬美様とも仲が良かった。最初はうまくいっていましたが。でも、山谷さんがお酒で失敗して逮捕されてから、世間での評判が悪くなって、不景気の波もあり、山谷様は、自分と一緒にいることで、冬美様と治様がつらい思いをすることを恐れた。人というのは恐ろしいのです、治様。裕福で極悪人の息子と妻は、この国では普通の人ではいられない。二人はそれに一生付きまといわされて、生きてゆくことになる。だから、山谷様は、冬美様を説得して、他人として生きていくことにしたのです。山谷様は十九年間、ずっとそれに苦しみ、耐えていました。冬美様から定期的に送られてくる治様の成長記録を何よりも楽しみにして、時には隠れてあなたの様子を見に行った。あなたの自慢話を私はよく聞かされていました。でも、自分からは、絶対に接触しようとはしなかった。すべてはあなたの、

治様のためです」

佐藤さんは、泣きながら続けた。

「二十歳になったとき、山谷様は治様にすべてを打ち明けつつもりでした。でも、冬美様が亡くなって、あなたに信じてもらうすべを失ったのです」

「そして、山谷恵三さんは自分が心の底から息子に恨まれていることも知った」

老人は寝室に置いてあるワインを手を取った。

「山谷恵三さんは、あなたが自分を殺そうとしているのを知っていたのです。毒入りのワインが定期的に送られてくることも、知っていました。逮捕以来、お酒を一滴も飲まなくなつたと有名な山谷さんにお酒を送る人は、あなた以外、ほかにいませんでしたから。おそらく山谷さんは自分を殺そうとしている物であっても、息子からの贈り物が捨てられなかつたんでしょう。こうやって色々な部屋に置いてたままになっています。すべて、手に取れる高さで」

ワインを棚に戻すコトリという木の音が、部屋に響いた。

「十日前、あなたから殺害予告が届いたとき、あなたの字をよく知っていた山谷さんは、息子が書いたものだとわかつて、本当にショックだったのでしょうか。説得しようとなあなたを呼び出しました。が、どうしても言い出せなかつた。

山谷さんが考えるよりはるかに、あなたは父を恨んでいた」  
老人はゆつくりと暖炉に近づき、その中を覗き込んだ。

「そして昨日、事件が起きた日、山谷さんは寝室でめまいと吐き気、頭痛がすることに気付いた。それが窓を開ければ助かる一酸化炭素中毒の初期症状とは気づかず、なんらかの方法であなたが自分に毒を盛つたのだと思つた。そこで、朦朧とする意識の中で山谷さんは毒が体に回りきつてしまふ前に、自分で死のうと考えた。そうすれば、死因は自殺となるし、あなたが犯罪者になることもない。山谷さんは、自分と同じ道愛する息子には歩ませたくなかつたんです。そして、山谷さんは、あなたを守るため、自分の胸に刃を向けた。それを、物たちが語っています」

老人は血まみれの脇差を手を取つて、私たちに見えるように見せた。

「これは、脇差ではありません。対になっている太刀は昭和以降に作られた作で、まったく関係がない」

そういつて、老人は血まみれの刀の丸い鍔つばの部分を手を軽くたたいた。すると、鍔は簡単に取れ、音を立てて床に落ちた。「一般的に、短刀と脇差との違いはこの鍔があるかないかで決まります。この刀は、合口拵え」という作りになっていて、鍔をつけられるようには作られていません。おそらく、昭

和あたりに飾るために誰かが鏢をつけて太刀と対にし、脇差に見せかけたのでしょうか。つまりこれは、短刀という種類の刀になります」

「それがどうしたんですか」

「これが短刀であるということが重要なのです。刑事さん、山谷さんは胸の上に刀を逆手で持っていたんですよ」

「はい。そうです」

「つまり、息絶える間際、わざわざ短刀を胸から抜いて、刃先を下にして胸の上に置いていたということですね」

僕が相槌を打つのを見て、老人は話を続けた。

「実は、刃先を下にした刃物を胸の上に置くというのは古くから葬式で使われるものです。宗派や、地域などによっても違いがありますが、鏢のついた脇差ではなく、短刀を使うことが多い。その場合、刀が悪いものを遠ざけたり、故人の穢れから生きている人を守る、という意味合いがある」

老人は、しゃがんで山谷恵三さんの血の跡を見た。

「おそらく、これは山谷さんからのメッセージです。この短刀が脇差ではないことを知っていたのは、山谷さんただ一人でしょうから、とっさに思いついたのでしょうか。もしかしたら、私がここに来ることさえ見越していたのかもしれない」

老人は黒い血の跡を見た。

「死してなお、あなたを守るうとして」

田中治は、呆然とし、息を震わせ、まじまじと真つ黒な血を見つめていた。俺は、と、時折言いかけるも、言葉は出てこず、息をすることさえ苦しうだった。彼の瞳には、一八年越しの父の愛が、床にできた真つ黒な穴に、底のない暗闇のその奥に、見えているようだった。

「この刀に刃はまだ秘密があります」

そういうと老人は短刀の鞘を取り出した。

「先ほど、これは短刀だと言いましたが、これは江戸時代に作られたものです。短刀は武士以外の人々も男女にかかわらず護身用として持つことが多く、遠くへ行くときなどに持っていました。その場合、ごくまれに、路銀入れ」という細工がなされていることがある。もともとは鞘の部分に金や銀などお金や大切なものを隠し、人から守るためのものです」

老人は短刀を鞘に収めた。カチリと音がした。

「それが、この短刀にもついている」

そういうと老人は、鞘の上の部分に触った。すると、鞘の木の一部がずれて、空洞が現れ、そこから、小さな骨と、乳児の歯、そして折りたたまれた手紙のようなものが出て

きた。

「おそろく、この歯はあなたの小さいころのものでしょう。そして、この骨はお母さんのものと思われます。確か事件の前日、あなたは山谷さんに代々伝わる刀を受け取ってほしいと言われていましたね。山谷さんが二十になったとき、あなたに渡したかったものはこれだったのだと思います。あなたへの手紙です」

老人の語気に初めて怒りが感じられた。穏やかで重く、悲しみが満ちた怒りだった。

「しかし、あなたはこの刀を気持ち悪く、安いなまくら刀だと言つて、いらぬと言つた」

田中治は、うつむいた。涙が滴り落ちる。しばらくの沈黙の後、彼は口を開いた。

「俺にそれを買い取る権利があるのかわかりませんが、売つてくれませんか」

老人は鋭く、田中治を見た。

「一億円と言つても？」

「一生かかっても、自分の稼いだお金で買いに行きます」

「本当にできるとお思いですか？」

田中治は、涙を拭い、顔を上げた。

「ええ、俺は……俺は、父さんの子ですから」

その瞳には、光があった。

「その言葉を、待っていました」

老人は顔をほころばせた。

「この品は質預かりとします。期限はありません。あなたが、命を捨てても守りたいと思える人ができたとき、私のもとに来てください。一億円は祝い金として、そっくりそのままお返しします」

老人は、青年に背を向けた。

「それでは」

短刀…(たんとう) 長さが一尺(30.3cm)以下の刀の相称。用途や差し方によつて名前が変わり、刺刀、懐剣、鞘巻などがある。また、邪気や厄災を払うものとして扱われた。またの名を、護り刀。

了

次に会うときは四角い箱の中

熊谷 美咲

1、 出合い

「はじめに言っておくが、僕にとつて君は衣食住を共にするだけの他人だ」

人生初めてのお見合い。都内の中でも有数の料亭・佳月。その最奥の広めの個室を指定してきたのは、ほかならぬ目の前の男だった。呆然とする私をよそに、前菜を粛々と口に運んでいる。その小鉢一つでお札二枚と言ったところの高級店で、どんなもてなしをされるか一週間前から悶々と考え、どう対応したものか悩んでいたが、どうやらとんだ杞憂だったようだ。要は人目を憚っただけだったのだ。

「はあ」

「僕にも世間体を気にする繊細さはある。しかし、生まれて二十五年。こと愛などというものについて興味を持たなかった。僕も悩んだ時期はあったが、それも今思えば馬鹿らしい。僕の将来を悲観していた両親も死んでいる。……僕の家は六人兄弟で僕は末っ子だからね。今はその兄たちがたいへん気にしているのさ」

一目見て清潔感のある人だとは思ったが、ここまで動きが硬く、どこか居心地が悪そうなのが見て取れて、どうやら今日のためにご兄弟が彼の身だしなみを整えたようだ。それも開口一番、徒勞に終わったようだ。

「だったら、政府通達が来るまで待てばよかったのでは」

「おいおい。よしてくれ。社会性のない売れ残りに、下手すれば仕事もしてない相手を指定されたらどうするんだ。それは僕にもわかるぞ。しかも」と、そんな暴言も運ばれてくるコース料理の前では鳴りを潜めた。

売れ残りは自分も、そして目の前の男もそうなのだが。彼も私も二十五で、未来法によつて記された結婚年齢の猶予期間もラストだ。人のことを言えないが、彼がなぜそんなに行き遅れているのが、出会つて数分でありありと伺えた。

給仕ロボットが去つたのをしつかり確認して、一つ咳ばらいし気を取り直して彼は続けた。

「その点、君はとても完璧だった」

突然の賛美も冷めきつた心中には響かなかつた。スプーンですくつた冷製スープのほうがまだ温かい。

「僕と同年であの教育機関に配属し、一点を除きとても評判だ。君にとつても悪くはないじゃないか。そのただ一つの汚点を解決できる」

もはや私は目の前の男に感嘆していた。ここまで身勝手な前時代的男尊女卑は今までアプローチしてきた男性の中じゃいなかった。

「あなたは何をされているのですか？」

「僕は自営業だ。いわゆる便利屋だな」

もう何も言うことはなかった。私たちは淡々と上辺だけの会話を交わし、乾いた喉を格別の酒で潤しては、芸術ともいえる料理の数々で腹を満たしていった。

外へ出ると、今回の仲介人と彼の兄であろう三十代後半の男が待っていた。名前はきいたが、忘れてしまった。ヒトシさんかタケシさんだったような。そんな彼はどうにも本人よりも緊張した面持ちで、神経質そうに私に問いかけてくる。

「ああ、春日井さん。どうでしたか、弟共々初めてのお見合いだっただけですが」

どうやら話で聞いた、結婚について心配されているというのは本当に真に迫ったことらしい。息遣いや気迫が違う。執念すら感じられた。

「はじめに、私は一緒に暮らすだけの他人だと言われました」  
そんなひきつった笑いがより口角を上げ、とても不格好になる中、彼の兄はたいへん気遣った声でそうですか、とだけ呟いた。あまりのことにかける言葉も失っているらしい。

仲介人が苦い顔で便宜上、私と彼との間に立ち、いかが

だったでしょうか、と問いただしてくる。彼は黙ったまま、余裕そうな態度で店前の庭園を眺めていた。その緩んだ空気の私に私はまだ、

「今回のお見合いを受け、彼と結婚することに決めました」  
と真面目に返したのだった。

彼の兄と仲介人が法然としている中、私は振り返って彼を見た。彼も視線に気づくとお見合いの最中では碌に見なかつた私の顔を見つめている。

「改めて、よろしくお願ひいたします。羽麓<sup>はづし</sup>さん」  
「ん、よろしく頼む」

丁寧にお辞儀した私の頭の前で、羽麓サジは当然といったように見下ろしているだけだった。

## 2. 背景

思春期の生徒たちの世話は何年やつても慣れない。まず、こうしたほうが良いというような定石はないに等しい。まだ未性分者でアンバランスな時期の子供たちを狭い部屋に押し込める方がおかしいとも感じる。

授業終わりの放送が館内に響き、椅子の上でじっとしている生徒たちも帰宅の合図をいまかいまかと待ちわびている。

「明日は月一回の未来授業です。相談事や少しでも聞きたいことがある人は紙に書いておきましょう。では、また明日」

各教室時間に合わせて、いっせいに挨拶を終えるとドアのロックの解除音とともに、騒がしい子供たちの声があちこちから響いてくる。何年も聞いてきたこの日常の声はいっ聞いても私に安心感を与えてくれた。鬱屈とした仕事場だが、この解放感だけは本当だった。

「先生」

職員室に向かおうと教室の扉をくぐった際、廊下の右側から声がかげられた。見てみると、受け持っているクラスの子がおずおずとした態度で立っていた。ネームプレートには、「H5-107」とあった。ああ、最終学年かとその子の言わんとすることが聞かずともわかった。私は近づいて、どうしたの、と背丈の小さいその子に合わせ、かがんで見せると安心したように話し始めた。

「明日の未来授業のことなんですけど」

やはり。未性分者は十五歳に自ら性別を決める。五学年は早い人で中期の時点で、性別を選択している人も多い。今は後期の中頃なので、この子は周りがどんどん「成人」になっていく中で焦りを感じているようだった。

「イオナさんはどっちがいいと思ってるのかな」

イオナ。よほど旧い家でない限り、基本的には成人になってから名前を決めるのが定例なため、子供たちには数字が割り振られる。教育機関の初等部を「N」、中等部「M」、高等部を「H」として、各五年ずつ。それがネームプレートに印字される。都内有数の教育機関である此処はそれなりに生徒数も多く、彼女は今年度一〇七番目の子供のように。しかし、番号で呼ぶのはなんだか無機質に思えるので、「107」だからイオナと呼んでいる。

「……わからない。でも、家庭演習はすきな。口調も女人っぽいほうが楽。でも、周りのアラキくんとかはかっこよくて」

「春日井さん。明日の件についてなんだけれど、あら」

齢四十超えるか超えないかの女性が隣の教室から出てくる。この教育機関に勤めて二十年近くの大先輩の礼子さんだ。

あまり隣のクラスの先生とは関わることがないため、イオナの体が少しこわばる。対して、礼子さんはとても穏やかな笑みを崩さずに、私と同じようにかがんで問いかける。「あら、あなたこの前先生たちにケーキを持ってきてくれた子かしら」

イオナは答えないが、確かに先日演習の余りをクラスの

子たちで職員室に持つていかせた記憶がある。

「ええ、そうですよ」

ね、とイオナに笑いかけると、僅かだが首を縦に振るのだった。

「ああ、そうだわ。あのケーキとつてもおいしかったのよ。将来は立派なお嫁さんになれるわね」

「……そうですか？」

ほんとよ！ と心底感嘆する先生を見て、イオナは固くなった体にふっと力を抜いて、ありがとうございます、と小さな声だがお礼を言っつて、私にも挨拶すると下校する子供たちの群れの中に消えていった。

「さ、職員室行きましょう。明日のためのミーティングとい忙しいわ！」

満足そうな礼子さんとは裏腹に、私はどこもつかない目で子供たちの群れの中を見つめる。

「未性分者はホルモンバランスが不安定だから、精神や自己決定もあいまいになってしまうの。生徒たちの素質や傾向を見つっつ、アドバイスするのが大切よ」

「ありがとうございます。参考にします」

次の日に集めた自己未来表の性別欄は、毎年の通り、男女半々びつたりだった。

### 3. 前提事項

「絢爛豪華というのはいくつ景色をいうようだ」

あれから半月経ち、私は教育機関の職員なため、休日以外は館内から外へ出ることはない。サジも自由業でも一応稼いではいくのか、平日は忙しいようだが、休日は時間を空ける気づかいを持っていた。

「ようこそ！ 我が社の最先端の技術、発明をとくとご覧あれ！」

日本一の技術社RBCの商品発表、および展覧会は全国の要人数千人を集めたパーティーだが、その経済効果は計り知れない。いつもよりも見た感じ、若い人も多く、芽のある実業家たちを中心に集めているようだ。今回はより気合が入っているらしく、サジの言うように眩いばかりの光景が室内でありながら広がっている。

「どれだけ光度屈折と視覚誘導をすれば、天井に空が出来上がるのやら。もはや壁が見当たらない。無限に広がっているのか、ここは」

普段飄々としている彼も啞然としている。私は二回目なので、慣れたものだが初めて来たときはあまりの興奮ぶりに連れてきてくれた礼子さんに「落ち着きなさい」と笑わ

れたものだ。

「これぐらいになると平衡感覚がうまく保てないも入るので、極めて少数ですが、人によつては酔つてしまう人もいます。そこが改善点だと前回話されていましたね」

「なるほど、確かに今にも頭が割れそうだ」

サジはその極めて少数の中の一人だったようだ。本人の希望のもと、夫婦だから連れてきたとはいえ、彼自身ここに用はない。

「具合が悪いなら、先に帰ってしまったでもいいですが」

「いや、馬鹿を言え。こんな機会めつたにないんだ。地を這つても楽しませてもらう」

……そうなつたら、是が非でも背負つて帰ろう。顔色は悪そうだが、その猫のような切れ目はギラギラと獲物を探すかのように輝いていた。新しいおもちゃを目の前にした子供のようでもあった。

「おー。全体的に若い人が多いな。仰々しい格好ばかりだ」

「そうですよね」

並んでみると、彼の背は私よりも一回りは低い。筋肉量も人並みとはいえず、かなり細身だ。私は一応、我が教育機関の代表としてきているので、いつもは着ないような青いドレスと苦手なハイヒールを履いている。あまり似合っ

ている自信はない。

「お前たち、教育機関は何を目当てに来たんだ」

「新型のタブレット、あとはこの前夜中に逃げ出した子がいたのでセキュリティ系を一通りですね」

本当は違う。自律神経に作用して、一定の興奮状態、リラックス状態にできるといふ医療機器を教育機関は求めて、私をこの展示会パーティーに送り込んだ。カウンセリングに使うという。しかし、建前はあるとはいえ、私はサジの前では口に出さなかつた。そのサジはさして興味なさそうに「ほー」とだけ呟くと、ひとときわ騒がしいステージの方へ歩いて行つた。

ちようど予告でかなり期待されていた携帯映画スクリーン（ペンライトのような大きさと形をしている）が発表されていた。

ステージの上で中年の端麗な男が商品を扱つて見せ、宣伝を兼ねた女優が豊かな胸と陶器のような手足を短い裾から伸ばして、あらゆる視線を惹きつけていた。誰も件の商品など目に入っていないのではないかと思うほどだ。

ハツとする程、美しくて私はもの悲しそうに彼女を見ていたが、すぐに視線を外した。

「荒牧トオルか」ぐちゃぐちゃの心境の中、不意にサジが呟

いた。

「……意外です。女優の名前なんて知らないものだ」と

「俺の家にテレビくらいある。毎日のように出ているじゃないか、あれは。目の毒なくらい派手な女だ」

素直にほめることができないのか、この男は。少々、苛立ちもあつてその発言を無視し、歩幅の小さい彼をおいていくように先に進んでいく。彼は「はぐれたらどうするんだ」と、早足で追ってくる。

「隣の男も、流行りの俳優か何かか」

ああ、そうかと勝手に納得してしまう。確かに初めて見る人は荒牧トオルに劣らないあの容姿とトーク力に、そのような誤解をしてしまうものなのかもしれない。

「社長ですよ」

「ん？……なるほどセールストークだったか。代表自ら、壇の上上がるとは恐れ入る」

サジは目を見開いたのは一瞬で、さして驚くこともなく淡々と理解したようだ。……あのRBC企業の社長を見て、この反応は日本国民からして珍しい部類に入るのではなからうか。基本的にRBC代表取締役社長の有我氏はこの撮影禁止である展示会パーティーにしか顔を見せない。幻の存在ともいえる。

「今と言いい、お見合いと言いい、あなたって、結構変わっていただきますよね。なんというか、堂々としていて。あと、なんかときどき詩的ですよ」

「何をいまさら。有限な時間の中で、人間が考えられる物事は限られてくる。だったら、無駄なことは考えないようにしているまでだ」

愛とかどうとか、とサジは恨みがましく吐き捨てた。

一通り、目的のもの以外は見終えたところで、私は履きなれないハイヒールもあつてか、端のラウンジで座り、一息入れていた。

「無料ドリンクバーに並んでいいものじゃないぞ。これは」

「こんな昼間から酒ですか」

「別に酔わない程度にしておくつもりだ」

見合いの時の酒と勝るとも劣らないものが、ズラリと並ぶラウンジは人も多く、その分給仕ロボットも多かった。ここ以外にも、自動的に会場を巡回しているようだった。ロボットはどれも同じ形や大きさで、それは法律でも決まっている。白くて大きいさの違う四角い箱が三つ積み重なっているような、そんなロボットらしいロボットだ。とてもかわいい。

「なんでどこもあんな角ばった機械なのかしら。和室にあん

なのいたら雰囲気ぶち壊しもいいところよ。今の技術つてそんなに遅れてないでしょうに」

荒牧トオルだった。見間違えるはずも、聞き間違えるはずもなかった。先ほどとは打って変わって、地味な黒いドレスとパンプス。露出も少なく、サングラスをかけている。ラウンジはごった返していて誰も気づいていないのか、最新の視線誘導デバイスでもつけているのか、平然と彼女はそこにいた。

「いや、今だったら限りなく人間に近いロボットなんぞ、容易く量産できるだろうな」

「あら、そうなの」

目の毒な美人、を間近で見てもサジの態度は変わらない。少し彼女を見つめた後、すぐに飄々としたつかみどころのない姿勢で、淡々と話す。

「しかし、それじゃ未来法をつくった意味がない」

「……どういうこと？」

未来法、制定されてはや百年。馴染みすぎて、テストでは当たり前に出るものの、大人になると細かに覚えている人は少ない。最低でも、十五までに性別を選択する、二十五までに結婚する、程度にしか認識していない人も多い。事実、教育機関、国務機関、真実機関を目指すくらいでないで

える人も少ないそうだ。自分の国のことなのに、私たちはあまりこの国のことを理解していない。できていない。

「そもそも、未来法の正式名称は『国民の未来を安定化するための法律』ですから。今では考えられないことですが、昔は世界的に人口が徐々に減っていく一方だったときがあったそうです」

「だから国全体で管理するようになったんだ。昔は自分が産んだ赤ん坊を、自分で育ててたらしいぜ」

珍しく皮肉気だが笑って話すサジに対して、トオルはありえないといった面持ちだった。

「ええ、なにそれ。専門家に任せないで、死んじゃったらどうするのよ」

赤子はいへん死にやすく、特定の免許を持った人でしか管理できない。出産後はすぐに教育機関に送られる。親が子どもに再会できるのは、どんな立場の人間でも早く一歳になってからだ。

しかし、驚いた。こういった歴史や前時代の文化は教科書にも載らない。私はたまたま実家の書齋にあった本で見たが、国の図書館ではまず見つからないだろう。特に未来法がつくられてからの二十年間は、暗黒時代ともいわれ、どの歴史書にも詳細は書かれておらず、参考になる資料がな

いほどだ。サジはなぜそんなことを知っているのだろうか。私が初めてサジに對して、具体的な疑問を持った時だった。

「リアルすぎる幻想は現実よりいいもんだ。人間そっくりの機械なんて、文句も言われない、意見の相違もない、ピロートークだつて必要ない。まるで理想じゃないか」

「たかだか機械に？ わからないわ」

トオルがサジを腫物でも見るような目で見た。人間一人一人違うのだ。意見の相違はあるものだが、トオルとサジはまるで違う価値観を持っているのは間違いなかった。そして、私自身も。

「ていうか、あんたたち知り合いなのか」

唐突に投げられた質問に私は押し黙った。知りあい。確かに私とトオルは知り合いだった。しかし、私はあえてトオルが何とつか気になって自ら言わなかった。

「知り合いよ。同じ教育機関、同級生よ」

私は落胆した。視線を落とし、カラカラの喉を潤そうとじて啜ろうとしたグラスの中は空だった。

「ふーん、じゃお前も余裕がないだろ」

「人気取りはね。ちょっとばかり制度が緩いのよ」

ファンの嫉妬か他に事情があるのか、私は芸能界について全く知識がないのでわからないが、彼女に二十五で結婚

するという枷はないようだった。

「ふん」

サジは意味ありげに眉をひそめるだけだった。自分で聞いている、この反応、そして常時不遜な態度。女王氣質のトオルのことだから奇立ちもする。彼女はサジをまじまじと見つめ、小馬鹿にするように私に問いかけてくる。

「カエデは意外ね。こんなのが好みだっけ」

「ううん。ぜんぜん」即答だった。

「え、そうなの……」

じゃあ、なんで結婚したのと言いたげなトオルだったが、それ以上は深く聞かずに、サジに嘲笑を向けただけだった。サジは別に気にもせず、追加のカクテルをロボットにオーダーしていた。

「教育機関の嫁なんて、そうそういないわよ。あなたは何してるの？」

まずいな、と思い、止めに入ろうとしたがサジの発声の方が早かった。サジがそのような世間体を気にするはずなかったのだ。

「便利屋だ」

「ふーん、なるほどね。あいかわらず、あんたの考えってわからないわ」

トオルが私にその長いまつげを躍らせた目をこちらに向  
けてくる。その視線は紛れもなく、恨みの入った視線だった。  
ここで初めて彼女は私に対して感情を向けてきてくれたの  
だ。それがどんなことでも、不謹慎ではあるが、とても嬉  
しかった。

しかし、そんなことを表に出すのは彼女の琴線に触れそ  
うなので私は仕方ない、と言った風に受け流すしかなかっ  
た。サジはその様子を興味深そうに見ていた。

「便利屋って、つまり何でも屋よね？ 依頼したいことがあ  
るのだけれど」

振り返って、サジに問いかけるトオル。何が起るのか、  
私は予想もつかずに狼狽えた。

「今か？」

「いまよ」

「金による」

「あんがい、がめついのね。ええ、もちろん、結果を出して  
くれるなら、いくらでも」

どんな依頼だ、と私は蚊帳の外でサジとトオルの話を聞  
いている。いったいどうしたのだろう、とトオルを見つめ  
てみるが、彼女はまったくこちらを見ようとしなかった。

「脅迫状がよく届くの」

大丈夫なのかと思つたが、トオルは淡々としていた。そ  
れはサジも同じようだった。どこかどいつがそんなことを。

「なんだ。有名税じゃないか。考えるだけ無駄だな」

「なによ。いいじゃない。ボディガードするだけで、大好  
きなお金がもらえるのよ」

「断るとは言つてない」

「決まりね」

二人とも無表情だったが、どこか納得したかのような態  
度。お互いの通信デバイスで契約を結び、先ほどまで他人  
だったはずの二人はものの二分でクライアントとサプライ  
ヤーとなった。どんな話が進められていく中で、私はサ  
ジとトオルが関わることに不安しかないのであった。

#### 4. 本編開始

「ああ、ここにいたのか荒牧君」

今度は、ラウンジは大騒ぎになった。何を隠そう、RBC  
企業社長が堂々と歩いてきていたのだ。周りからの挨拶は  
ほどほどに、私たちの方へ、いやトオルの方へ向かつてくる。  
「あら、もう時間？ ごめんなさい。すぐに用意するわ」  
「や、まだ時間はあるよ。ただ君が気に入るような品があつ  
たことをさっき言い忘れてたんだ」

彼は既婚者で、明らかに下心がある発言だが、下卑た感じがないのは本人の威厳や雰囲気のせいだろうか。どちらにせよ、トオルに断る権利はなさそうだった。私は割って入ろうとも考えたが、トオルの返答の方が早かった。

「わかつたわ。でも、私のマナージャー時間に厳しいから、中央に向かいながらでもいいかしら」

「もちろん、お友達はいいのかい。申し遅れたね。RBC企業代表取締役社長を務めさせてもらう有我ゴウだ」

一応、同伴の是非を聞いてくるが、明らかにトオルと二人で過ごしたいようだ。礼儀正しく、自己紹介とあいさつはしてくれるが、それ以上は踏み込んでくるな、という圧を感じる。

私は気圧され、丁寧に断ろうとした。なんとなく癪に障ったが、こちらが教育機関からのものだということは把握しているだろう。うかつなことはできない。

「ああ、同行させてもらおう。彼女から依頼受けてるんだ」

しかし、サジはこの場の意を汲まないことを軽々言う男だった。

私が戦々恐々と、夫婦とはいえ教育機関に苦情でも来たらどうしようとおろおろしている中、サジは全く動じていなかった。

「そうなのかい」

「ええ、脅迫状の話はしたでしょう？ 私、怖くって」

言ってくれたなら僕がつけたのに、という有我氏の意見をのりくらりと丁寧にかわし、サジとついでに私の同行を取り付けるトオルの世渡りのうまさには心から感服する。さすがと言っている。

「では、行こうか」

出鼻をくじかれたというように、表には出さないがこちらを（特にサジ）見る目は邪見に感じた。プライドが高そうな男だ、と私は彼を好きになれそうになかった。今までは遠めに見るだけだったが、とても実業家としてたいへん尊敬していたのだが。

私は心の中でサジにせいっぱいの拍手を送った。

トオルはうまくご機嫌を取りながら、画期的な商品の数々に驚いて見せたり、褒めたり、大輪のバラを思わせる笑みを振りまいている。

「さつきとは大違いだ」

「いつもあんな感じでは、日常生活すらおぼつかないですよ。もともと、かなり笑う子なんですよ」

「ああ、いつもあんな感じじゃ、額に皺ができてるだろうしな」

小声で話していたつもりだったが、トオルはふんと一瞬こちらを睨みつけてくるのだった。

「さて、最後だ。気合を入れていこう。荒牧君」

特に何も起こることなく、中央ステージにつくと、トオルと有我氏は舞台裏へと入っていった。さすがに立ち入り禁止だと言われ、有我氏はトオルの中での安全性を念押しで私たちを追い払った。私も心配だったが、だからといって一見して弱々しいサジが彼女の身を守るのに役に立つとも思えなかった。

「なんだ、その目は」

「いえ、なんで、依頼を引き受けたのかな、と」

今考えていたわけじゃないが、これも本当に思っていたことだった。サジはなんだそんなことか、と言わんばかりにため息を吐いた。

「なに、今までの奴らに比べれば、可愛いもんだと思っただけだ」

確かにトオルは可愛いが……。そんなことで依頼を受ける男だろうか。お金にはがめついようだし、彼女なら想定以上の金額を払ってくれるだろう。

「それにしても、あなたの頭の中に可愛いというワードが存在していたのですね」

「なんだ、俺にだって、毎日可愛がっているものくらいある」  
え、なにそれ。初めて聞いた。意外や意外と言った風に私は口をへの字にして、問いかける。

「ペットでも買ってらっしゃるんですか？」

「カマキリ」

「え」

「カマキリの『とーろー』だ。覚えやすいだろう」

蠍。覚えやすいも何も、名前がそのままだ。サジは、マンティスと迷ったんだが、となにやらペット自慢が始まったので、私はステージに向き直り、あいまいに頷きつつ聞き流すことにした。

## 5、 事件発生

長い前口上と今後のBBの企業の展開、このパーティーの開催の感謝等々が終わり、私も幾分か気が抜けていて、眠さから焦点の合わない目をしてしていた。サジは黙ったまま、周囲を警戒しているようだった。一応、依頼通り何か周囲に怪しい動きがないかどうかと、仕事をしているのだろうか。番犬ならぬ番猫といった感じだった。いざとなったら、私も加勢しようと感じた。

最後の締めくくりだろう。有我氏とその他社員が登壇し、

今後の意気込みなどを言つて、最後の挨拶に入る。

「さあ、本日は誠にありがとうございました。今後も皆さまも援助のもと、我々も精進し、多く国民の支えになりたいとおも」

そして、ライトが唐突に消える。女性の悲鳴が聞こえる。皆が騒ぐ。叫ぶ。私も冷静でいられずに、慌てて当てもなくこの場から逃げ出そうとした時、ふと隣から腕を掴まれた。パニックになつて、いつぶりかもわからない叫び声を上げかけたところ、この状況でも異常なくらい冷静な声がかけられる。

「落ち着け。そんなに繊細でもないだろう。すぐに復旧するから、じつとしていろ」

極めて失礼なことを言われた気がするが、訂正している余裕もなかった。やがて明かりがつけられ、混乱した会場は真つ白な天井と壁がむき出しになつていた。そして、眼前に広がるのは呆然としたタオルとステージから消えた、そうではない、ステージ上で倒れた有我氏だつた。

その瞬間、誰かが叫び、誰かがそれをなだめ、会場はまさに阿鼻叫喚だつた。そのどうしようもない混乱が収まつたのは、配備された警備員と駆けつけた真実機関が駆けつけて来てからだつた。

「真実機関第一捜査隊です！ 道を開けてください！」

蠢く大衆の中から線を引くように、一直線に捜査隊が割つて出てくる。先頭に立つて取り仕切っているのは三十代半ばの比較的若いリーダーだつた。遠目から見ても、漠然とどこかで見ることがあるような気がした。そして、その謎は彼がちょうど私たちの前を通りかかった時に解けた。

「兄貴じゃないか」

「は！ なんて、サジがここに……」

兄貴。ああと気づく。そうだ。お見合いの時に一度会つた彼のお兄さんだ。サトシさんだつたか。サジはいつもより更に軽薄な態度で、軽やかな動きで彼の兄へと近づいていった。

「偉く遅かつたな。最近、元氣そうだし、仕事もあつちから舞い込んでくるな」

「あまり不謹慎なことを言うな。そりや元氣だとも。長年の一番の悩みがつい最近解消されたからね。あ、こんばんはお久しぶりです、春日井カエデさん。仕事上では初めてですね。真実機関第一捜査隊の羽麓タダシです」

まさか真実機関に属していたとは。あらゆる捜査、裁判を受け持つ機関である真実機関は、就職口としては最も狭き門である。あと、タダシさんだ。そうだ。もう覚えた。

大丈夫なはず。

最初こそ動揺していたものの、私がいることがわかると教育機関の伝手だと思いつたのか、改めて自己紹介される。

「なあ」

「だめだ」

「まだ何も言っていない」

「サジはさも不服そうにタダシさんへ睨みつける。

「いいか。ようやく、ようやくだ。もうお前もまともな生活を送るんだ」

「まとも、ね。俺は何でも屋として、協力しようとしてるだけだ」

「サジは一瞬だけ眉をひそめたが、それも気のせいかと思うほど今はおどけたような態度を取っている。不思議な男だ、と改めて思う。何がと言われると困るのだが、感情の起伏が瞬間的でいつもは淡々としているのに、ふとした時の表情が記憶にこびりついて離れないのだ。

「それに企業として大舞台のステージの真ん中で倒れただなんて、明らかに人為的だ。嘘感知デバイスですぐにやったやつも見つかる。奥さんと今夜のことでも話し合ってるんだな」

「無駄なことを」

食い下がろうとするサジに、押しつけようとするタダシさんの攻防がまだ続くかと思つたとき、そのステージの舞台裏から女性の喚き声が響いてきた。

「この女よ！ 絶対そうに決まってる！」

遠くからでもキンキンと甲高い声が聞こえてきて、あつげにとられているサジを押しつけてタダシさんたち捜査達が舞台裏の入口へと走りこんでいった。

「ち。おいかげ」

女。私は嫌な予感がして、サジが何か発言しかけた音すら追い越して、タダシさんたちの後を追つていった。金切り声はだんだんと音量を上げ、耳に障るような叫びは入口の所では頂点に達していた。まるで、魂の叫びのように、ありとあらゆる悲哀が込められた絶叫だった。

「ち、ちがうわ。わたし、なにもしらないの」

「うそよ！ お前が渡した水に何か入れたんだ！」

若干化粧の濃い、和服に身を包んだ女がトオルにつかみかかろうとしているのが見えて、私はとっさにその女性の両腕をひつつかむと全体重をかけて抑え込んだ。ぐえ、とカエルが潰れたような声がするがそれどころではない。

「カエデ!?」

「なにをやっている!」

今度は近くにいた男が私を引きはがしにかかるが、私も必死でその女性に覆い被さったままだった。トオルが蒼白な顔で立ち尽くしている。

「なんて力だ!」

ちよつとやそつとの力では動かない私に、啞然としていたタダシさんを含めて私どうにかして女性から引き離れた。

「あ……ご、ごめんなさい」

「なんなの! あの女の共犯かしら!? 捜査官さん連れてってちよつた! ろくでもない連中よ!」

さすがに冷静になって、耳がいたくなるような金切り声を聞きながら、ずるずると大人しく引きずられていく。タダシさんが冷や汗をかきながら強引に、しかし一応丁寧に肩を持ち上げている。

「いったいななんだ。さあ、帰ってください」

「依頼人の安全は第一だ。当然だろう」

その舞台裏の出入り口にはサジが通せんぼするような形で立っていた。

「サジ、何を言ってる」

「ほら、契約書だ」

通信デバイスを手でタダシさんに投げ渡すと、手に取ろうと

私の手を放してしまったため、私の体勢が大きく崩れる。それを支えるようにしてまた腕を掴まれた。

「いたいです」

「お前、あんがい頭でモノを考えないタイプだな」

「ひどいです」

そんなことないのだが。座学は得意だし、世渡りも悪くはないはずだ。そんなことを考えているうちに、サジは腕を離して、いまだに顔が青いトオルの方へ向かった。

「依頼通り、ボディガードの務めを果たしたまでだ。そうだな」

「そ、そうよ! 危なかつたんだもの。カエデはすごいのよ」  
会話として成り立つてるかわからなかったが、それでもトオルが無傷で、少しでも賞賛してくれたことが嬉しかった。痛みも吹き飛んだ。

「な、なんですか、あなたは。こ、こんなことをした人を守るなんて」

今度はかなり若い、私と同じかそれ以下くらいの年の男性が困惑を隠せずに問いかけてくる。

「無駄だな」

「は?」

そんな彼や女性たちを置いて、トオルを私やタダシさん

がいる方へと連れてくる。

「こいつが犯人なんてありえない」

「だって、その女が渡した水を飲んで、舞台上上がったつきり、主人は戻らなくなったのよ！ この女以外ないわ！」

「これだから、思い込みの激しい奴に説明なんて無駄なんだ」

「どうやら有我氏の奥さんらしい女性は半狂乱になってトオルを指さすが、サジはどこ吹く風でやれやれと肩をすくめただけだった。」

「兄貴。デバイスで確認してみよ」

「お、おう」

「真実機関が所有する裁判でも使われる携帯嘘感知デバイス。めつたに起きない犯罪もこれでだいたいが解決してしまふ。体温計のようにトオルの首元にあてた。結果はわかりきったことだが。」

「あなたは有我ゴウ氏を殺害しましたか？」

「し、知らない……ほんとに何も知らないの」

「はいか、いいえで答えて下さい」

「い、いいえ！ 絶対よ……」

「何も反応することはなかった。当然だ。トオルが有我氏をあんなめに合わせるはずがない。例え、彼とのスキンシップに嫌気がさしても、それが原因と考えるのはあんまりじゃ

ないか。

「壊れてるんだ！ そんな機械に頼つてないで、ちゃんと調査してちょうだいよ！ 絶対その女よ！」

「ま、それには同感だな」

「聞き入れず一人ひとり質問していくタダシさんをよそに、ぼそりとサジが呟いた。」

「あなたは有我氏を——」

「あー、なんて非効率。非合理。チンパンジーじゃあるまいし、こんな派手なこととして、はいか、いいえで逃げられると思うほど単細胞じゃないだろうに」

「呆れ果てるサジとただ漫然と立ち尽くす私とトオル。事に居合わせた四人の人間と、トオル。四人のトオルに対する視線は厳しい。私が信じるべき、疑うべきははっきりしていた。それはサジも同じだったのが限りなく嬉しかったのだった。」

## 6, 推理

「なるほど、嘘はなかったと。で、死因は？」

「なんで、お前に教えなくてはいけないんだ」

「俺はクライアントの身の潔白を証明する義務があるんだ。今のところ、無傷で来た俺の仕事に泥を塗る気なのか、兄貴」

「……毒殺だ。遅効性で、効果が出るのに時間はかかるがその分少しの量で死ぬ」

「ドシンブルな、殺人事件だ」

部外者が聞いていい話ではないが、なぜか私もサジと同じサプライターとみられているらしく、この場に同伴している。死体を見る気はないので、トオルと一緒に隅の方で邪魔にならないように話を聞いてみた。

「トオル、大丈夫？」

「少しも疑ってない辺り、変わらないわね。まあ、それにしてもあなたの夫がかばってくれるなんて思わなかったわ」

それは私もそうなのだが、と思ったが心の中で留めておいた。トオルがサジに好印象を抱くのはいいことだと思っただけだからだ。

「だから、主人が持っていた分は、私が喉が渴いたからいただいたんです。だから、あの女が持ってきた分に毒が入ってたにきまつてるわ」

「なるほど……。あなたは毒を入れましたか？」

「いいえ」

だいぶ落ち着いてきたのか、トオルはいつも通り堂々とした態度で応答した。デバイスに反応は見られなかった。

「では、次に有我サエさん」

「まったく、私を疑うなんてどうかしてるわ」

「有我さんの奥さんよ。……私を目の敵にしてるの」

予想はできたことだが、有我氏のお気に入りだったトオルをよく思っていないらしい。既婚者でありながら、ああもあからさまに絡んでくるのだから、よほど慣れているように見えた。トオル以外にも手を出している女は多くいそうなものだが。

「次、加留多ユウタさん」

私を真つ先に引きはがしに来た人だ。堅物そうな印象で、髪は七三分けにしていたようだが、先ほどの攻防で乱れている。

「あの人は秘書の加留多さん。すごい生真面目な人よ。社長もよく有能な人だつて言つたわ」

「音無カケルさん」

私と同じ年くらいの男の人だ。童顔で女っぽい背格好をしている。性別を男性に選んだのが不思議なくらいだ。

「社内じゃ知らない人はいないそうよ。あれだけ若いのに、次期社長だつて言われてる。相当優秀ね。有我さんも彼はすごい可愛がつてたもの」

「そして、有我ソウさん、よろしいですか？」

「まったく、はやくしてくれよ。もうすぐイベントが始まっちゃう」

まう」

「彼は、有我さんの息子さん。見ての通り、ドラ息子ね。仕事もしてなかったようよ」

今度は耳打ちするようにそっとトオルが説明してくれた。身なりは整えているようだが、平均体重をかなりオーバーしていて、ベルトがはちきれんばかりになっている。

「異常、なしか」

「当たり前だ。犯罪をすれば真実機関がそのデバイスを持ってやってくる。対策しなきゃ、とつくに自首してるぞ」

ううむ、と唸るように納得するタダシさんは、他の捜査官たちへ随時指示を出しながら、サジに向き合っている。どうやら、捜査協力は初めてではないようだ。自然とサジの意見を聞く体制に入っている。

「毒ってどこから出てきたんだ」

「ペットボトルの飲み口だ。少量だが」

「そ。水が配られたのは一人一つ。で、有我ゴウのペットボトルは奥さんが持っている」と

「いや、それは違います」

サジを遮ったのは音無さんだ。

「奥さんが飲んだ後、僅かでしたが水が残っていたので、社長にお返しになっていました。そのあと、すぐになくなっ

てしまったので、荒牧さんのペットボトルを拝借したのです」

「なら、奥さんが返す際に、毒を仕込んだ可能性は」

「デバイスに感知されていなかったでしょう！ 変なこと言わないでください」

先ほどは壊れているとまで言っていたというのに。しかし、事実としてこの中には毒を仕込んだ人はいないのだ。だったら。

「ふむ、それもそうですね。では外の人間でしかありえないということになりますか」

「確かになア、ペットボトルを持ってきたのはロボットたちだ。この入り組んで巡回している中で、毒を仕込んだ奴なんて完全犯罪もいところだろー」

「そんな無駄なことを考える必要はない」

有我ソウが得意げに語る中で、サジが切り捨てるように言う。

「な、なんでだよオ」

「単純にそんな誰もが取るような状況で社長を狙い撃ちなんてできすぎている。無差別殺人なんて、もつてのほかだ。今は、社長をピンポイントで殺害する方法を考えるべきだ。それが完全に打ち止めになったら、そっちの可能性を模索

すべきだ」

「じゃア、あつてるかもじゃねエか！ いい加減なこと言いやがって」

「別に間違っている等の言葉は言っていない。効率の問題だ。最初にロボットの巡回した道をすべて追うなんて、この四人の中に犯人がいればなくて済む努力だ」

犯人が四人の中にいる、という前提でサジは話しているようだ。ワーワーと四人とも同時に抗議の意見を上げるが、気にするサジではない。

「で、そこにあつた空のペットボトルが、毒が検出されたやつ、と」

さすがに毒の付着したペットボトルは捜査隊が回収したため、ホログラムが代わりに投影されてあつた。

「一つ、いいですか？」

神経質そうに聞いてきたのは秘書の加留多さんだ。タダシさんに通じるものがある。

「なんだね」

「そもそも、どうして四人なのでしょう。荒牧トオルさんが容疑者から外れる理由を説明してもらっていません」

それもそうだ。トオルもなぜサジが自分をかばってくれるのか、不思議があつてた。みんなの視線が集まる中、サ

ジは背を向けて辺りを見渡した。

「それは今説明してもわからない。後で説明する」

「な、なんなのそれ」

有我サエが震えた声でありえない、と小声で絞り出す。なんだそれは、とみんなが思っていただろうが、サジは何事もなかったかの世に続けた。

「それで？ 加留多さん、音無さん、有我さん親子のペットボトルはどこへ？」

「みんな手元にありますよ。ないのはやっぱり荒牧トオルさんだけです」

「……そーいや、この社員は全員、手袋してるんですね」

サジがいった通り、よく見れば有我さん親子以外の三人は全員手袋をしている。

「私達もつけるよう、言われているのだけれど、舞台裏だから外してましたわ」

「なるほど、ま、指紋とかでは特定できないな」

「で、でも私とソウは容疑者から外れますよね？ あのペットボトルには私たちの指紋がないことは、触れていないという事ですもの」

有我サエの言い分に、有我ソウがぶんぶん必死に首を縦に振る。

「まあ、他三人よりは遠のいた、という感じですよ」

タダシさんは断言はしないものの、あまりこの親子を疑っているような感じではなかった。サジは黙ったままだったが、反論もしてこなかった。

「あ、そういや真つ暗ン時、なんか物音がしたぜ。今思えば、ありや犯人が逃げた音かもしんねえな」

急に饒舌になった有我ソウは早口でまくし立てる。

「逃げてくような音だったのか？」

「い、いや、ちよつと何か物がこされるような音だから、聞き間違いかも。ほら、外からとか叫び声とかすこかったし」

それもサジの鋭い視線にすぐにタジタジになってしまった。

「暗闇の中は皆さんどうしてたんですか？」

「どうって」

「何もできないですよ、あんな暗闇じゃ」

タダシさんが聞いた質問にみんな煮え切らない返答をする。サジは黙っている。しかたがない。あれだけの暗闇の中で動けた人間はいないだろう。会場中がパニックで、どうしようもなかったあの現象も何だったのだろう。

「あれはシステムトラブルで、原因は解析中です」

音無さんが律儀に答える。会社側が原因不明と言ってい

る以上、捜査官側はお手上げだろう。ブレイカーが落ちたとかそういう、事故的なものなのか、人為的なものなのかすらわからないとは。

「じゃあ、消去法であなたたち二人ということになりますか？」

「ま、待つてくださいよ。僕本当に違いますよ！」

「そうですね、有我さんを殺していない、毒を入れてもないという事実は変わらない」

「そうです。真実機関が事実をないがしろにしてどうするんですか！」

「嘘じゃなきや真実だとは限らない」

ようやくサジがこの中で一番平然とした声で、捜査官たちと私とトオル、そして容疑者四人で二分された空間の真ん中に移動する。当然、注目も集まっていく。

「さて、遠回りしたが近道をするとかえって、無駄が多くなることはまあある」

「いったいどうしたの？ あんたの旦那」

私が聞きたいことなのだが。しかし、この場にいる全員がこれから何が起こるのか予想できずにいた。そして、サジが放った言葉は、

「有我ゴウの飲んだペットボトルに、毒を塗ったのは有我サエだ」

突然の犯人宣言だった。

しーんと静まり返る中、ゴロゴロという擬音がびったりの怒りを肩を震わせて周りにはなっているのが一人。

「なんですって……？ 私が夫を殺した、と」

トオルにつかみかかろうとした時とは一転して、静かに周りの人間を威圧しながらずんずんとサジに近づいていく。さすがに危ないと思つて、私はどつきに彼の前へ出た。

「あ、あの、どういふことでしょうか？ サジさん」

有我サエに気圧されつつ、振り返らずにサジに尋ねる。サジはさして怯えた様子もないようで、淡々と事件の概要を解き明かしていく。

「そもそも、毒を仕込めたタイミングなんて聞いている限り一つしかない。旦那のペットボトルを返したそこに毒を塗ったんだ」

「私は毒なんて知りませんわ」

「ああ、そうだと」

あつさりとしてサジは自分の推理を否定するようなことを言つた。

「え、ええ？」

困惑したのは私だけではなかったはずだ。有我サエすら怒りを忘れてぼかんとしている。

「あなた、ずいぶん化粧が濃いな」

「う、うるさい子だね！ 失礼な」

「なのにどうして、空のペットボトルはあんなにも綺麗な状態なのか」

ハツとして、ホログラムをみると確かに口紅の後のようなものは見られなかった。有我サエは困惑して、何を言っているかわからないといった風にサジを見つめる。

「口紅をつけたまま返しませんわ。きちんと拭きましたとも」

「そうか！ そこに毒を！ いや、待てそれでは奥さんが毒を入れてるといふことにならないか？」

「だから、それが嘘だった以上、こう考えるしかない。誰かがそれを予測して、ハンカチ、それからテーブルナプキンに毒を仕込んでおいたんだ。これで、毒を入れた自覚のない殺人ができあがつた」

犯人は有我サエさんに知らず知らずのうちに、毒を入れさせることで有我氏を自分の手では殺さず、毒をペットボトルにはいれなかったという事実を作つた。

「さて、もう一度質問してみるよ、兄貴。奥さんに旦那を殺させたかどうか、を」

「もう大丈夫ですよ」

そう言つて、タダシさんの前に進み出たのは加留多さん

だった。

「そんなあなたがだなんて……」

有我サエさんはシヨックを受けたような表情で固まり、有我ソウがお袋大丈夫か?、と不思議そうに身体を支えている。音無も訳が分からないという風に、立ち尽くすばかりだ。

「えらく、あつさりしてるな」

サジ自身もあまりの潔さに眉をひそめている。私も何かしてこないかと警戒して身構えたが、加留多さんは特に何もアクションすることなく、捜査隊によつて拘束された。諦めた、というよりは何かを達成しきつたような、そんなすつきりとした印象でさえあつた。

「ええ、逃げられれば大儲けものくらいにしか考えていませんでしたから」

「加留多さん! あんたそんな人じゃないでしょう! なんでこんなこと」

音無さんが声を上げる。周りの人間はまるで置いていかれている。トオルも何が何やらで、困惑の視線を私に寄せずばかりである。

「そんな人って。あなたから見て、私はどんな人でしたか?」

言葉こそ若干不躓なもの、加留多さんはまるで先ほどの態度と変わっていない。当たり前前の、日常会話のよ

うだ。

「え、真面目で、でも気さくで。奥さんもよく頼られるような」  
「ユウタさん、嘘でしょう? どうしてなの。あの女がやつたんでしょう?」

「ええ、まあ。そうしたかつたんですが、デバイスがある時点で無理に等しいですからね。だから、奥さんに殺してもらったんです」

にこやかにまるで昨日の夕飯の出来が良かった、と友達に言うような感覚で恐ろしいことを言う。有我サエさんも気味悪く思ったのか、怖くなったのか口を魚のようにパクパクさせている。

「ぶざけんな! なんでその必要があつたんだよ!」

有我ソウが叫ぶ。皆が思っていたことだった。正直、彼は別に捕まっても構わないとさえ思っていたように見える。

加留多さんは黙っている。考えあぐねているような、本気で悩んでいるような。そんな中、また声を荒げようとした有我ソウさんを遮って、サジが話始める。

「あんたがスケープゴートにしようとしたのは、有我ゴウの奥さんとお気に入りだった荒牧トオルだ」

何を話すのか全員が困惑する中で、加留多さんがサジだけをどこか食い入るように見つめている。

「わかつてくださいますか」

「わからない。俺には理解できない。愛だの恋だの、嫉妬なんぞ、抱いたこともない。ましてや同性に対してなんて」

こうして話しているサジは、どこか眩しいものを見るような、羨望の表情を浮かべていた。しかし、それも一瞬の間。瞬きの間には淡々とした彼が戻っている。本人に言えば否定されるだろうが、今まで見たどの表情よりも羽籠サジという人間があれには宿っているように見えた。

「そうですか……」

「な、なに？ どういうことなの？」

「なんだよ。なんでこんな奴が更生院にも行かずに、こんなところまで……」

私がサジの表情に気を取られている間に、周囲の状況は一変していた。確かに先ほどは皆困惑してばかりいたものの、加留多さんに対して何故どうして、と理解しようとする心があった。しかし、今の状況は彼を異物として、排外しようとする考えしかない。先ほどはトオルを疑って譲らなかつた有我サエの加留多さんを見る目は、あつてはならないものを見たような、そんな目だった。有我ソウさんはいとあらゆる暴言を吐いて、音無さんは信じられないという風に、彼を弁護することもなかつた。

私は吐き気がした。殺人者である彼を責めるのはまだいい。それはこの共存を確かとする世の中で異常な行為だ。今の今まで黙々として作業をしていた捜査隊の人たちも耐えかねたように口々に発言しだす。

「どうして、心倒錯障害者がいるんだ」

「やっぱり、犯罪の温床だ。あいつらは」

「初等部の際のテストをパスしたつてのか」

「いや、もしかすると後天的かもしれない」

「きつと親がろくでもない奴にちげえねえ」

彼らが、この国の人々が、嫌っているのは、加留多さんの罪に対してではない。男が男を好きになるという行為自体だ。うつむいた視線はどこにも行くことがなく、私はただ周囲の声を聞き流そうと耐えていた。

「狭苦しいでしょう」

それはだれにはなつた言葉なのか。加留多さんは、あれだけ気丈そうな彼はもの悲しそうに声を震わせていた。私は顔を上げるが、彼は明後日の方向を向いたまま話し続ける。

「ここはまるで真四角の箱の中。詰め込まれて、強制される監獄のような場所です」

人殺しに対して責められることは耐えられた。しかし、

それ以外の部分では耐えかねたのだろうか。

「おい、連れていけ。こんな異常者」

「真実機関が検挙率百パーセント。一度だって、裁判で無罪を宣告したことはない。だから、今回も運が良ければでっち上げてくれると思っただんですけれど」

「黙れ」

タダシさんが加留多さんの後頭部を思いきり殴ると、彼は辛うじて意識はあるものの、崩れ落ちてしまう。トオルが悲鳴を上げて私は彼女を後ろから抱きしめた。

真実機関。完全無欠の正義の機関。誰も疑わない公正な機関だ。何かに気づいている人だっている。しかし、だいたい人間は自分の生活が安定していれば、文句をつけなないものだ。それは教育だっせう。この国の人間が、進んでわがままな子供の世話など進んでするものか。私たちは楽をするために、国から奪われる権利に甘んじているのだ。そして、こんなにも息苦しい世の中を誰も変えようとはしなくてれない。

「でも、私だつて人間なんです。肉をもつて、骨があつて。真四角の箱に入るわけがない。いくつもの骨を折りながら、やっと入れるんです。……彼はどこまでも自由でした」

加留多さんは中央ステージを見つめ、呆けたようにぶき

みなくらい幸せそうな顔で、タダシさんの追撃をこめかみにくらしい気絶した。

彼は恋をして、嫉妬して、殺人をし、トオルに罪を着せようとした。許されないし、許せないが、誰にも言えない、はぐれものの孤独を私はよく知っている。法律によつて隣にいる女、そして若くて美しいお気に入りのお女。彼はその前提にすら立てない、努力すら無意味な存在だった。その絶望が今回を産んだのだろうか。

「絶対に手に入らないという前提があつたから、あいつは殺したんだろう。ほかならぬ奥さんの手で。毒されていたのは彼も同じだったというわけだ。最低な人殺しだが、常識を敵に回す覚悟は褒めてやつて良い。やり方は考えた方がよかつたな」

それも愛憎つてやつなのか、と呟く彼はとても孤独で寂しそうに見えた。

## 7、 閉幕

「ねえ、なんで、男になつてくれなかつたの？」

真実機関も撤収し、帰宅しようとした時、疲れ切つたような表情をしたトオルが、絞り出すように聞いてきた。

私が驚いて目を見開くと、トオルは見たことがないくら

い皮肉気に泣きそうな表情で訴えかけてくる。

「だって、そうよ。さっきの見たでしょ？ 女同士じゃ、一緒にいられないの。私は背が小さくて弱くて、あなたは大きくて強かった。最高のパートナーになれたわ。そんな男より」

隣にいたサジに非難するような目線を投げるが、彼は応じなかった。

「ボディーガードの依頼はやっぱり、こいつと引き離すためか？」

「そうよ。ミスをでっちあげるなりして、消えてもらおうと思っただの」

おつかない女だ、とサジは驚きもしないで演技がかったしぐさで首を振った。トオルがそんなことを考えていたなんて思いもしなかった。

「ねえ、どうして？ どうして、女になっちゃったの？」

それは。

「トオルが可愛かったから、羨ましかったの」

「え……」

息をのんで言った言葉はかすれて小さかったが、はつきりとトオルとサジの耳には届いたようだった。喉はカラカラで、今まで蓋をしていた昔の思い出がフラッシュバック

する。

「小さくて、可愛くて。いつもフリフリな服を着てた」

「カエデはいつも男の子っぽかった」

「そう、でも選択するとき思ったんだ。私もトオルと同じ服を着て、並んで、ショッピングして、それで愛し合えたらって」

子供心に甘かったのだ。私はあまり自分のことを語る方ではなかったから、自分がどれくらい世間とずれているかわからなかった。将来も、現実も正しく見据えられていなかったのだ。

その結果がこれだ。

「そっか……」

トオルは焦点の合わない目でこちらを眺めている。身体が変わった後、初めて会ったときのトオルの顔が忘れられない。絶望した。未来がついてきたかのような音がしたのだ。それきり、彼女は休みがちになって、やがて遠くに引越して会うことはなくなった。

「ごめんなさい」

トオルを一方的に傷つけた。あの顔がまだ忘れられない。ずっと、今でも。一言いふべきだった、とか。でも、トオルなら理解してくれるという楽観、浅はかさが自分で思い

返しても傲慢だったのだ。

トオルは何を言うこともなく、泣き出してしまった。

「ごめんなさいトオル……。私、言うべきだった」

「ちが、ちがう。ちがうのよ」

嗚咽の入った苦しそうな息遣いの中で、彼女が私の胸に飛び込んでくる。その体はやっぱり小さくて、私はしっかりと肩を抱いた。

「わたし、本当は男になりました」

え、と驚愕の事実が明かされ、今度は私が呆然とする番だった。

「カエデがいつもかっこよくて。強くって。守りたかった。でも、無理だつて、抱きしめられるたびに思ったわ。でも」

胸の中で彼女が笑う。今の彼女は大輪の薔薇のような絢爛さはない。野に咲く花のように儂く笑っている、どこにでもいる普通の女の子だった。

「わたし、ちゃんとなりたいものになつていればよかったのにね」

そんなことない、今からでも、と言えるような勇氣は、無謀さは大人になった私にはないのだ。私は何も言うことができなくて、ただ彼女の体を強く抱きしめた。私が抱きしめても微笑んで目をつむる彼女は手折れない花のように

強かった。

8、 次にあうときは四角い箱の中

「ああ、イオナちゃん」

先生、と緊張した面持ちでこちらへ顔を向けるイオナの顔色は優れない。クラスの大半が性別を決め、礼子さんが何度もイオナに『アドバイス』していたが、イオナは判断しかねているようだった。

「先生、私、ケーキを作るのは得意。掃除も嫌いじゃないです。でも、アラキ君はそれも十分できるのに、力持ちで」

かっこいいなって、と最後は小声でささやくようにいうイオナは不安そうにあたりを見渡しながら話した。

私も前と同じようにかがんで、今度は耳にそつと内緒話するように話した。

「私はイオナさんが男性でもいいと思うな」

イオナは驚きながらも、どこかまだ悩んでいるような表情でうつむいた。

「でも、私はあんなに男らしくないよ。この前の体力テストだって、下から数えた方が早かったです」

「関係ないですよ」

私は知っている。体は小さくても、力は弱くても、抱き

しめた時に感じた彼女の強さを。

「男らしいのが男性じゃないんです。男性より弱いから女性というわけじゃないんです」

そういうと、私は当時の体力テストで一番高くつた時の数字を言った。わあとイオナから歓声上がる。

「スポーツが得意な女の子は嫌いですか？」

「そんなことないです！ とつてもかっこいいと思います」

「じゃあ、料理が上手な男の子がいても、いいと思いますよ」

イオナは先日とは打って変わって、飛び上がるように喜んで、ありがとう！ 先生、と元気よく廊下の奥へ走って

いく。それは群れに混ざることなく、彼女自身の軌跡を残して、階段を下りるまで力強く駆けていったのが見えた。

「ちよつと、先生」

礼子さんが表面上はにこやかにこちらに物申すような威圧感で、隣の教室からやってきた。こそこそ話したつもりだったが、聞こえていたようだ。

「勝手なこと言わないでください。ただでさえ、周りとは違うと、除け者にされやすいんです。あの子にいはらの道を歩ませるおつもりですか」

礼子さんの言い分もわかる。しかし、自分で決める。やり直ししようもない選択だ。教育者側が制御していいもので

はないのは確かなことだった。苦勞するとしたら、それは男と女どちらにでも発生しうる問題なのだ。どちらが優秀をつけられるものでは絶対ない。

「イオナさんは、ご自分で選択する力を、担任の目線で持っていると感じたので任せることにしたんです」

本来はそうあるべきなのだった。今まで私がこの現状に對してみないふりをしたことで傷ついている卒業生もいるかもしれない。なら、今からでも私にできることをやるべきだ。

「……春日井さん。あなた」

礼子さんが漏れた疑念はこの国ではもつともなものだ。しかし、私はそれを遮って、淡々とした態度で去り際に言い残した。

「失礼します。『夫』が待っていますので」

愛という物を興味ないと言いなから敵視して、羨望する面白い男が待っている。

通信デバイスから通知音が鳴る。その内容を見て、口を緩ませながら帰路につく。

加留多さんは言った。ここは狭苦しい四角い箱の中だと。私もそう思う。でも、この箱の中でしかまだ会えない人がいる。それなら、私は自ら飛び込んでみようと思うのだ。い

つか一緒に打ち壊せることをわずかに期待を胸にしなから。

十五年越しの依頼

藤吉  
直樹

あれは暑い八月の夏の日だった。こんな暑い日に死んで、暫く発見されなかつたらすぐに腐っていくのかな。ハエがたかるのかな。とか思いながら、ドアノブに固定したベルトに首を通す。正直、死ぬのは怖かった。けど、それ以上に僕には守らなければいけない存在がいた。君のために、僕は死ぬる。

さようなら。

今日は七月二十六日。最近では気温も優に三十度以上を越えることが当たり前になりつつ、夏の気温とよぶには十分すぎる暑さが、学生、社会人、主婦、その他生きるという活動をするものの一部が苦しむ中、ここ、笹雨探偵事務所では、外から聞こえてくる蝉の鳴き声同 equal、それ以上うんうんと天を仰ぎながら、苦しそうに唸っている人物がいた。

「いつまでそんな風に唸ってるんですか、雁雨さん。夏だからってそんなに蝉に負けず劣らずの耳障りなうめき声を上げないでくださいよ」

「うん」

「まったく」

もうだめだ。この人は夏の暑さによって頭がやられてしまい、使える語彙がうんだけになってしまった。

「暑いんだったら冷房入れればいいでしょう。この事務所にもし一応設置されてるんですから」

事務所を訪れてからまだ一時間にも満たないが、稼働しているのは扇風機のみ。そろそろ限界だ。窓を閉めながら、雁雨が降弾使用している事務机の上に置かれている遠隔操作のリモコンを手に取りうとすると、語彙がうんだけになってしまったと思われた雁雨がとつぜん椅子から立ち上がり、「お前なにしてんだよ!」。と、リモコンを取ろうとする僕の手を押さえつけてくる。

「……ちゃんと会話できるくらい脳は暑さにやられてなかったようですよ、雁雨さん」

「はあ? なにわけわかんねえこといつてんだ伊津蝉お前」

「いえ、ずっとうんうんとしか唸っていません。暑さに耐えられずに頭の方がダメになってしまったとばかり。つてか、そろそろ手、放してくれませんか? 今はまだ大丈夫でも、これ以上冷房もつけずにいたら、本当に頭ダメになりますよっ」

「絶対にそれだけはやめる。お前助手だろ。だったら今月の

依頼何件かわかるだろ。ゼロだよゼロ」

確かに、ペットや人探し。浮気調査とか、いかにも探偵と呼べるようなことが今月……。というか、ここしばらく来ていない。いくらこの探偵事務所が無名だからといって、ここまで依頼がこないのは助手としてバイトし始めたのは二年程度だが、あまりなかったはずだ。僕が助手になる前。一人で探偵としてやっていた時は、今以上に依頼がなかったとか。それはまあ、雁雨さん自身の性格もあるのだろうけど、それもあいまって、雁雨さんの幼さが残っている顔だろう。身長は一七〇センチないくらいの、日本人の平均より少し小さく見えるくらいの身長なのだが、今年二十九歳というのに、元々童顔のうえ、短髪のせいですらに幼く見えてしまう。それに加え、私服だと、どうしても身長の高い中学生、あるいは、高校生くらいに見えてしまうのだ。スーツを着てさえいけば、一応ちゃんとした大人に見えるのだが、僕が何度いっても動きにくいから嫌いだ。の一点張りで、依頼主が来る予約などがない場合は、基本的に事務所内では私服で生活している。

にしても、だからだったのか。ここしばらく、雁雨がなにかを食べる姿を見ると、基本的にもやしとか白米だけだったりのは。

「なんとというかその……。惨め、ですぬ」

「ああ、もう。好きに言っとけ。とりあえず、そういうわけだから冷房はつけるな」

「といっても、この暑さですすよ？ 正直言つて流石にもう耐えられませんか」

どうせこの後もこの人は僕がまたエアコンのリモコンを手にとらない限り、うんうんといひ続けるだけの肉塊となつてしまふ。正直言つて、そこいらの蝉より耳障りだ。一度蝉のとまる隣の木にはりついてもらつて、どつちが耳障りか検証したいくらいには。

リモコンを持つ手を握られたまま、一時の静寂が訪れる。外からは蝉の声に、この炎天下の中、革靴とアスファルトにたたきつけられる音。そして回る扇風機だけが、どちらかが反論したら殴り合いになりそうなほど事務所の空気を張り詰めさせる僕らの鼓膜を振動させている。

暑い。

頬から今にも汗がほしい、ぼとりと落ちてしまふようなほどに。こんなくだらないことでも、今にも殴り合いが始まりそうな緊張感からなのか、それとも暑さのせいなのか。雁雨とにらみ合う時間が長く感じる。

「ああ、もうわかりました。ではこうしましょう」

先に沈黙を破ったのは僕の方からだった。こんな暑いなか、雁雨とにらみ合うだけにらみ合っても、どうせこのまま時間が過ぎていくのだから。

「この暑さの中、扇風機たった一台だけで乗り切るなんて流石に無茶です。ですので、近くの喫茶店やファミレスで涼みませんか。勿論、今回は僕がお金を支払いますので」

そう提案すると、雁雨の睨みあっていたはずの目がにやりと笑った。

「そうかそうか。伊津蟬がそこまで言うのならしかたがないな。助手の頼みだ。俺は全然そんな気はなかったが、そこまでするのであれば仕方ないよなあ。貧弱な助手がこの暑さの中倒れちゃったりしたら大変だしなあ」

あからさまな態度で、さつきまで本当に唸っていた人間の動きとは思えないほどの機敏さで外出する準備をする。やっぱり、奢るだなんてこと言わなければよかった。自分から雁雨の思い通りに行動してしまった気がする。

「ほら、なにちんたらしてんだよ伊津蟬。さつきと行くぞぜ」  
「ほんつと、ガキっぽいなあ」

聞こえてないだろう。とぼそりと呟くと、雁雨はじろりとこちらに目を向ける。

「なんかいったか？」

「いえいえ、なんでもありませんよ。ほら、早く行きましょう」

少々訝しむようにこちらを見つめてくるが、すぐに「そうだな」と言つて、事務所の扉をくぐり、僕もその後が続く。

こうして立つて並んでみると、本当に小さく見えてしまう。今年で大学三年生となる僕の身長は一八五センチほどと高めなのだが、同学年に雁雨と同じくらいの身長の間がないわけではないが、やはり性格のせいなのか、どうしても聞いた身長よりも小さく感じてしまう。本人は中学生や高校生と間違われることをそれなりに気にしているため、ガキ扱いすると今のようにつつかかってくる。

「あつ、そうだ。ちよつとファミレス行く前に郵便受けの中一応確認しておくから、ちよつと待っていてくれ」

「そんなの、帰つてくるときでいいじゃないですか。わざわざ外に出るときに見なくつても」

「急ぎの依頼が来てたりするかもしれないだろ」

「この探偵事務所にそんな急ぎのいらいなんか来るわけないじゃないですか」

「お前ほんと失礼だな。ここにバイトとしたいですつて来た時には礼儀止しかつたくせに」

そういいながらも雁雨は慣れた手つきでダイヤル式の郵便受けの施錠を解除し、中身に入っていた不要な広告など

をばいばいと、手際よく近くに設置されているゴミ箱に捨てていたが、途中でびたりとその手が止まる。

「どうしたんです。もしかして本当に依頼でも入ってました？」

今時手紙で依頼だなんてそうないだろうが、声をかけても一切何の反応も示さない。一体何が届いたのだろうかその後ろから覗くと、そこには雁雨宛に、「鷺海夕」という名が封筒に描かれていた手紙だった。雁雨に声をかけようとしたとき、その時目にした雁雨の表情は、封筒に書かれたその名前を、信じられないものを、知りたくないものを見てしまったかのように、ただただ見つめているだけだった。

「開けないんですか。依頼じゃないんですか？」

声をかけていいのかわからなかった。だが依頼の場合、中身を見ないことには始まらない。雁雨は声をかけても暫く呆然としていたが、ハッとしたように我に返ると、封筒をポケットにくしゃりと入れた。

「いいんですか？ 手紙をそんな雑に保管して？」

「いいんだよ。それより、八月七日ってあいてるか？」

「八月七日ですか？ 一応空いてますけど」

「そうか。だったら朝から事務所の方に来てくれ」

「依頼、ですか？」

「ああ。まあそんなもんだよ」

そう、なのだろうか。ただの依頼だったら、雁雨の場合その場ですぐに開けて確認するだろう。それに中身も見ずに日付を指定してきたし、あの時の雁雨の表情。本当に依頼だった場合、あんな表情をだす必要性が分からない。今度は僕が唸る番になるとは。

「そんなに考えなくても、ちゃんと冷房が効いた店内である程度の事は説明してやるから、心配すんな」

ほら、いこうぜ。と、思考を整理したい僕に構わずファミスへと行こうとしていたので、それに仕方なくついていった。

八月七日。言われたとおりに事務所にやってくれば、珍しくスーツで身を纏った雁雨がいた。来て早々に新幹線のチケットを渡され、依頼主がここに来るとばかり思っていた僕は、どこに行くのかと尋ねると、どうやら雁雨が生まれ育った地元で依頼主はいるとのことらしい。

あの日、封筒に書かれていた名の人物について雁雨から聞いた。依頼主……というより、手紙を送ってきた人物は鷺海夕という男は、雁雨が小学生時代からの親友らしい。

雁雨が高校を卒業して地元を離れてから、しばらくのあいだは連絡をしていなかったらしい。だがどうして今になって連絡を寄越してきたのかと聞くと、どうやら鷺海夕という男には、そっくりな双子の弟がいたらしい。弟の名前は鷺海風<sup>なぎ</sup>。その人物は雁雨が中学二年生の時まで、鷺海夕と一緒に時折遊んでいたらしいが、夕という人物ほど、深いかかわりがあったわけではないらしい。そして十五年前の八月七日。この日、鷺海風という子が、一階の自室で自殺している状態の鷺海夕を、歩行者が窓から発見したらしい。警察が駆け付ける前に、なんとか鷺海夕を救助しようと周囲の人間に助けを求めたが、窓も扉も鍵がかかっていたので、窓の一部を破壊し中に入ったそうだが、既に亡くなっていたらしい。その時鷺海の両親は仕事で帰りが遅く、鷺海夕は一度帰って財布を取りに行ったらしいが、すぐに雁雨の元へと戻ってしまい、止める人物は誰もおらず、ドアノブに自分のベルト使用して、首をそこにかけてたらしい。本人の遺書もその場にあつたので、自殺で間違いないだろうという事で片づけられたらしい。

「夕のやつ、俺と遊ぶたびに弟のことを自慢してきやがったんだよ。ほんと、うざいくらい自慢してくるから、迷惑だったよ。本当に、自殺なんかしやがったのかな」

ハハッ。と、力なく笑うと、哀愁を漂わせながら、左から右へと流れていく景色を頬杖をつきながら眺めていた。

そこまで自慢していた弟が急に自殺なんかしたんだ。雁雨にとって夕という親友ほど、弟の風と関係がなかったにしても、雁雨にもそれなりの精神的ダメージはあつただろうし、なにより弟をなくしたことにより、親友が絶望する姿は見るに堪えないのかもしれない。実際に目にしたことは無いので、僕の想像上ではないけれども。

「これ、聞いていいのか分かんないんですけど、見つかった遺書にはなんて書いてあつたんですか？」

暫く悩んだ後、頭を支えていた手と視線を下ろし、少しため息をついた後に覚悟をしたように話し始める。

「僕は兄の夕とは違って、なにをやっても失敗ばかりです。そんな兄を見るのが苦しくて妬ましくつてたまりません。ですが兄を殺すことはできません。なにもできない僕がいなくなるほうがきつと正しいから。そう書いてたよ」

「そんな……」

「そんなことで、って言いたいのか？」

「いえ、そんなことは……」

視線だけを動かし、ぎろりと睨まれ委縮してしまう。だが、実際に思ってしまったことなのだ。どうしてそんなことで

自殺などという行為に走ってしまったのか、と。

「まあ、普通そう思うよな。兄より自分の方が劣っているからといって、自殺なんかする必要ないじゃないかって」

けど違うんだよ。と、深くため息をつき、目元覆った。覆ったというより、握りつぶすように。顔の皮膚が指の力が向く方へと引つ張られている。爪を立てたら、その皮膚が引き裂かれ、血が出てしまうのではないかと心配になってしまっただけに。

「すみません、気に障るようなことを言ってしまった」

「いや、違う。うん。きつとお前が正しい。お前のような人間が正しいのかもしれない」

その言葉は、僕にというよりも、自分自身に言い聞かせているようにも見えた。取り合えず目元を覆っていた力が、皮膚の張りから緩んだように見えたので、ひとまず安心した。暫くぶつぶつと自分に言い聞かせてると、少しばかり落ち着いたのか、雁雨は視線を上げるとは無かったが、目元を覆っていた手を再び下ろし、僕の名を読んだ。

「伊津蟬。お前はさ、どういった時に人は死にたいって思うと思う？」

「えっ……」

「思いつくだけでいいから。どういった理由が挙げられる」

「えっと、恋人が死んだとか、いじめとか……」

ふと今頭をよぎったことを挙げるだけ挙げようとしても、そのあたりで発言が止まってしまふ。本気で死にたいなんて思ったことないし、周りにも本気で死のうとする人間なんか見たこともなかったから。

他に何か自分を死に追いやるような原因を考えるが、浮かばない。言葉を出せず、見えるはずもないのに視線が答えを探そうときよろきよると動いている。

「それくらいしか思いつかないか」

雁雨に話しかけられ、ようやく思考を停止することが出来た。確かにもう思いつくのはそれくらいだったか、真剣に考えていたのに、バカにされたような感じがして、このようなことでムキになってはいけないと分かっているのに、少しだけ、「じゃあ答えを教えてくださいよ」と、声に苛立ちを含めた。すると雁雨は羨望か、嘲笑か。どっちともわからない笑みを僕に向けた。

「答えなんかないに決まってるんだろ。全ての事が死に直結する。お前が言ったこともそうだし、嫉妬とか、ただただ死というものを知りたいだけだったり、たった一人の誰かのために死ねたり。つてな」

まあ、こういったものは自殺とかだけじゃなく、他人を

殺す動機にもなりえるけどな。と、雁雨は補足した。

行っていることは分かる。だけどどうしてそういったことでそのような行為にいきつくのか到底ではないが理解しようとしてもできない。それは僕がこういったことを考える出来事にあつてこなかったからなのか、それともずっと目を背け続けてきたからなのか分からない。けれど、自殺であつても、殺人であつても、死というものを考えてしまふのは、それから目を背けたくとも、一度焦点が合つてしまえば、視界から消すことは難しいのかもしれない。

「別に、無理にわかろうとしなくてもいい。これには個々の考えがある。今のは俺の考えだし、お前にはお前の考えが絶対にある。ただその考えを知るきっかけがあるかないかだ。それが来れば考えればいいさ」

きつかけ。雁雨にとつてのきつかけは、きつと親友の弟の死なのだろうか。今まで周囲の人間が亡くなったことがない。というわけではないが、その際に自分の観点から考えることは無かつた。いや、正確に言うくと、考える隙が無かつたという方が正しいのかもしれない。

昔の事を、雁雨が話していた事をまとめているようで、まとめることができないまま、新幹線は目的地へと到着していた。

目的地へと到着した後、再び電車に乗り、雁雨の親友、鷺海夕の住む家へと向かった。軽く二人が世間話と僕の紹介を済ませると、僕たちは鷺海夕の弟、鷺海風が眠る墓地へと向かった。今墓場には誰もおらず、僕たち三人だけだった。

はたして一切関係のない僕が墓参りについてきていいのか。と、今更ながらに心配になり、鷺海夕に尋ねると、久しぶりに会う親友の助手なんだ。挨拶だけでもいいから、手を合わせてやってくれませんか。と、言われたので、同行することになった。

墓場はそれなりに山の中であり、鷺海風が眠る墓地から、町が見下ろせる山の中だからか、事務所にいるときよりも圧倒的に多いセミの鳴き声に囲まれながら、あらかた墓の掃除を終え、三人で手を合わせる。十秒にも満たないくらいで僕は目をあけると、雁雨と鷺海夕の二人は長々と手を合わせていた。しばらく二人をじっと待っていると、ほぼ同じくらいに瞼を開き、背伸びする雁雨に、鷺海夕が話しかける。

「いや、本当に今日は来てくれてありがとうな、雁雨」

「いいんだよ。今日俺がここに来たのは俺の選択だし。なに  
より、親友の頼みだしな」

「伊津蟬さんも、弟の挨拶についてきてくださり、本当にあ  
りがとうございます」

「ああ、いえ。こちらこそ、今日初めて会うのにお邪魔して」  
鷺海夕は僕の方へと向くと、深々と頭を下げ、お礼して  
くるので、僕もそれに習うように、お互い頭を下げていると、  
屈伸をしたりと体を伸ばしていた雁雨は、墓石に顔を向け  
たまま、鷺海夕に「お前さあ」と話しかける。次に雁雨の  
口から出た言葉は、僕の頭を混乱させるものだった。

「お前さ、いつまで夕でいるつもりなの？」

その言葉に「えっ」と思わず反応してしまい、下げた  
頭を戻し、雁雨の方を向く。丁度こちらに振り向いてい  
た雁雨の表情は、さつきまで親友と久しぶりに会えたこと  
を喜んでいるかのようだったのに、今は新幹線の中で話を  
していたときのような顔をしている。だが雁雨の目は優  
しく、それでも相手を責め立てるような、心配するような  
目をしていた。その視線は、明らかに僕へと頭を下げてい  
た鷺海夕へと向けられていた。

鷺海夕はまだ頭を下げていたため、どんな表情をしてい  
たか分からない。顔を見られたくないからか、動けないま

ま暫く鷺海夕は、顔を下げたままだった。

「……まったく、なに訳がわからないことを言っているんだ  
よ、雁雨。俺は游だよ。それともなにか哲学か？ 人はだ  
れしも、自分自身のフリをして生きているって」

そういいながらゆつくりと顔をあげた鷺海夕は、なぜだ  
か安心したように、穏やかに笑っているように見える。そ  
の表情を崩すことなく、彼は言葉を繋げていく。

「まあ、僕もそれについては考えることはあるよ。そもそも、  
人は誰しも自分自身を騙して他者を騙して生きているじゃ  
ないか。誰かに嫌われないように、自分を嫌いにならない  
ように。そうして騙して、うまく生きてる。そう思わないか、  
雁雨」

それは、そうなのかもしれない。だけどそうじゃないか  
もしれない。誰しも自分についている嘘に気づいていない  
のかもしれないし、気づきながらも見ないふりをして生き  
ているのかもしれない。でもきつと雁雨が言いたいのはそ  
ういう事じゃない。

穏やかな笑みを浮かべたまま少し早口で喋る鷺海夕をみ  
る雁雨の目は、先ほどよりもより一層、心配や同情。それ  
に類した、寄り添いながらも、優しくしかる母のような瞳  
をしていた。

「なあ、もう苦しいんだろ？ 辛いんだろ。そこまでして、お前は夕になろうとしなくっていいんだよ。だってお前は、夕じゃないんだから。なあ、風」

風。そう呼ばれた鷺海夕と僕が思い続けた人物は、ぴたりと止まり、先ほどまで浮かべていた笑みが崩れ、真顔になり、沈黙していた。

「あの、雁雨さん。いったいどういう事なんです。彼は鷺海夕ではないんですか？」

一切話についていけそうになかった。口をささんでいいか分からなかったが、風と雁雨に呼ばれた鷺海夕は、何を何も発言できないまま突っ立っていたし、雁雨も鷺海夕の返答を待つだけで動きがなかったの、今会話に入るのであれば、ここしかなかった。

「そうだな。何も知らないお前のために、そして風のために説明してやるよ。結論から言うと、今日の前にいる鷺海夕は、弟の鷺海風だよ」

視界の端で、鷺海夕だと思っていた男の指がびくりと動くが、ただそれだけだった。その動きに雁雨も気付いたのか、彼の言葉を待つが、発言がないと確認すれば、さらに雁雨は説明を補足していく。

「まあ今日の前にいる鷺海夕が鷺海風なら、お前にも今墓で

眠っているのは俺の親友。鷺海夕っていうのはわかるよな。あの日死んだのは弟の風じゃなく、兄の夕なんだ」

「そうだよな、風。と問いかけても反応はない。」

「でも雁雨さん。いくら双子で顔が似てるからといっても、親御さんや親友だったあなたも、入れ替わったらすぐにはれるんじゃないですか？」

数日間程度なら周囲の人間も弟が亡くなったのだ。少々変わったとしても、精神的なダメージが多いのだろうと納得するだろう。だが親友の雁雨はなんとか騙せたとしても、両親は流石に気づくのではないだろうか。

「まあ、双子といっても別の人間だ。お互い癖も違えば、思考や振る舞い方にも違いが生じる。けど、こいつの振る舞い方は本当に夕そのものだったよ」

「真似したって事ですか？」

「ああ、そうだよ。こいつ……。風は夕を羨ましがってたって言うのは話したよな？」

「ええ、確かに」

遺書の内容を聞くに、弟の風は兄の事を羨ましく、そして妬んでいた。だからといって……。

「だからといって、別の人間になりきるなんて、かわりが少ない人はともかく、いつかは誰かにバレるでしょ」

「普通はそうだが、その常識を覆すくらい、風は夕に對して羨望を、妬みを抱いていたんだよ。俺たちが想像できないくらい膨大な感情を、小さいときからずっと、な」

雁雨の目がスッと憐れむように細められる。すると、今まで黙っていた風が、少し狂ったように、自暴自棄気味に笑みを浮かべながら、声を荒げた。

「ああ、そうだよ。僕は鷺海風だよ。十五年間ずっと夕として生きてきたんだ。両親も自分自身も、親友である君も騙して、ずっと夕として生きてきた。その方が皆いいでしょう？」

胸のあたりを抑えるように、服をぎゅっつつかみながら、風は叫んだ。もうこの際、どうにでもなれという風に、助けを求めるように。僕たちの発言を待つことなく、彼は言葉を紡ぐ。

「あの日僕は死のうと思った。両親はその日帰りが遅かったし、夕もあの日、君と遊びに向かった。家には僕一人だった。遺書も書いて、死ぬ覚悟も出来ていた。けどいざ死のうとしたとき、夕が帰ってきた。遺書を見られてね、自殺しようとか僕を、なんとか僕を説得しようとしたよ」

「それで、どうなったんですか？」

死のうとしていた風は生きていて、止めようとした夕が

死んでいるという事は、或る程度の予想は出来る。

「殺したよ。そんなつもりはなかった。けど、ようやく死ぬ覚悟も何もかもできてたのに、僕が死のうと思う原因になった夕に、説得しようとするのを見てると、いつのまにか覚悟が殺意に変わってた。道具も、僕が使おうとしていたベルトが手元にあつたからね。それで殺した。でも殺したのも恐くなつたし、なにより僕が生きているのが自分の中で許せないことだった。だから、自殺に偽造して、僕は夕として誰にもバレないよう、生きようと思った」

やはり、夕は弟に。雁雨にうざがられるほど自慢していた弟に殺されていた。だけど、それを聞いた僕の頭に一つの疑問が生じる。

「自殺して判断されたんですよね？ けど、他殺。しかも絞殺となると、抵抗する際に、抵抗した跡ができませんよね」

刑事ドラマや漫画などでよく見る。確か吉川線とか呼ばれていた気がする。そういつた抵抗した跡があれば、他殺として捜査されると殆ど知識のない僕でもしっている。

「抵抗しなかったんだよ」

ずっと黙って話を聞いていた雁雨が口を開いた。

「抵抗しなかったって、殺されそうなきに？ できなかつたではなく」

「ああ、そうだよ。抵抗しなかったんだ。できなかったたんじやなく。自分の弟を守るためにな」

「僕を……守る為？」

スツ。と笑っていた表情が再び元に戻るが、焦点が少しぶれていると思つたそば、雁雨を睨みつけ、怒鳴り始めた。「そんなわけないだろ！ 兄がどうして僕を庇うんだよ。あいつは心の中でずっと僕のことを見下してきたくせに、僕の事を笑っていたくせに、そんな奴が僕を守るわけないだろ！」

「それはお前がそう見えていただけだよ。お前の被害妄想だ。自分を卑下するあまり、そう思い込むようになってたんだよ、お前は。少なくとも、夕はそんな風にお前のことを見てないよ。ずっと俺にお前の事を自慢してたんだから」

「嘘だー！」

「嘘じゃねえよ！」

否定するように怒鳴りつけた風を、雁雨が怒鳴り返すと、風はビクツと体を震わせ、委縮する。そんな風に雁雨が近づく。あとずさろうとした風の胸倉をつかみ、自分の顔へと近づけ、再び怒鳴り始めた。この現状を止めることができるとすれば僕しかいないが、今の雁雨を冷静にさせる術なんかはない。ただ、見ていることしかできないでいた。

「だったら、なんであいつは殺されそうになりながらも抵抗しなかったと思う。どれだけ殺されそうになる中、抵抗しないことが難しいかお前に分かるか？」

確かにそうだ。誰しも殺されそうになったら、生存本能により、必死に抵抗するだろう。実際、僕もそんな状況になれば、必死に抵抗するだろう。それでも鷺海夕が抵抗しなかったのは、それほど鷺海風を愛していた。そして遺書を読み、弟の本心を知ってしまったのもあるのだろうか。

「それに、お前は夕の事を殺してないよ」

「えっ」

僕も胸倉をつかまれていた風も、ほぼ同時に声を出す。それはそうだろう。ずっと自分が殺したと思つて十五年も生きていたのに、今それを否定されたのだから。それを聞いた風は、ずっと無気力だったというのに、「バカ言わないでよ」と、雁雨の手を振り払った。

「僕は夕を殺したんだよ、この手で。その証拠に、僕が自殺したように偽造した状態のままだった」

「そうですね。現に夕さんは今この墓の中にいるんですよ？」

「ああ、そうだよ。けど、お前がやった方法じゃ、自殺に偽造できないんだよ。お前ら、自分の家のドアノブ、思い出

してみる」

言われたとおりに思い出してみるのが、それが何につながるかわからなかった。風の方を見て見ても、ピンときいていないようだ。

「あの、ドアノブが何の関係があるんですか？」

「まったく、わからないのか、伊津蟬。そんなんで俺の助手がやれるのか？」

まあ、仕事が来ないんでこれからもできるとおもいますが。とは言わず、雁雨の説明を今は待った。

「家庭のドアノブって、学校の円形のやつとは違ってレバーみたいな形してるだろ。けどあれにベルトを輪にしてかけ、首を吊ろうと試してもうまくやらないと滑るんだ。それに、風が部屋を出るときに扉を動かすから、隙間から抑えて閉めてもどうやって難しいと思うぜ。それに、殺した後夕として俺の元に戻らないと。っていう焦りもあつただろうしな。それなのに窓から首をつつてる姿を確認できた」

「つまり？」

「自殺したんだよ、あいつは」

「は？」

風の口から声が零れた。もうずっと、彼の視線はおよぎっぱなしだ。

「そんなのわかんないだろ。もしかしたらうまく滑り落ちずに、首を吊った状態になってただろうし、それに、偽造する前に僕は夕を殺したんですよ？」

混乱しているせいなのか、口調が段々崩れていつている。夕として生きていた彼と、彼自身の部分が、混ざりつつあるようにも感じる。

「殺せてなかったんだよ、ちゃんと」

「証拠はあるのかよ」

「あるよ」

「えっ」

そうい、スーツのポケットから一枚の封筒を取り出す。それには鷲海夕と書いてあつた。だけど、あの日見た封筒とは違う。

「これはな、夕が死んだ数日後に、俺宛に届いた手紙。まあ、あいつ自身の遺書だよ」

「夕の……？」

「ああ、そうだ。これがなかったら俺はずっとお前の事を夕として接してきたかもしれない。だからこの手紙が届くまでの間、俺はお前を夕と疑わなかったよ」

「だったら、なんであの時俺を糾弾しなかったんだよ」

「いったら、ここに来た理由。親友の頼みだって。俺は十五

年経った今、死んだ親友の依頼をようやく完了しに来たんだよ。これはもう、お前が持つてる方がいいだろう」

そういつて風にし少し古びた封筒を渡す。どうするか少々迷ったようだったが、震える手でそれを受け取り、中身を風が読むと、表情が忙しいほど変わり、最終的に笑いながら、目元を覆って泣いていた。

「やっぱり、僕は夕にはなれないなあ……」

そう呟くと、風は座り込み、うつむきながら、力なく雁雨に話を始める。

「なあ、雁雨さん。僕はこれからどうすればいいかな」

「自分の好きに生きろよ。これからも夕として生きるか、風にもどるか。それはお前の選択次第だよ」

空を眺めたと思うと、けどさ。と、雁雨は言葉を繋げた。

「お前、気づいてほしかったんだろ、本当は。風って呼ばれないことに。夕って呼ばれることに。だから今日、俺を呼んだんだろ。本当に気づかれたくなかったら、親友だった俺を呼ぼうなんてこと、しないでだろうし」

そう声をかけると、風は力なく笑った。

「そう、なのかもね。ありがとう、ごめんなさい。本当に、ごめんなさい、雁雨さん……」

「こつちこそ、ずっと抱えさせて悪かったな。でも、あいつ

の頼みだったから。それじゃあ、今日は帰るよ。何かあったら俺の事務所に来な」

いつでも相談に乗ってやるよ。という言葉を最後に、墓地を出ていく雁雨をそれでは。と僕も言い残し、急いで追いかける。

「大丈夫ですかね、風さん」

「さあ。けど、選択をするのはあいつだよ」

墓地の方を振り向くと、まだ風はうずくまっていた。

「あの、雁雨さんは今日のために、探偵になつたんですか？」  
そう尋ねると、少し悩むように唸り、まあ、少しな。と答えた。

「じゃあ、他の理由は？」

「俺の助手だったら推理してみな。にしても今日も暑いな。ファミレスでもよるか」

「今日は奢りませんかね」

「そんなつもりでいったわけじゃねえよ。ほら、行くぞ」

そうして僕らは十五年前からの依頼を完了させた僕は、鷺海夕が眠る墓地から立ち去った。

カピバラ  
狂騒曲

渡邊  
真

昼でも息が白くなるほど寒くなった頃、僕はその変わったお客さんの対応に追われていた。

大型犬用のキャリーケースを引つ張り、後付された家の中のエレベーターに乗る。使い切れないほどの遺産を受け取り、車椅子生活になった事件の直後、彼女が自宅で生活するために真つ先につけたそう。4階建てとはいえ、家の中にエレベーターがある家など見たことがなく、思わず相当高かったのではと聞いてしまった時に、「普通の車ぐらい」したと言っていた。彼女の言う普通の車とは一体どんな車だろうか。怖くて聞けない。

「珍しく、急な朝帰りだと思えば、案の定、仕事だったか」エレベーターの扉が開くと声が飛んでくる。

「そう言う君は今起きてきた所ですか、眠り姫」  
声の質から判断して間違いはない。

「雇い主を放置して、朝帰りとはいいい度胸だ、管理人。起こしてくれないせいで気がついたら昼になっていたよ。それで、朝食は？」

彼女は僕を最初から管理人と呼ぶ。

彼女との知り合ったのはその時メインのバイトにしていた喫茶店からの紹介だった。なんでもこの喫茶店のもう一

つの仕事、探偵組合に趣味で登録し、にも関わらず稼ぎ頭になっている女性の後見人から身元の保証できるヘルパーを派遣してほしいと言われたそう。喫茶店の仕事も気に入っていたし、気乗りしなかったが、時給の高さと恩人のマスターからの依頼とあり、面接は受けた。

彼女の第一印象は、パンサー。虎ではない。ライオンでもない。だが、少し窺れたともとれる華奢な体といかにも気難しそうな雰囲気から野良猫の様だと侮れば、途端に跳びかかり、頸を食いちぎられそうな、飢えた猛獣のような雰囲気を当時は纏っていた。しかも、詳しい話を聞いてみると僕の前には何人も正式な養成所を経た、本職の執事のような人がいたが、彼女は直刀のような性格が災いして全員クビにしたそう。僕の中では結論は出ていた。ご機嫌取りな仕事はごめんだと。そして、状況がわかったタイミングで、面接を半ば蹴ったつもりで本業ではないので期待には応えられないだろうと話を切り上げた。そこで彼女は「なら管理人として検討する」と言った。そのワードが偶然観ていた『ジョゼと虎と魚たち』から来ていることに気づき、ダメ押しのもりで、「『ジョゼ』というよりあなたは『アイリーン・アドラー』では？」と答えた。「彼女ほど男癖は悪くないのだが」と言われ、これで無事に難を逃れたと確

信した。しかし、なぜか帰宅後には明日から来てくれというメールが来ていた。それ以来、僕は管理人と呼ばれ、時々意趣返しに「アドラーさん」と呼んだりしている。

「この子の麻酔が切れる前に最低限の準備をしておきたいので買い置きしておいたみかんでも食べていてください」

昔からバイトの合間にペット保護のNPOにボランティアとして参加していた。彼女の協力を得て、使っていないかった部屋まで貸してもらったからは、専ら本部では対応しにくい24時間対応が必要な離乳前の動物や、看取り、医療ケア直後など一対一の対応が必要な動物の保護が割り振られるようになっていた。

キャリアケースを引きながら廊下を歩いていると扉が開き、姿を見せる。

「うん？　ないが、そんなもの」

「果物は？」「ない」「買い置きのコンフレークは？」「ない」「夕食を食べた記憶は」「ない」

そんなはずはない。昨日は夕食を作り終えた後にNPOからの保護依頼が来た。そこで受けても良いか確認したところ、彼女はディスプレイに張り付いたままぞんざいに「早く行ってやれ」と言われたので、夕食はワーキングスベ-

スの食卓に置いてから保護に向かっている。

「ひよっとして、今日の曜日は」

「金曜日だろ。そんなことより、朝御飯は？まさか、夜遊びをして、朝帰りをして、知らない子を連れ込んでおいて、私の世話は忘れたとは言わせんぞ」

明らかに不機嫌な声で予想通りの答えが来る。

「土曜日なので、休みです、作り置きした昼食は」

契約上、彼女のお世話は平日のみの、土日は休み、もとい他のバイトをしているが、一人前も二人前も変わらないので作り置きしたものが冷蔵庫に入っているはずだ、本来は。だが、起きたことを察して、帰りがけに買ってきたもののなかで、そのまま食べられるものを見繕う。

「冷蔵庫は空だった……が」

何が起きたかようやく気づいたようで、慌ててキッチンに戻り、流し台を見て呆然としているようだ。

バナナを入れた袋を見つけ、念のため、両手にひと房ずつ持っていく。これだけあれば、しばらくのおやつにはなるだろう。

普段と違う、うわずった細い声で聞いてくる。

「3食と買い置きを全て？」

ゴミ箱に捨てられた袋から判断して、おそらく1万カロ

リーは超えているが

「残念、昼夜5食と買い置き合計8千カロリー超えは確実にしようか」とだけ感情を込めないように言った。アドラーさんはこういう時に少しでも声色に感情を込めると、口を利かなくなるのは学習済みだ。一方で切り替えも早い。

「食べますか」と言うと、「ひと房貰おう」と言って受け取る。病み上がりの保護動物のために消化に良さそうだからと買ってきたものだったが、飼料用ではないので、まあ、問題はない。僕ももうひと房の方から一本貰うことにして、一緒に食べる。

彼女は時々こうなる。多忙な彼女は、それでもつまらない仕事が増えるといつの日か熱中という形で寝食を忘れ、エネルギーを爆発させる。スポーツ選手のゾーンに近い。一旦集中しだすと声を掛けても気が付かず、最低賃金も真っ青なカロリー量を手当たり次第に上の空で摂取しながら頭を回転させ、手当たり次第に謎を食い散らかす。有名所で言うと明智光秀の本能寺の変の後の未発見だった書状の場所や、戦中に沈んだ戦艦大和の未発見写真の場所の特定など、大抵は歴史上の謎が餌食になる。変わり種だとコナン・ドイルが書いた存在しないはずの青いカーネットの正体だろうか。彼女は解いた謎には興味を示さず、証明は彼女の人

脈にアウトソースする。もつとも、使われる専門家からしてみればその謎は何十年も取っ組み合い、それでも解けなかったものだ。それを解かれた上でメール一本でここ掘れワンワンの爺にされるのはたまったもんじゃないだろう。アドラーさん曰く、ホームズの薬の代わりの謎解きだと言っている。実際、アドラーさんの暇つぶしはフオローしがないとホームズの悪癖並みに体に悪く心配だ。何か食べるものがある時は半分以上の空でも食べながら考えてくれるが。しかし、何もない時にゾーンに入ってしまうと、消費カロリーを補えず一気にやつれてしまう。これは体に負担が大きいとドクターストップがかかっているが、思考は誰にも止められない。さらに困ったことに、痩せれば後からでもその分食べてくれれば問題ないが、彼女自身、体重には細心の注意を払っており、減ろうが増えない限り維持しようとする。結果、食事を巡る攻防は激しさを増し、いつの間にか上がった料理の腕という形で表面化している。

「それで、今回の子は？ 犬ではないんだろ」

アドラーさんはバナナを食べながら片手で動物の保護スペースに向かおうとする。

「根拠は」

それを後ろから押しながら聞く。

「犬なら君はバナナをこんなに買わない。しかもこのバナナの房の数と荷物の量から察するに君の性格から業務用スーパーにわざわざ寄っている。よほどの大食漢だ。そして大型犬用キャリーケースをわざわざ引いて、しかもそれなりに重そう。よって猿ではない。ケースの残り香から判断して雑食、または草食系とは思われるが、ミニブタならそんなに食べないし、ブタなら君の仕事ではなくどちらかというと養豚場。しかも街を歩いていない。街を歩いているなら狸もあるだろうが、サイズも食べる量も違う。他にはハクビシンはいるが、東京では駆除対象、ヌートリアやアライグマもいるが、先上げた条件の他に彼らは特定外来生物、飼育どころか生きた輸送が禁止されている」

「大体正解です。正解はカピバラ」

「カピ！ 鬼天竺鼠！ 体長1.1から1.3m、平均体重42キロ、走った時は50キロ、潜水時間5分以上、泳ぎも得意で、温泉好き。最長入浴時間は約5時間、全国の動物園で約200頭近く飼われており、自然界でも10頭前後の群れでハーレムを形成、生まれた時点で20センチ前後あり、3日目には群れに合流できる程度には歩け、一週間で離乳。法令上の規制もなく、登録等の義務もないが、脱走癖が強く、同時に一日3キロ近く野菜や果物、ペレットを食べる大食いのカピバラ」

食べかけていたバナナを一気に食べ、そのまま押していた車いすを自力でこいで急加速させる。追いついて押しなから言う。

「あれだけ忙しいと言って不摂生をしておきながら飼おうと計画していたでしよ、絶対」

目をそらすな。

「ともかく、日本国内では石垣島以外での野生化は報告されていないが、預かったのか」

部屋のゲージを開け、中に入ると身を乗り出し、寝ているカピバラの頭を撫ぜながら聞いてくる。

「鞆を啗えて道路で凍えているところを通行人が捕獲したそうです。その人が動物病院に運び込み、病院から連絡が来て、こちらで保護することになりました」

「症状は？」

「低体温症になりかけていたのとレントゲンから変わった異物を誤飲していたのがわかり、その回収にそれなりの時間が掛かりました」

「頑張ったんだな」

優しさを纏い、撫ぜる姿は普段の目線だけで相手を射殺しそうな彼女からは到底想像できない。昔は犬を飼い、溺愛していたと聞いているし、今もその写真を持ち歩いている

るのは知っている。彼女の動物愛はかなりのものだ。先ほどもはあは言ったものの、本当は保護犬か猫の一匹でも引き取った方が、彼女の為にはなるのかもしれない。もっとも、彼女の今の多忙な生活では責任を持ってないだろうし、僕も経済的に餵えない以上、無理な話だが。

「逃げ出した個体だろうからSNSで呼びかけて飼い主を探しています。おそらくはそう待たずに飼い主が現れると思います」

「異物は」

「食堂に置きっぱなしです」

「戻ろうか」

「これです」

ファスナー付きビニール袋に入れたUSBメモリーを机の上に置く。そのUSBメモリーには番号の振られたボタンがついており、端子にキャップもはまった状態だ。

「この商品の情報は」

「確認します」

自作したスマホのアプリを起動して、複数方向から写真を撮影、検索をかける。

「いつものアプリをまた使うのか」

「そうです。アプリはただのインターフェイスですが、これも結構アップデートしているんですよ。裏で画像データとは別に3Dモデルを生成して、画像のかき増ししたり、複数社で検索をかけ、推論モデルを過剰に盛ったり、テキストマイニングもしているの、時間が少しかかりますが通常のサービスよりは」

「精度は高いと？」

「のほほほ。自分で書いたもので断定はできませんが。結果出ました。おそらくは、セキュリティ機能付き、防水、防塵基準はIP67、水の中で使用できないことを除けば、最強の耐久性がありますね。と言うより、米軍軍用規格MIL-STD-810Gに対応の化け物です。二〇〇九年発売。型番がここにあるみたいですから……うん、一致しているので間違いはない」

「その規格は？」

「試験にもありますが、普通の使い方では何しても壊れないぐらいの耐久性があります。検証記事だと3mの高さから落としても問題なく動くHDDとかありました」

「それこそ買おうとしていたでしょ」

「30cmぐらいのところからデータ満杯のHDDを落として全損して泣きそうになったことがあるので」

「君いつも何か壊していないか」

「年平均2.7台は壊れますね。パソコンとかスマホとか」

「ともかく、鞆の方は」

薄汚れた黒いビジネス鞆を取り出す。

「これです。中身に持ち主が分かるようなものはありませんでした」

「ここから分かる情報は」

「アプリ曰く……使い物になりませんね。30%を超える候補が存在しません」

「それ無しで推論できることを」

「合成ではない、多分動物の革、割と古く傷んでいます。と、するならば昔はお金に余裕があったが、今は生活に余裕がない？匂いは、酒臭いことからすると酒で身を持ち崩したのでしょうか。昔ながらの音楽再生のウォールマンを使っていることから割と年配の人、60代ぐらいと予想します。他には、鉛筆や消しゴムが直で入っていることから考えても根拠の補強になるような、ならないような。あとは、頭痛薬が入っていることから頭痛持ちでしょうか」

スマホを持たない11年配とも断言できないが、音質に拘る傾向はストリーミングがなかったその世代の方が強いだろう。

「その仮定の場合、このゴテゴテしたUSBメモリーはどう解釈する」

「その点は分かりませんでした。なので、USBの持ち主と鞆の持ち主は別人と考えるしか」

「君の推理はやはり面白い」

「と言おうと」

「なぜなら、君の見ている情報からは妥当だろうけど、見えている情報からはあまり妥当でない。なのに結論だけは当ててきているからだよ」

「そう言う根拠を教えてください」

「まず、鞆に関してだが、裏から撫ぜれば分かるが、ぼこぼこした突起がある。これはクイルマークといいオーストリッチ、つまりダチョウの革の特徴だ。ダチョウといえば一応ワシントン条約の附属書Iに該当して、国際間の取引がき」

カピバラを保護している部屋からガリガリと耳障りな音が聞こえてくる。慌てて部屋に向かおうとすると、後ろから「カピバラは歯を研ぐために何でもかんでも齧る癖があるから気をつけなよ」と言う声が飛んでくる。遅いよと思いつつながら扉を引くとカピバラがゲージを齧っていた。

「後、前にあげた警棒を持っていてくれ」

「あんなもの齧らせませんよ」

確かにカーボンスチールとかいう割と硬そうな金属らしいが、せつかくもらった物を歯ブラシ代わりには絶対にさせない。

「カピバラじゃない、人だよ。今回の事件は荒れるかもよ」

「え」

「今回はカピバラを保護していただき、なんとお礼を申し上げればよいか」

飼い主から連絡をもらい、ここまで来てもらったのだが、問題はアドラーさんから基本はこちらに話を合わせるように言われ、どうしたものかと思っている。

年齢は50代前半ぐらいだろうか。髪はやや後退を始めており、くたびれた雰囲気を持つ人だ。肥満気味、BMIで30ぐらいだろうか。緊張しているのか、渡したNPOのパンフレットが手汗で柔らかくなっているのも気になる。身長が170前後と仮定すれば90キロ、武術をやっているればそれなりの攻撃力になりそうな重さではあるが、体つき、体運びからおそらくはやっていない。アドラーさんは引き継いだ遺産とその存在からちよくちよく襲撃される。そのため、気がつくくと彼女に近づく人の脅威判定を無意識にするよう

になっていた。もつとも、来るのはネット上に個人情報から撒かれており、大抵はそれに踊らされた考えなし、次に闇バイトの訪問団といったところで本当に危ない襲撃者はそんなには来ないが。ここに引越すきつかけも、出勤するとアドラーさんに「夜討ち朝駆けは奇襲の基本、それより、本当の目的はハラスメント攻撃だろうから、慣れた頃の本命の一撃が危ないぞ」と返り討ちにして、蹲っている襲撃者に容赦なく熊よけスプレーをかけながら言われたのが原因だ。その件で警備員の必要性をアドラーさんと彼女の後见人である叔父さんに訴えたところ、だったらお前がしろと言われてしまった。以来、用心棒も兼ねて住み込みで働くことになった。人嫌いな彼女と叔父さんとの折衷案だったのだろうか、自分でいうのもあれだが、色々な意味で不安心すぎはしないか。代わりに家賃がタダになり非常にありがたいので、文句はないのだが。唯一の問題は、不名誉極まりない自宅警備員になったかもしれないことだろう。

「まずいくつか質問させてください。カピバラの風神丸について」

「彼の名前も知っていたのか」

「ICチップを確認できたので。住所は東京都千代田区麹町通り二丁目21Bの2Fですね」

「そうだ」

「風神丸を飼ったきつかけは」

「この年でも独身貴族なもので、家で待つていてくれる存在が欲しかったからだ」

アドラーさんがこちらに視線を送るので、補足する。

「それは彼のSNSからも確認できます。ツイートの全テキストデータを解析しましたが、独身男性の特徴量と一致しました」

「ありがとうございます。家ではちゃんと歩かせていますか。やや風神丸、太り気味のようですが」

「いくつかの部屋をブロックしているだけで、他は自由に歩かせていますが。散歩の回数を増やした方がいいですかね」

「何か、硬いものを食べるといった異常行動は」

「特にない」

「そうですか。これはあなたの鞆でしょうか。風神丸が啜えていたのですが」

「はい。確かに仕事用の鞆です。これを風神丸が?」

「これはどこで注文を、これ、オーストリッチ、ダチョウの革ですよ。輸入品ですか」

「はい。ネットで買いましたが、数年使っている間にボロボロになってしまい。家計も火の車で買い換える余裕がなく

……お恥かしい限りです」

「実はこの革、ワシントン条約、附属書Iに該当しており、国際間での取引が禁止されているんですよ。私ども、動物を守るNPOの立場からこれを見過ごすわけには行かないのですよ。譲渡受けに当たるので、種の保存法違反となり、一年以下の懲役、または百万円以下の罰金といったところでしょうか」

「今はそれだけは。少し待つてくれれば、金が入る。そうすれば今回の謝礼でもなんでもする。だから、それだけは」

不自然に慌てだす飼い主だがアドラーさんは話を続ける。

「少し待てば? でも、今、あなたの勤めている会社、ポータス出る状況ではありませんよね? 出る予定がないような物私は待てませんよ」

「ポータスじゃないが、ポータスのようなものが出る」

「それで、言えないポータスとやらはそんなに学が大きいんですか。今回の風神丸くんの保護にかかった費用、それなりに高いんですよ。それに罰金分も合わせれば、3桁は必要です。そんな額、なんちゃってポータスでは払えませんよね。払えないのであれば、見過ごせませんよ」

「百万円なら」

「だめです」

「二百万」

「もつといけますよね」

「ごひやく」

「ほー、そんなに？　でも、まあ、そのぐらいで茶番はやめますか。そもそもワシントン条約に引つかかっているのは一部の地域のダチョウで、少し前まで福島でも野生になったのが走っていたぐらいですしね。それより、このUSB何か分かりますね、というか、分からない訳ないですよ。お、目の色変わった」

「……」

「君！　この状況で黙り通せると思っていますよ。この状況で知らないと言えばこれはこちらで遺失物として処理、あなたの手には二度と戻りませんよ。そして、これがあなたの物と言えばカピバラと鞆の窃盗事件として、警察に突き出しますよ」

「全て私の物だ。返してもらおう。人を盗人扱いとは親の顔が見てみたいよ、全く」

「ならば、その首掻き斬って、三途の川を渡る手伝いをしてやろうか、悪党。それでも貴様が死んでもたどり着けないところにいるが。」

順に説明してやる。

まず鞆、これを作った会社はバブル崩壊と同時に破産法の適用を受け、消滅している。よって、どう頑張ってもネットでのこの新品を購入するなど不可能だ。それに鞆に入っていたウォールマン、中の曲はボカロ曲とか、最近の子供が聞くような音楽の他に英検2級のCDなど、明らかに進学校の生徒が使っていた形跡があり、独身である貴様が聞くようなものではない。鉛筆や消しゴムが数本入っていたのも含め、これらまとめて落とし、そのまま気づかずに入ればなしにしていたのだろう」

「そんなものこじつけに過ぎない！」

「カピバラにICチップなど埋め込まれていない、貴様の認めた住所完全なでっち上げだ。麴町も新宿通りも実在するが、麴町通りなんてものは実在しないし、カピバラの名前に至っては、とある作品に出てくるカピバラの名前。彼女の名前なんて私も知らない。その上、カピバラの生地の一つも知らないで飼いなぞ務まるか」

「ちなみにこのUSBの中身、先程確認したところ、ファイル名だけ確認できました。30桁の乱数、中に何億入っていたかも確認しています」

「チェックメイトだ。観念しろ」

「チェックメイトはこっちのセリ……」

「管理人！」

言われる前に、応接セットの低い机を蹴り飛ばし、足を挟まれ体勢を崩したところを狙い、警棒でナイフの手を叩く。飛んでいき、どこかに当たって派手な音を出したナイフは無視し、相手の喉に警棒を突きつける。

「場数が違うので、観念してください」

言った直後にガチャンと壺が割れる音が響く。どうも弾いたナイフはあちらに当たっていたようだ。

「悪党、君には2つの選択肢がある。ここでいくつか確認した上で、自首という形で少しでも罪を軽くするか、それとも怖いお兄さん方に取り調べという名で話を聞いてもらった上で、その分罪を重くするか」

「話して頂いた内容はこちらでまとめ、あなたに確認してもらった上で、あなたの手で警察に提出させて頂きます。当然話していただけますよね」

「は〜……」

「これは二〇一三年にあった仮想通貨取引所の流出事件で盗まれた仮想通貨で間違いないね」

「どうせ調べはついているんだろ」

「ああ、そうだ。だが君の口から聞く必要がある」

「あの事件に参加した人が飲み仲間にした。そいつは性格が悪く、私に金がないことがわかると見せびらかすようになった。だが、ある時酔っぱらって事件のことを語りだした。あそこで実際にUSBを交換したのは俺だったと自慢しました。その仮想通貨は追跡されているため、ダークウェブで換金しないと金にならないが、換金すると4割近く手数料で持っていかれ、だからほとんど換金していないなど聞いてもいないことをだ。そして彼は、『あと一年もすれば時効になる。そうしたらお前の借金ぐらいついにかしてやる』とこのUSBを見せながら言った」

「だから盗んだと」

「盗んで何が悪い。働いても、働いても、すべて利息の返済で全部持っていかれる。なのにあいつは働きもせずに昼間っからそれを肴に高い酒を飲んでいやがる。あいつは俺をさんざん虚仮にした。こんな不公平があるか。どうせあいつの酒代になるんだ。だからこれくらい貰ってやったほうが社会のためになる」

「これくらいって七十億だぞ」

「俺が盗んだ時は十億なかった」

「明日にでも一億を切るだろうさ。そんなことよりどう盗んだ」

「言われてから毎日隙を窺った。あいつは何も信用していない。だから常に持ち歩いてきた。だから、時効ギリギリの、あいつが最も有頂天になっている頃、盗まれると一番痛い時を狙って盗んでやった。酔いつぶせばいいだけだから簡単だった。これであいつも破滅だ、ざまあみあがれ。後は、奴を起こして、例のUSBを見せてほしいと頼めば、信号機のように酔った赤ら顔が一気に真っ青になった。そのまま店を飛び出していき、そのあと一か月もの間、街中をボロ雑巾のようになって探し回っていた。あれ以上の傑作はない。そのはずだった、そのはずだったのに」

「喚いたり、笑ったり、泣いたり忙しいやつだな、貴様は。それより、続ける、警察が来たんだろ」

「ああ、今頃になって警察が来やがった。俺とあいつに内偵がついて、このままでは、あいつの身代わりになって全部罪を擦り付けられるところだった」

「まあ、盗まれた取引所の逮捕されたCFOの証拠は集まらず、最高裁で無罪になったことで捜査が振り出しに戻ったそうだからな」

「なのにあの内偵、俺がアル中とわかると、手を抜きやがって、尾行していることがバレバレだったさ。だから、そいつが、カピバラを探しているとか言うやつにとっ捕まっ

ている間に撒いてやった。それで路地裏を走っていると前からいきなり何かが出てきて蹴躓いて、もっていた酒をぶちまけてしまった。起き上がって見てみるとぶちまけたその酒をカピバラが舐めているじゃないか。飲みすぎでまた幻覚を見ているのかと思っただが、どうもそうでもない。そいつは人馴れしているようで、餌でも要求するように近づいて来た」

「そこで職業柄、思いついたと」

「ああ、そうだ。あの特徴的な歯、いつも相手にしている鼠たちと同じじゃないか。ということはあいつらと同じく、殺鼠剤だろうが何だろうが、一度食べたものは吐き出せない。それに江ノ島の猫事件、五人目の誤認逮捕はいつだという洒落を思い出した。警察なら生き物には手を出さない、絶対に見つからない隠し場所だと思いついた」

「パソコントロイ遠隔操作事件か。まあ確かに、飼い主の了解を得ずに確証もなく動物を傷つけた場合、いくら警察といえど器物損壊罪になりかねず、おいそれと手は出せない。それに、鼠やヌートリアと違ってUSBぐらい入る体のサイズ、しかもいくら東京とはいえ飼育数が知れている以上、あとからいくらでも特定できると踏んだわけか」

「そうだ。だから餌をやるふりをして、カピバラが近づいて

口を開け、食べようとしたところを抑えて一気に喉へ押し込んだ。混乱して暴れるやつを離し、奴が逃げて行った方向とは逆方向に何食わぬ顔で出ていき、追いついて来た私服警官の職質および家宅捜索に協力し、何も出てこないことを確認すればホレ、人畜無害な一般人の出来上がりさ」

「そのうえ、これがトリガーとなつて、流出事件の実行犯の一人も実際に罪を被つた、だから、あとはUSBを回収するだけのはずだったと」

「それなのに、それなのに、あんたらに。見逃してくれ、見逃してくれよ、もう心を入れ替えるから、改心するからさあ」  
足に縋りつかれも困る。

「いや、さすがに数十億するもの道端で拾いましたは無理があるでしょうが……」

「それに貴様は、改心してすべてをやり直そうというなら、少し勾留なり、刑務所なりで酒を抜いた方がいいぞ。その多汗や情緒、手足の震え等、明らかにアルコール依存症の離脱症状に酷似しているぞ。このままだとあと一歩で体の上をいもしない虫に這われる幻覚になり、もう一歩で食事よりも酒が優先されるようになって死に至るぞ」

「それでも、いくら止め様としてもやめられなかつたんだあ」  
「しつかりしろよ、これは早いうちに医者も頼む必要がある

か。ともかく、アルコール依存症も薬物依存症も最終的なメカニズムは同じで、意志の強さに関係なく、中枢神経系を乗っ取られて生命維持すらままならず死に至る。お前のさんざん殺してきたネズミたちですら、食べるのを忘れ瘦せかけて惨めな死に至る。まあ、人の場合、そこまでもつかもわからないが、あいつらと似たような死に方をしたいか」

「それは嫌だ、それだけは嫌だ。あいつらは仕事相手であつて俺じゃない、そんな死に方だけはしたくない！」

「じゃあ、まあ、行こうか。そっちの準備はできたか」  
「できました。あとはサインをもらうだけです」

「さすが、仕事が早い。この内容が事実と認めるならサインを。警察と担当する弁護士に渡すから」

手が震えてなのだろうか、判読不能なレベルのサインを二枚に書いた。そのまま腰が抜けたようにぐにやぐにやになつてしまったので、抱えるようにして車に乗せ、警察署に引き渡し、そのまま事情聴取を受けた。念のため盗まれた取引所にも連絡を入れておいたがどうもその社員の人が飛んできて、問題のUSBの経緯や取り扱い等もう一度、3者で話す羽目になつた。

「彼らこの後どうなるのでしょうかね」

「帰りの車の中で言う。」

「実行犯の男は刑事罰を受けるか正直微妙だな。一応時効は過ぎていたんだが、法解釈上、彼らが証拠隠滅の共犯者として認定された場合刑事訴訟法第254条に基づき、時効が停止されていると判断される可能性もあるし、同じ条項が問題で、真犯人でない者が起訴されている事件も時効が停止されるといふ議論もある」

「あのCFOの件がそこで響いてくるんですね」

「まあ、法律は法律屋にまかせようそれより、カピバラの飼い主を待たせている、早く帰ろう。そのあと、ガチヨウを夕食に頼むぞ、管理人」

「なんでガチヨウなんて急に食べたいと言い出したんですか」

「そりゃこういう事件の後にはガチヨウに限るだろう。まさかカピバラ食べるわけにはいかないし」

「まあ、そうですね。ヌートリアなら狩猟免許持っていれば日本国内でも入手も食べることできるみたいですけど、ガチヨウなんて近くのスパーに売っているとは思えませんよ」

「君、意外と悪食だな」

「僕じゃないですよ、狩猟免許もっている友人が言っていたんです。どこに売っているか分からないガチヨウよりも、すぐに食べられるフライドチキンにしませんか」

「ともかく、ガチヨウを頼む、君の割ったあの壺、君の年収なんかはるかに超えるんだぞ、それに父の形見だ」

「そんなこと言って、だったらあの部屋で犯人の取り押さえなんてさせないでくださいよ。それに第一、ならず者があそこまでよく押しかけてくるせいであの部屋いつも割られたり、投げられたりでボロボロになっているじゃないですか。そんなところにそんなものを……。あれ？ そんなところにあなたが置くはずじゃないですよ。もしかして数百億するような壺じゃないですか。オリジナルは大英博物館にある」

「君、事件では割ととんちんかんなこと言う割には、こういうところは意外と鋭いじゃないか」

「とんちんかんですみませんね」

「でもあれは父の形見なのは本当だぞ、データだが」

「データってことは、完全に贋作じゃないですか」

「精巧なレプリカと言ってくれ。ちゃんと見えないところには識別できるようにしているんだから。それにレプリカと違って、作るには数万かかるんだから。下手な本物よ

りも至宝の上手いレプリカの方が価値がある。それが私と父の考えだ」

「わかりましたよ。じゃあ、カピバラを飼い主のもとに返したら、朝行つた業務用スーパ―とその途中の店を探してみます。それでなかつたらあの業務用スーパ―に確かおいしい地鶏が一匹まるごと売っていたんでそれにしましょう。丸焼きにします」

「よし、それで手を打とう。あとその屋外の園芸コーナーで売っているチューリップの球根を買ってきてくれ」

「最初からその気だったんですね。あんまりからかうと、鳥は鳥でもスズメの肉買ってきて、丸焼きにしますよ」

「やっぱ、君、悪食だろ」

「そんなことないですって、いろいろ食べるだけで」

「ほらやっぱり」

こうして、カピバラと飼い主の鞆は飼い主のもとに帰り、スーパ―を数軒周つたものの結局は地鶏を焼くことになり、この日の事件は終わった。

あれから1か月後、僕は机に突つ伏していた。原因は二つ。一つ目は拾得物扱いで謝礼として、今回の事件の被害者である取引所より警察から返還され次第、USBに入つ

ていた資産の5%分を支払うという連絡があったこと。正直そこまで謝礼があるとは思っていなかったので大変驚いた。彼女も日銀の小切手拾得事件の判例からもらえて0.1%だろうと予測していたので、驚いていた。二つ目の原因は昨日のG8でステーブルコインと呼ばれる一部のコインの禁止の声明を発表、その余波で今日までに謝礼の仮想通貨の価値も45億分の1まで下がったからだ。

「してやられたな」とアドラーさんは笑いを堪えきれないように言う。

「そうですね、税金差し引いても一億ぐらい手元にのこつたかもしれないですよ。よく笑っていられますね」

「そんなことより、あの日買ってきてもらった、チューリップの球根、ようやく花が咲きそうだぞ。季節と水栽培から厳しいかとは思ったがどうにかなりそうだ」

「手に入ったかもしれない一億よりもチューリップですか」

「仮想通貨も17世紀のチューリップと差はない。花を咲かすかもしれない分、私はこちらの方が好きだ」



まじわる

くりすていの  
アヤノ

今のような昼間は半袖でいられても、夜は少し寒く感じる季節になった。桜田ハイムの四階、四号室のチャイムを鳴らす。今時四〇四号室なんて、物騒だなんだと文句を言われはしないのだろうか。まあ、ドアの向こうにいろである。彼はむしろ大喜びなのだろうけれど。そういうやつだ。そういうやつに住む部屋のチャイムを、今俺は鳴らしているのだ。

「はい」

しゃがれた、でも幼いような声がインターフォンを通してさらに砂まじりになって耳に痛い。

「俺や、開けてー」

「……俺って誰ですか」

「え、俺やん。そんな声忘れるほど会ってなかったか？」

「……俺って誰ですか」

「ええ、あの、佐々木啓介やけど」

「ああ、はいはい」

鍵の開く音がする。案の定開かないドア。俺が自分でドアを開けると、見えるのは案の定散らかり放題で埃っぽい部屋。その中央、ゴミの中心に置かれた椅子に座っているのが、渡遊大。

渡とは大学に入って知り合った。初めは芸術系の大学に

よくいる、何事に対しても斜に構えて改めない学生かと思っていたが、本当のところそうでもないらしい。俺は彼と関わって、人は自分よりいかにも頭脳明晰なやつを見ると、そいつが斜に構えているのだと錯覚することを知った。別に偏差値が高いわけでも低いわけでもない俺たちが通う芸術大学では、そういう意味で彼は特別視されている。しかも彼は一般受験で入ってきたやつではないらしいから、それもさらに学生たちの興味をひくのだろう。頭はいいくせにそれを武器にしようともしない、他に才能があつてそれを認められて入ってきている、周りからはそう見える。ただ一人教室で絵を描いている彼を、いくつもの嫉妬と羨望の眼差しが刺しているところを俺は何度も見たことがある。

まあ、そんな彼の部屋がこんなゴミ屋敷だとは誰も思っていないだろうが。

「親友の声も忘れるとはな、お前ほんまに」

「オートロックじゃないボロアパートに『俺や、開けてー』って言ってくる方が悪いと思うよ、僕は。ただでさえ、今は物騒な世の中なんだから」

彼の座るソファが軋んだ。

渡は自分でドアを開けない。鍵を開けているのも彼自身かどうか分からない。奥の部屋の襖の向こう側を見せてもらっ

たことがないからである。同居人はいないと聞いてはいるが、おいそれと信じるほど俺もアホではなかった。かといって、彼が嘘をついているようにも見えなかったのだけれど。

渡には、他にもいくつか習慣と呼べるようなものがある。今のように、彼がやらないと決めていることは絶対にやらない。なぜやらないのかは聞いたこともない。俺の全く理解出来ないような話を小一時間語られるかもしれないと思うと聞くに聞けないのだ。

ゴミの中を進む不快感には慣れない。渡の話にテキトウな相槌を打ちながら、それとなく部屋の片付けを促すのはいつものこと。聞いてもらえた試しはない。

「まあそれは、そうか。あ、ほんでお前このゴミ片付けとけつて言うたやろ。なんでまたこんな散らかしてもうて」

「まあ、ここから動かないからね僕は」

「飯は？」

「宅配」

「どうやって受け取んねん」

「置き配」

「オキハイ？ なんやそれ。玄関までは取りにいくんとかやうんか」

「……まあ、カップラーメンには及ばないんだけどね、どこ

の料理も」

「アホか。ほんで話聞けよ。まあなんや、とにかく、ちよつとは掃除せえつて」

「大丈夫、住めたらいいんだから」

そう言つてヘラヘラ笑う。偏屈そうで内気そうなこの顔をよく覚えておいてほしいものだ。滅多に変わることはないのだけれど、もう一つ見てほしい顔があるもので。

「ほな、ちよつと外行こか」

「ねえ、前から思つてたんだけど、僕を外に連れ出すのつてやっぱ健康になるためだよな？ それなら僕行かないからね？」

「ちやうて。事件探しに、つて前も言うたやろ。ほんで見つけたやん。事件」

「犬が脱走したつてやつでしょ。あれ、佐々木の書いた台本があつたんじゃなかつて僕はまだ疑つてるんだからね」

彼は俺の言うことをよく否定する。が、犬が脱走したとこのを事件であると言つたことは否定しない。どんな規模でも事件は事件だ、というのが信条らしい。

「勝手に疑つとけ。ほら、行くでー」

開けたドアから部屋に光が入ることで、電気がついていなかったということを知った。

昼間は半袖でいい。逆に、昼に長袖を着ていると少し暑  
苦しく感じる。渡を見ながらそう思った。この時期の普段  
着にしては少々厚着ではないだろうか。

「暑くないんか、その服」

「いや、別に」

自分から話を振ったはいいものの、次が続かない。渡と  
話す時には、なぜか他の人との間にはない緊張感を得てし  
まう。何を言っても仕方がないような感じがして、結局黙っ  
ているのが一番楽なのだ。けれど話を振った手前あとに引  
くことも出来ず、テキトーなことを口走ってしまう。

「……渡って、服はちゃんと選ぶんやな、毎日」

「え、なにそれ。なんで僕が昨日と違う服着てるって思った  
の？」

しまった。めんどくさいことになりそうだ。こういう質  
問をされてしまった以上、答えずに次の話題に流れを変え  
ることは出来ない。

「いや、別になんとなく」

「それはまずいよ、すぐくまずい」

渡の口癖だった。

「まあ、今のところ僕は人に変なやつだと思われぬ方が都

合いいから一応毎日着替えてはいるけどね」

「着替えるんかい」

彼は普通に見えて、というより内気でやる気のないどこ  
にでもいそうな青年のように見えて、どこかその辺の大人  
よりも頼もしい時がある。左側の犬歯を舌で舐める変な癖  
も、彼がやれば様になるという時がある。そういうやつだ。

「根拠もないのに人のこと決めつけちゃだめだよ」

「お前もよくやるやん、人の職業言い当てる遊び」

「僕には根拠があるからね。僕らが知り合いじゃなかったと  
しても佐々木が大学生だつてこと、当てられると思うよ」

「俺は顔が若いからなあ、高校生に見えんこともないやろ？」

「どや？」

「あーあ、だめだこりゃ」

そう首を傾げていた渡が急に立ち止まる。つられて止ま  
るが、その真意が俺に分かるはずもなく、俺はただ渡を見  
ていた。

「……佐々木って本当に巻き込まれ体質だよな」

「え、何がや」

「ほら、あそこ。なんか落ちてる。あれ、拾ったら多分僕は  
何かに巻き込まれちゃうんだけど、でも拾いたくて仕方が  
ないんだ。ねえ佐々木、どうしようか」

「巻き込まれるために散歩しとったようなもんなんやし、拾えばええんとちゃう？」

微笑んだ渡とともにその何かに近付いてみると、それは汚い紙の切れ端だった。汚く文字が書いてある、雰囲気のある紙切れ。たまたま通りかかった道で、こんなものがちょうど目の前に落ちていたなんてことはそうそうない。それでも、渡ならこういうことがあってもおかしくない。と、俺が思っているのと同じように、渡も今頃腹の中ではどうせ、こうなったのは佐々木のせいだとも思っているのだろう。あの日も、犬を探してくれないかと頼まれたのはもう何回目だったか。自分も大概だということは認めている。

「どれどれ……『S.F. CaSc』やて。なあんや、ただの子供の落書きやんか」

「それはまずいよ、佐々木」  
「え？」

よく見ると、紙には千切られたような跡があつて、続きは読めないようになっていた。

「今日は、九月十六日だったっけ」

「あ、ああ、そうやけど、それがなんや」

「今日か。そしたら、何時にどこだろうね」

「ついていけないとついつい苛立ってしまったって、俺は荒い

声を出す。

「何がや、俺にも分かるように説明せんかい」

渡はにやにやしながら俺に近付いてくる。そう、この顔。人を馬鹿にしているように見えて、実はこの顔は渡が楽しんでる証拠なのだ。興奮している、と表現した方がいいのかもしれない。

「元素記号だね、これは。すいへーりーべー、みたいな習慣なかつた？」

「ああ、あれ俺嫌いやつてん。もう忘れてもうたわ」

露骨にがっかりした顔でため息をつく、渡は説明を続ける。

「水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウムって続いていくんだけど、それぞれに原子番号っていうのがあつて、Sは硫黄だから16、Fはフッ素で9、みたいに元素記号に対応してつけられてるんだよ。元素記号の頭文字は基本的に大文字だつていうところから考えると、後ろのはふたつの元素記号で構成されているんじゃないかな。Caはカルシウムで20、Scはスカンジウムつてやつで21だから、合わせて2021、今年の西暦と一致してる。そしたら最初の文字は日付を表してたつて予想がつくし、そうすれば文字の間に打たれたピリオドの位置の説明もつくでしょ」

でもこの字は子供の、と言おうとした瞬間。

「利き手と反対の手で書けば誰でもこんな字くらい書けるよ」

頭の中を覗かれたようで鳥肌がたつた。渡は続ける。

「まあ、つまりはこれが今日を指してるってこと」

ひらひらと紙の切れ端を得意げに揺らす渡は、少年の顔をしていた。

「せやかて渡、そんなもん分かったところでどうしたらええねん」

「そうなんだよね。普通に集合場所とか集合日時とかを指定するだけならこんな書き方する必要ないし」

俺たちの横を赤い軽自動車を通り過ぎた。次の瞬間、窓から紙切れが投げられる。その紙はひらひらと舞うと、数歩先に降りた。

「……佐々木、本当に君は巻き込まれ体質だよな」

「こっちの台詞や」

紙を拾い上げて一見した渡は、また口の橋を釣り上げてほんのり不気味に笑った。

「ねえ、ちよっと車出してよ」

「はあ？ アホ言うなよ、今から車取りに行つてあれを尾行出来るほど俺は足速ない」

「尾行なんてするわけないでしょ。紙は僕が拾つて、そんな僕を佐々木が拾う。ね」

「ね、やないわ。面倒くさい、絶対に俺はそんなこと……」

あとはご自由に、というように口の端を少しあげて紙切れをまたひらひらと揺らしている渡。実際、渡がどう思っているかなんて俺には分からない。けれどこいつは、俺が折れると分かっているように、微笑みながら静かに待つのだ。ここで派手に駄々をこねられでもすれば俺ももつと突き放せるのに、何も言われず待たれるとなんというか、むずむずしてしまつていけない。正直今もむずむずしているのだ。こうなつてしまつたら、もう俺が折れる以外に道はない。

「……ああもう、はいはい、分かったからおとなしくそこで待つとけよ！」

洋風の、豪邸といえないこともないこの家が俺の実家だつた。

「ほんま、なんで俺がこんな走らなあかんねん、あのアホ……」

家に着くと、案の定誰もいなかった。好都合だとばかりに俺はリビングの親父の部屋にかかっている暗証番号入力型のキーボックスを開けた。なんで開けられるかというの

はまた今度話すことにしよう。まあ、渡だとだけ言っておく。そこには車庫にある車の鍵がたくさん保管されている。親父曰く、そこにある車は全て鑑賞用だそうだ。昔は乗り回していたといつか自慢げに親父が話すのを聞いた気もするが、愛する妻に「私と車、どっちがだいじなの？」と言われてしまえばその車たちも易々と観賞用にされ、終いにはほこりを被ってしまうらしい。

「すまんな親父、ちよっと借りますで」

こんないい車が倉庫で眠っているだけなんていうのは親父も望むところではないだろう。俺は渡がいた道まで車を走らせる。忙しなく動いていて時計など見ていなかったが、家までは恐らく数十分でついたはずだ。一時間はかかっているまいだろう。渡が見えた。彼の目の前で車を止める。

「おお、来た来た。ありがとね」

渡を乗せて、とりあえず車を走らせる。一応、この辺りの道なら頭に入れてあった。

「シートベルトな。お前が運転しろや、ほんまにもう」

「車は大破するし佐々木も僕も捕まるけど、それでもいいなら」

「まあ……冗談や。ほんで、どこ行くんやこれで」

「ここから近くて、女性がたくさんいるところってどこかな。」

人気のキャラクターがいるとか、流行りのお菓子があるとか」

「なんや急に女って、ナンパか？」

ボケたつもりだったが、無理があったらしい。渡はため息をつくことも忘れて、声も出さずにしばらく俺を冷めた目で見ていた。そして、心底呆れたというようにやつため息をもらして言う。

「関西出身の人ってどんな状況でも絶対にボケないと気が済まないの？」

「いや今のは変なボケで俺が勝手にスベっただけや、気にすんな。ほんで、なんや、女がようさんおるところ、やったか？」

無言で頷く渡。そのまま両眉が密着してしまうのではないかと思うほど深くなっている眉間の皺が、渡にとつてそういう場所を思い浮かべるのがどれだけ大変なことを示していた。少し可哀想にも思えてきてので、俺はとにかく何か言うことにした。

「まあ、なんや、どこやるなあ……あ、一応、タチ助パークの観覧車は今そこそこ人気らしいけどな」

言いながらハンドルを切る。タチ助パークに行くならばこの交差点を左だ。

「タチ助パーク……ああ、ニュースになってたね。ホテルの

跡地に遊園地が建ったつて。あれでしょ、ホテルのオーナーが失踪して倒産したから、その敷地を親族から破格で買い取ったつていうずる賢いおじさんが建てた遊園地。たしか、劍崎徹とかいう名前じゃなかったつて、あのおじさん」

そう言いながら調べたのか、渡の手元のスマートフォンにはタチ助パークのホームページが。下までスクロールすると、遊園地のマスコットキャラクターであるタチ助と肩を組んでいる劍崎の写真が出てきた。タチ助の、強いオレンジ色をした胴体が目に痛い。それを見て顔を顰める渡。その後ろに映っている車は社長の愛車だそうだ。

「そのずる賢いおっさんが建てた遊園地のキャラクターデザインがいいとかなんとかで、今フオトスポットになつてるみたいやで」

「じゃあそこに行こう」

「アホかお前、俺の雑な頭から出たなんの根拠もない案やぞ？」

「いい。僕は一生かかつても思いつけないからね、女性の行きたい場所だの今時の流行りだのは」

「……ほな、とりあえず行ってみるか」

ウインカーを出して、俺たちの車は大通りに出た。

車中、特に会話なく進むと思いきや、珍しく渡が口を開く。

「佐々木、命令形の言葉たくさん挙げてみて」

「え、なんやそれ。てか、そんなもんお前でも出来るやろ」

「いいから、早く。言葉は佐々木の専門分野でしょ」

そう言われると、肩に力が入ってしまう。

「ええ……行け、押せ、やめろ、離せ、話せ、飲め、食べろ、食べるな、やれ、戻れ、来い、とかか」

「来い、か」

「なんや、なんか分かつたんか？」

「いや、別に。ありがとう、もういいや」

もやもやしたまま車を走らせるこちらの身にもなつてほしいものだ。

「着いたで、ここがタチ助パークや」

「ほんと、運転荒いよね」

「しゃーないやろ、おかん譲りや。ていうか、あれ、ここに何しに来たんやつけ？」

「まあついてくれば分かることだし、とりあえず観覧車まで行こうよ」

入場口のゲートを抜けると、パークの中は土産屋や屋台で賑わっていた。その軽快な音楽につられるようにして軽い足取りで進む渡。その彼のあとに着いて歩いていると、

程なくして大きな観覧車が見えてきた。渡はある種軽蔑の意味があるようにも見える目つきで、頂上付近のひとつのゴンドラを眺めている。

「あの頂上で止まったら死ぬって覚悟出来るのかな」

「そんなん思つとる間に死んでまうんとちゃうか」

「……そうだね」

観覧車の前、キャラクターの看板が立ててあるところには案の定女性の人だかりが出来ていた。渡が息を吸い込む音が聞こえて振り返った時には、もう渡は大口を開けて叫んでいた。

『『MeHe』ー』

視線が痛い。渡は気にしなくても俺は気にするし、このご時世によくこんなことが出来たものだ。動画投稿者ではないかと疑われたのかカメラがこちらに向けられる。俺は慌てて渡の顔をカメラから背けるように肩を引いて振り返らせた。

「は、お前急に何言うとんねん、こんなところでそないな大声、やめろつてお前」

「佐々木の言ったこの場所が、もしその場所だったら、この中のたったひとりだけがこっちに向かって歩いてくる。どうかな、来た？」

ほとんどの女性の俺たちに対する関心が薄れて立て看板に群衆の意識が戻る中、ひとりだけこちらを見ている女性があった。渡は、その光景を見てもいないのに鼻で笑うと、確信したように頷いた。彼女はこちらへ近付いてくる。

「あ、あの……」

彼女は完全に渡に話しかけていた。が、俺は彼女と渡の間に入って話し始める。

「はい、なんでしょうか。ああ、さつきはすんませんでした、こいつが急に大声なんて出してしまってもんやさかいに」

「ああ、それはよくて、その、そちらの方はなんで」

「なんで、その言葉を知っているんですか、つて聞きたいんですよね」

急に口を開いた渡に、女性は驚きを隠せないでいた。それは急に話始めたから驚いたのではなく、先程の俺と同様、頭の中を覗かれたような心持ちになったからだ。つた。

「人間が作ったなら、人間に読めないはずがないんですよ」

渡は女性の方を向くと、

「まずいですよ、すぐまずい。まあ、あなたはそんなこととっくに分かかってここに來てるんでしょうけど。あのお賢いおじさん、ずる賢いだけだと思つてたけど案外ゲスいことするんですね」

「な、何を言っているのか私には分かりません」

「あなたが人を殺してない限りはあなたが勝てると思いますよ、裁判」

彼女は黙りこくってしまった。

「さ、裁判？ 何を言うてるんや、お前」

「行こう、もう僕はここに用はない。ほら、アパートまで送ってよ」

促されるまま俺は渡と車に戻った。女性の物悲しい表情がしばらく忘れられなかった。

車中は行きよりも重い空気で満たされていて、深く息を吸っても酸素が身体に入ってきた感じがしなかった。ウィンカーの音が大きく感じる。

「お前、さっきなんて言っとったんや、あれ。NeHeとか、わけの分からんこと」

渡はしばらく黙っていたが、鼻を鳴らすと話し始めた。

「来い、って言ったんだ。元素記号にしたものを数字にして、それに対応する平仮名を当てはめると日本語になるっていう、言葉遊びみたいなものだよ。Neはネオンで原子番号は10、Heはヘリウムで2。五十音を、あⅡ1、いⅡ2、として順番に対応させていくっていうのは勘だったけど、あれ

だけ派手に土地を買収するような人にとつてはもうこの時点で緻密に見えるだろうからこれ以上の複雑さはないと踏んで、10Ⅱこ、2Ⅱい、それで、来いって意味になる」

「でも、コイって同音異義語があるやろ」

「だから大声で叫んだんだ。ダメ元だったけど、少しでも命令に聞こえるように」

「……なるほどな」

それに、と渡は続けた。

「言われ慣れてたみたいだよ、彼女」

「えっ？」

「覚えちゃうんだよね、何回も聞いた単語って。元素記号を数字に直してからそれに対応する文字に直すなんて作業、普通はもつと時間がかかるはずだから。まあ、言葉の意味が通じなくても、なんでその言語を知っているんだっていう疑問を抱かせられればよかったんだけどね、今回は」

「……そうか」

信号が赤に変わる。止まったタイミングで、渡が俺の目の前に紙切れを差し出す。

『NeHe MoHeNi』

学のない俺がすぐに全部を読めるはずもなかったが、読みたくもなかった。

「ちなみに、『』は半濁点の意味。直接的な表現を使うのが好きだったみたいだね、あのおじさんは」

紙をポケットにしまいながらも、渡の口から言葉は止まらない。

「日も落ちてないっていうのに。クズに時間の概念なんてないってことだ。いいよね、権力者は」

嘲笑うように吐き捨てたあと、渡はため息をついた。さらに重くなった空気を変えようと、俺は少し調子のいい声を出す。

「でも、ほんまにタチ助パークやったなんてな。俺の勘もたまには役に立つもんや」

自分でもいささか呑気過ぎた声色と発言だったと思う。仕方がない、いわゆる関西人と呼ばれる人の悪いところだ。そんな俺を横目で見て、渡は先ほどポケットにしまった紙をまた俺の前に差し出した。ちょうどまた信号が赤になったタイミングだった。

「ここ見て、紙の端のところ。破られてるけど、オレンジ色の模様が見えるでしょ」

「おう。けど、それがなんやっていうねん」

そこまで言ってしまうから、俺は気づいた。

「……タチ助の、耳？」

「そう。このメモ帳はタチ助パークで売ってるグッズの、試作品」

「試作品？　なんでこれが試作品やって分かんねん」

「観覧車に行く途中で見た土産屋にあったものとは、タチ助の形が少し違ってるからだよ。特に耳。ホームページの写真とも違ってた。作ってみたら意外と可愛くなかったってやつだよ、よくあるでしょ。これはその、キャラクターの改良前に試作したグッズ。だから、これを持つてる人は相当限られてる。例えば」

「あのおっさん、とか」

額く渡。そして、ポケットの奥に紙切れを押し込んだ。

「あの女の人に会う前にだいたい分かってたんだけど、言いたいことがあったから」

「そこまで言うと、渡は口をつぐんでしまう。執拗に聞くこともしないまま、俺は青になった信号に従って車を発進させた。」

「……あ」

「もう、今度はなんだよ」

少し不機嫌そうな渡に気を遣いながらも、それで疑問が消えるわけでもないの、素直に質問する。

「あの紙は、おっさんが捨てたんか？」

ずっと気になっていたことだった。俺と渡が巻き込まれた原因となる紙切れだ、誰が捨てたかは知っておきたかった。

「そんなことするわけないだろ、仮にも証拠なんだから……というか、剣崎が誰かに渡したはずの紙切れを自分で持っているつても変な話だしね。それに、剣崎の車は黒の乗用車。ホームページで見たでしょ。あの車は、あの女の人のだよ」

「へー、と声を漏らすと、それに軽く頷いて渡は続ける。」

「単純に捨てたかったっていうのもあるかもしれないけど、誰かに拾われたっていうのは少なからずあったんじゃないかな。警察じゃあかんねん？」

「なんで警察じゃあかんねん？」  
渡はしばらく無言だったが、身体から悪い空気を全部吐き出すように深呼吸をしたあとで静かに言った。

「もうこの話はやめよう。面白くない」

同感だった。渡を送り届けて、このあとに俺を待つという説教をうまく避けられるトレンチでも聞いてから別れればよかったと後悔しながら、俺は家路をゆつくりと辿った。

暗い部屋の中、ゴミに囲まれたソファの近くにまたひとつゴミが増えた。投げられたペットボトルは、軽い音を立てながら何度か跳ねたあとにゆつくり転がって、ゴミにつかまって止まる。

「……ええ、続いてのニュースです。タチ助パークを運営している剣崎グループの剣崎徹氏に暴行を受けたとして、都内の交番に女性からの通報がありました。それを受けて警察は本日の午後六時、剣崎容疑者を逮捕しました。この事件で……」

そこにあるのは、テレビから流れてくる感情を殺して発せられる男性の声と、ソファの軋む音だけ。かと思ふと、急にテレビが騒がしくなる。キャスターの少し上擦った声に興味を引かれたのか、彼は目だけをそちらに向けた。

「先ほどお伝えしました剣崎容疑者のニュースについて、被害に遭った女性と剣崎容疑者は知り合いです。それが新たに分かりました。また、自宅捜索の結果、剣崎容疑者の部屋から箱に入った身元不明の遺骨が見つかったということです。警察は調査を急ぐと共に、今回の事件と遺骨との関連があるという可能性も視野に入れて調査するべきであるとして、明日から新たに取り調べを行う方針です」

彼の手からスナック菓子の欠片がひとつ床に落ちた。

「ああ、殺しちゃったのか」

汚れた両手を擦り合わせて、ソファの上に三角座りをする。そして、笑った。

「殺しちゃってるなら下手に動いちゃだめだつて意味だったんだけど、伝わらなかつたみたいだね」

誰かに話しかけるようにそう言つて彼はソファから立ち上がると、黒い粥状の何かが盛られた皿を持ってきて、奥の部屋のその襖の前に置いた。そして興奮したように口角を上げると、ソファに全体重を任せて眠ってしまった。

朝、彼はまだ眠っている。奥の襖の部屋。カーテンの細かい隙間から差し込んだ日の光に照らされてちらちらと光る皿の上には、何も乗っていないかった。



鎮魂曲を君に

イトメ

吾妻遥は額の汗を拭って、息をついた。

部屋は見るも無惨に荒れ果てていたが、当の本人はそれで満足だった。これでもう、邪魔するものは何も無いから。

中央におかれたピアノだけが傷ひとつなく輝いて、彼がもう一度それに触れるのを待っていた。

「よし、続きといこうかな」

遥は再び鍵盤に触れ、深呼吸を繰り返す。

そして目の前の五線譜を見て、思わず吹き出してしまった。「謝罪」をテーマに書き始めたそれは、いつの間にか違う意味を持った曲になっていたのだ。

「こんなの、まるでラブレターじゃないか」

言葉にすれば、一人で恥ずかしくなった。

それは紛れもなく、遥の想いが綴られた手紙だった。

遥は湯田藍人のことが好きなのだ。

ずっと好きだったのだ。

自分とは何もかも正反対で、それでも一緒にいてくれる彼のことを、どうしようもなく愛していた。

自分でも気づかないうちに大きくなってしまったこの感情は、もう止めることはできない。

遥は困ってしまった。こんなものを聞かせたら、藍人は遥を嫌うかもしれないし、返事なんてくれないだろうし、

バカにして笑うかもしれないと思った。

それでも、それならそれでいい。

遥は難しいことを考えるのは苦手だった。開き直ってピアノに向き直り、彼はすべての感情を五線譜にぶつけた。

なにものにも邪魔をされず、ただひたすら想いを綴り続けた。

藍人のことを、ただ強く想い続けていた。

ピアノの音以外聞こえてはいけないうるさいくらいに胸が高鳴っていた。



秋の風が吹く気持ちの良い昼下がり。

空は青くて、薄くかかった雲は白いし、降り注ぐ日差しは暖かい。なんて穏やかな瞬間だろうか。

こんな素敵な日に、私、百目鬼アキラが働くこの探偵事務所は、どんよりした空気で包まれていた。

「私はどうしても、息子の自殺の理由を知りたいんです。警

察は自殺となつたら詳しく調べてくれませんでした。お金はいくらでもお支払いしますから、どうか調べて頂けませんか？」

「奥さんのお気持ちはよくわかりますよ。制服さんは決まった仕事にだけ全力を尽くすのが、得意ですからね。しかし、一度警察が絡んだ事件ですから、我々では十分なお力添えができないかもしれません」

「いいえ、そんなことありません。ここの探偵事務所には、優秀な探偵さんと助手のお嬢さんがいらしていると聞きました。お二人ならきつと、息子が自殺した理由を突き止めてくれるはずですよ」

先程からこんな会話が一時間くらい続いていて、聞いている私もそろそろ嫌気がさしてきていた。

まるでいい所のお嬢様のような綺麗な言葉遣いをするこの女性は、依頼人の吾妻倫子さん。先日大学二年生の一人息子を亡くしたそうだ。

息子の自殺は不可解な点が多く、しかし自殺としか判定できないと警察には言われたらしい。今日は、納得いかないうから何とかして自殺理由を調べられないか、という相談をしに来ていた。

しかし、だ。

吾妻さんが一体何を根拠にここにいる探偵——私の上司である黒瀬ハジメのことを「優秀」だなんて言っているのか、気になって仕方がない。

優秀だつたらこんなに古びた事務所になんか勤めているのだ。言つてしまえば、私たちは売れない探偵。その原因のほとんどは、経営者である黒瀬さんの性格がひねくれていることにある。

それでもここで働くと言つたのは私なので、大きな声で文句は言えない。

しかしながら、今もこうして必死に頼んでいる吾妻さんに対し、やんわり「無理です、お引取りを」と言っているのだから、救いようがないのであった。

「どうかお願いします。こんな、納得いきません。息子がなんの理由もなしに自殺だなんて、だつて、おかしいでしょう？ 自殺するその寸前まで、息子は作曲してましたのよ。自殺する前に作曲だなんて、しかも作りかけですよ、おかしいじゃありませんか」

今日何度目かの涙を拭つて、吾妻さんはか細い息を漏らした。

いつもならこんなやりとりをして帰つてしまうお客さんばかりなのに、吾妻さんは一向に帰る素振りを見せない。

きつと本気で悔しいのだ。息子が死んだ理由を何も知らないのが。

こんなのを見せられたら、私だって力になりたい。

「黒瀬さん、どうして依頼を受けないんですか？ 私たちにだってできることがあるはずです」

「アキラ、君はわかっている。警察が関わった事件は、我々探偵が踏み込める領域が限られている。そこから奥さんの求める答えが手に入るとは到底思えない。報酬に対する正当な働きができる、君は確信して言えるか？」

「それは、わかりません……」

「ならばこの依頼は受けるべきではない」

「でも……！」

それでも力になりたいと、そう言葉にすることはできなかった。黒瀬さんの言っていることは何も間違っていない。確かに、私たちにできることは限られているのだ。

けど、ここで追い返してしまつたら、吾妻さんは一生、自分の大切な息子が死んだ理由を知らないままだ。

「ダメかもしれないけど、でも……」

「黒瀬、俺からも頼むよ」

私の声に被さるよう後ろからそう言ってくれたのは、馴染みのある声。振り返ってみれば、黒瀬さんの親友であ

り刑事の片桐さんが立っていた。

黒瀬さんは片桐さんを見るなり不機嫌そうに眉をひそめて、それでもお客さんの前だから笑顔だけは崩さなかった。

「なんだ、来てたのか片桐」

「おう。吾妻さんにここを紹介したの、俺なんだよ」

「えっ、そうだったんですか！」

どうりで何も知らないはずの吾妻さんが「優秀な探偵さんが」なんて言うわけだ。警察から仕事を紹介されるのもおかしい話だけど、二人が親友同士なので、こういうのは今回が初めてじゃなかった。

となると、黒瀬さんが吾妻さんの依頼を意地でも受けようとしな理由がわかってくる。

「黒瀬さん、まさかとは思いますが」

「なんだ」

「片桐さんからの紹介だつてわかってたから依頼を受けないとか、そんなことないですよね？」

「はっ、まさか」

そのまさかなんだろう。

絶対に表情は崩さないが、私にはわかる。彼は変にプライドが高い男。親友の、しかも警察から仕事を紹介される

のは嫌なのだ。

いつもそうだ。紹介された仕事のほとんどは、冷たい態度をとったり失礼な言い方をしたりしてダメにしてきた。今回もそうするつもりだったはずだ。

今日ばかりは、そうはさせない。

片桐さんに助けを求める視線を送れば、任せると言わんばかりにニヤリと笑った。

「黒瀬、探偵が調べられることに限りはあるが、そういうときのために俺がいるだろ？」

「情報漏洩だ」

「バレなきゃ問題ない」

「仮にも公務員が言うことかい。君は刑事の風上にも置けないな」

黒瀬さんはイライラしたようにこめかみを押え、少しだけ声を荒らげた。たしかに、バレなきゃ問題ないっていうのはちよつとアウトかもしれない。

「頼むよ。解決済みにされた事件を再捜査することは俺達にはできない。できる限りの補助はするから、吾妻さんの依頼を受けてくれないか？」

「私からも、お願いします」

「お願いします探偵さん。どうか、どうか……」

三人に詰め寄られて逃げ場を失った彼は、しばらくの沈黙の後、観念したように目を閉じた。

「……依頼を受けましょう」

◇

翌日、私たちはさつそく捜査をしに、吾妻さんの息子さんが一人暮らしをしていたという部屋に来ていた。

亡くなったのは吾妻遥さん。音大に通う大学二年生の青年。ピアノを弾くことが大好きで、才能もあつたらしく大学内では彼を知らない人のほうが少なかった。

大学に通い始めたときから一人暮らしをしていて、実家と連絡だけはこまめに取っていたそうだが、会う機会は年末以外ほとんどなかったらしい。遺体が発見されたのも、息子と連絡が取れないと相談を受けた大家さんが、警察と一緒に部屋に入ったとき——死後五日が経過した後だった。

「それで、そのとき捕まった青年というのは？」

「遥さんの同級生である湯田藍人さんです。これ、現場にいた警官が書いた報告書の内容を軽くまとめました」

「君にしては気が利くな」

「それ、ひとこと余計ですよ」

皮肉を言わねば気が済まないこの悪徳上司に、私は昨日  
せつせと作った資料を渡した。

——事件発覚当時——

駆けつけた警官が最初に耳にしたのは、ピアノの音色だった。  
た。

それは、風に運ばれてくる死者の香りと混ざり合い、常人には理解しがたいハーモニーを奏でていた。

「調べてくれ」と大家の通報を受け二〇五号室までやってきたが、この部屋の中で何か異常なことが起きているのは、  
入らずとも予想ができる。

鍵は閉まっておらず、インターホンは壊れていた。二足趣味の違う靴が並んだ玄関を抜けると、ピアノの音はさつきよりはつきり聞こえるようになった。

この部屋で誰かがピアノを弾いている。

リビングにつながる扉に手をかけ、ゆっくり開けば、そこには警官たちも言葉を失う光景が広がっていた。

二人の男がいる。

ピアノを弾き続ける男と、その傍らのベッドで眠るもう一人の男。

片方は死んでいた。そして、もう片方は死んだ男の傍でピアノを弾き続けているのだ。

警官が声をかけると、男はピアノを弾くのをやめ、ただ俯く。

『君がやったのか？』

警官の問いかけに対し、男はただ短く返事をした。

『はい』

男は手錠をかけられ、なんの抵抗もなく連行された。

その間、彼は指でトントんと叩き続けるのをやめなかった。

「なんでも、湯田さんは遺体の横で三日間もピアノを弾き続けていたんだとか……」

「フン。変わった趣味だな」

趣味、趣味か。趣味なんて言葉で片づけていいものか。

近隣住民からの聞き込み調査から、湯田さんが三日間遺体の横でピアノを弾いていたことが明らかになっている。

湯田さんと遙さんは、大学の生徒や教授、そして母親である吾妻さんも認める大親友だった。そんな大親友の死体の横で、三日間もピアノを弾くなんて、一体どんな理由があればそんなことができるのか。

私には想像もつかない。

「しかし彼は遙さんを殺していなかった。警察の調べでは、どう見たって自殺らしい。おかしい話じゃないか？」

「ええ、ほんとに……」

そう、ここで問題なのが「吾妻遙は自殺」というのがゆるぎない事実であるということ。心臓を包丁で一突きし、自ら命を絶ったのだ。

事件当時は、同級生への聞き込みから「二人は喧嘩していた」という事実が浮上したため、関係がもつれて殺してしまったのではないかと予想されていた。それに、捕まったとき、湯田さん本人も「自分がやった」と認めたという。それでも、詳しく調べると自殺だった。

一体、湯田さんはなぜ自分がやったなんて嘘をついたのか。そしてなぜ、遙さんは自殺してしまったのか。

「調べてみなければ始まるものも始まらないか。では、気になるものは随時報告してくれ」

「はい」

黒瀬さんから号令がかかり、私も部屋を片っ端から調べ始めた。

一度警察の捜査がはいる、その後事件も解決となつて立ち入り禁止が解かれたあとも、吾妻さんはこの部屋をそのままにしておいたらしい。

なるほど、確かに当時のままと感じた。

家具は倒れ、テレビの画面にはヒビが入っており、ノートパソコンなんて真つ二つに折られてそこら辺に投げ捨てられていた。壁にかけられていたであろう時計も、今は床に落ちて針は動きを止めている。なんとも凄惨な有様だ。

私はその様子をとりあえずカメラにおさめて、辺りをもう一度見渡してみる。

ぐちゃぐちゃだ。落ち着く空間とはお世辞でも言えたものではない。こんな部屋で作曲？ 冗談じゃない。一体遙さんはなにを考えていたんだろう。謎は調べれば調べるほど深まるばかりで、思わずため息が漏れた。

「アキラ、これを見てごらん」

黒瀬さんに声をかけられ顔を上げる。指さすほうに目やれば、そこには立派なグランドピアノがおかれていた。

それは、このまとまりのない空間の中で、たった一つ秩序を保たれたままの存在。その黒塗りに傷一つなく、さつ

きまで誰かが弾いていたかのように、ピアノだけはまだ生きていた。異様な輝きを放って、その白い鍵盤に再び指が触れるのを待っているのだった。

そして、ピアノの上に置かれたままの楽譜。

「これ、吾妻さんが言っていた。作りかけの曲ですね」

「そのようだな」

黒瀬さんは楽譜をじっと見ていたが、しばらくしてからそっと閉じてしまった。

「まるで感情の高ぶりだ」

「え、何がですか」

「この曲だよ。最初の部分なんて見てみる、伝えたいことがぐちゃぐちゃじゃないか」

「そんなこと言われても、私楽譜なんて読めませんし、見たってわかりません」

差し出された楽譜を私も読んでみるが、さっぱりわからない。ただ音符が並んでいるだけで、音が鳴らないことには私の音楽は始まらないのだ。

「やっぱり、わかりません」

「だろうね」

「だろうねって……！ 黒瀬さんって時々失礼ですよね」  
「思ったことを言っただけだ。……名前も、見た目も、声も

同じなのに、君は晶とは感性がまるで違う。性格も真反対。君はバカだし」

「わ、わ、また晶さんですか？ 私は黒瀬さんが求める。あきらまじやないですし、大体、部下に馬鹿だなんて。パワハラです！」

「どうでもいい。訴えてもらってもかまわないよ」

涼しげな顔で受け流され、私の怒りは行き場を失ってしまっ

まった。  
黒瀬さんが言う「晶」というのは、彼の昔の恋人のことだ。

いきなり何を言い出すのだと思うかもしれないが、いつものことなのだ。

彼は昔——というか今も愛している羽田晶という女性に  
対し、未練が凄い。未練というか、これはもう執着心だ。  
プロポーズをしたその次の日、彼女は別に男を作って忽然  
と消えてしまったらしいが、それでもまだ黒瀬さんは彼女  
を愛している。

私はその晶さんに、名前が同じで、顔も声もそっくりらしいが、性格まで似ているわけじゃない。当たり前だ、私は羽田晶ではなく百目鬼アキラなのだから。それなのに、黒瀬さんは私と晶さんを比べては嫌味を言ったり、何かにつけては「晶が、晶は」と晶さんを基準に物事を判断するのだ。

せつかく顔がいいのに未だに結婚ができないのは、これが原因と言っても過言ではない。というよりこれが原因なのである。

彼が今楽譜を読めるのも、音楽に対して関心があるのも、おそらく晶さんの影響なんだろう。

「とにかく、今は晶さんのことはいいですから依頼のための調査ですよ！」

「君に言われなくても私がいちばんよくわかっているよ。この楽譜は気になる、吾妻さんに許可をとって保管しておいてくれ」

「はいっ！ 分かりました」

切り替えが早いのは黒瀬さんのいいところだ。

その後も、私たちは遥さんの部屋を隅々まで調べ、私とはかく写真を撮って資料に残せるようにした。

日も暮れてきたところで捜査は切り上げ、急ぎ足で次の目的地へと向かった。

私たちが向かったのは、都内では有名なT音大だ。

会う約束をしているのはただ一人、吾妻遥さんの親友であつた青年。

吾妻さんから連絡先を教えてもらいアポを取ったところ、彼は私たちに会うのをすんなり承諾してくれた。

待ち合わせ場所の広場には、俯いたままベンチに座る青年が一人。彼が湯田さんだろう。「あの」と声をかけると、彼はゆっくり顔を上げて、儂げに微笑んだ。

「待ってましたよ、探偵さん」  
まるで死人だ。

彼の顔は生気を失っていた。目に輝きがないのだ。希望も何もかも失ったかのように……。

「湯田藍人さんですね。初めまして、黒瀬私立探偵事務所の黒瀬ハジメです」

「遥のお母さんから話は聞いてます。どうぞ、ここに座ってください」

促されるまま向かい側のベンチに座り、私たちは彼に事件のことを聞いていくことにした。

音大ということもあって、あちらこちらから音楽が聞こえてくる。そのせいか、この場所には私たち以外誰もいないというのに、静けさなんてものはなかった。



黒瀬さんはその音楽に耳を傾けながら、湯田さんに問いかける。

「単刀直入にお聞きしますが、あなたは遙さんの自殺の理由を何か知っているんじゃないやありませんか」

湯田さんはすぐには答えなかった。

ただ、悲壮感に満ちた顔で笑って、ぽつりとつぶやく。

「遙は自殺なんてしてませんよ」

「ではなぜ彼は死んだんです？」

「俺が殺したんです」

「あなたは警察でもそう言ったんじゃないやありませんか。ですがね、遙さんは自殺なんですよ」

「ちがう、そうじゃないんだ」

初めて湯田さんは声を荒らげた。

彼の目は一層虚しさであふれて、先ほどよりも影がかか  
る。

「俺が殺したんだ。アイツは死のうとしたわけじゃない。どうして、どうして誰もわかってくれないんだ……」

「わかってほしいなら知っていることを話すべきですよ。なぜ、あなたは遙さんとのことを何も話さないんです」

「探偵さんなら何かわかってくれると思ってた。今日あいつの部屋を見に行ったんですよ？ 何か変だと思いませんか」

でしたか。何か不思議に思うことはありませんでしたか」

彼の言いたいことがわからない。

確かに遙さんの部屋を見には行ったが、ただ散らかってばかりで今のところは何もわからない。

想像するならば、作曲がうまくいかなかったとか、喧嘩してやけになっていたとか。けど、自殺するほど思いつめることだろうか。

「あの、湯田さんは彼の死について何か知っているのは間違いないですよ？ 自殺ではなかったとしても」

「……はい」

「それを私たちに教えてくれませんか？ それとも何か言えない理由でもあるんですか？ 何か、遙さんのために黙っていることが……」

むきになって早口でまくし立てていたら、おなかが鳴ってしまつた。

私はなんて食い意地のはった女なんだろう。

そんな私を湯田さんは小さく笑っていた。それは嘲笑ではなくて、なんだか優しいげで、暖かな笑いだつた。

「わ、笑わないでください」

「すいません。おねえさんが遙に似ていたもので。菓子パンありますよ、よかつたらどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

彼がかばんから取り出したのはアンパンだった。こんなところではかぶりつくのは失礼かもしれないが、今の私に理性などないのだ。

私は無言で袋を開け、パンにかじりついた。

「アキラ、君ってやつは……。すみませんね、湯田さん」

「いいんですよ。その菓子パンも自分で食べるのに買ったんじゃないですから」

「じゃ、なんのために？」

「遥がよくおなかをすかせるもんで、喜ばせようと思っただけでも買っておいたんですよ。今も癖で買ってしまってます」

そして、彼はまた優しく、愛おしそうに笑う。

「おねえさんは、なんだか遥に似ている。食いしん坊で、物事のとらえ方が単純。しかも猪突猛進で感じだし。悪く言

えば――」

「バカ」

これは黒瀬さんが言った。

「そうそう」

「黒瀬さん以外にバカなんて言われたのは初めてですよ」

「気を悪くされたならすいません。でも、遥もそうだったんです」

懐かしそうに細められた目は、遠くの方、何も無い場所を見つめている。

「あいつも単純でバカで、集中力はないし、だけど自分の気持ちをまっすぐに伝えられるのがあいつのいいところだった。ピアノも、あいつには表現力っていう武器があつて……才能があつたんです、あいつには」

「あなたが遥さんと喧嘩したのはなぜなんです」

「オーケストラのコンクールのことで」

「コンクール？」

私が首をかしげると、湯田さんはゆっくり頷いた。

「コンクールのピアノリストに俺が選ばれたんです。けど、それは遥がずっと出たがってたものだった」

「それが理由で喧嘩ですか？」

「まさか。それだけじゃありません。俺があいつを怒らせたんですよ。俺がお前を推薦するから、お前がコンクールに出るって言ってね」

彼の口からもれたため息は、かすかにふるえていた。

「せめて、生きているときに謝りたかった。それなのにあいつは、自分の気持ちだけ……」

そうつぶやいた後、「俺からは何も言えないんです」とだけ言って湯田さんは口を閉ざしてしまった。

これ以上は話せることもないだろう。  
あたりも随分暗くなってしまった。

私と黒瀬さんは顔を見合わせて、その場を後にした。

◇

「まったくわかりませんが、本当に。なんで遙さんは自殺なんてしたんでしょう」

事務所のソファにあおむけになり、天井を見つめる。そんなことをしたって、頭には何にも浮かんでこない。

「黒瀬さんは見当がついてるんですか？」

返事はない。返事の代わりに鼻歌が聞こえる。

「よく鼻歌なんて歌ってられますよねー。こっちは手詰まりだつてのに」

嫌味を込めて言ってみるものの、いつものように「どうでもいい」という言葉が返ってこない。彼はずっと鼻歌を歌っている。

「ちよつと黒瀬さん、その鼻歌やめてくださいよ。なんかうるさいです」

「そうだな、この曲は私たちにはうるさく聞こえるかもしれない」

「はあ？」

またわけのわからないことを言い出す彼に思わず声を上げてしまったが、彼は私に一枚の紙を渡してきた。

「何ですかこれ」

「楽譜だ。遙さんが書きかけにしていた」

「あ、もしかして今の鼻歌——」

「そうだ、この曲だ」

「題名は……ベゴニア？ カタカナにするとなんでもしやれて聞こえますね」

この曲は何のために作られていたのか。

こんなに情熱的で、うるさいくらいに何かを伝えたがっているような曲。

「学校の生徒の話では」

手に持っていた楽譜がパツと取られる。渡したり取ったり忙しい人……。

「遙さんの曲が何を伝えたいのか、湯田さんはすぐに理解できたらしく」

「どういうことですか？」

「例えば、昼食を食べ終えた後の練習で弾いた即興の曲。遙

さんが弾くと、湯田さんはこういった

人差し指を立てて黒瀬さんは言う。

「ざつき食べたA定食マズ過ぎ」

「……何ですかそれ」

「二人はとても親密な関係だったんだな」

「じゃ、じゃあ、この曲も何かメッセージが……」

「それはどうでもいい」

「ええー！ 自分から持ち出しておいて！」

ぴしゃりとはねのけられてしまった。

しかし、黒瀬さんはホワイトボードに写真を並べて何やら書き込んでいる。あれは私が昼間に撮った写真だ。

何かわかったのだろうか。

「この事件の謎が解けたぞ」

「えっいま？」

「考えていたんだ。そしてわかった。少々強引だが、理由はそれ以外に見つからない」

「どういうことですか」

私は立ち上がり、黒瀬さんが書いていたホワイトボードの方へ近づく。

そこには箇条書きで二つのグループに分けられた家具たちが書いてあったのだ。

「何ですかこれ」

「君はバカだな。見てわからないか。うるさいものとうるさくないものだよ」

「はいー？」

メモはこうだ。

『うるさいもの』

- ・時計
- ・インターホン
- ・パソコン
- ・テレビ
- ・スマホ
- ・冷蔵庫

『うるさくないもの』

- ・タンス
- ・椅子、テーブル
- ・ベッド

「これでピンと来たんですか？」

いまだにピンとこない私は、置いてけぼりを食らっている

るが、黒瀬さんの顔は確信を持っていた。

それ以外にはない、と。

「ああ。明日、吾妻さんを連れて湯田さんのところに行こう。

答え合わせをしにね」

◇

放課後の大学ほど自由な空間はないだろう。

サークル活動や部活動、課題に慌てる人、教授と何やら

話し込む人。この音大でも、その光景は変わらなかつた。

そんなにぎやかな景色から切り離された、寂しい部屋で、

湯田さんは一人ピアノを弾いていた。

「この曲……」

「遥さんからの手紙だ」

「えっ？」

黒瀬さんは私が聞き返すのは無視して、湯田さんがピアノを弾いている練習室の扉を開けた。

私たちが部屋に入ると、彼はピアノを弾くのをやめ、閉じる。

「こんにちは探偵さん。今日はどういった御用で」

「遥さんが死んだ理由がわかりましてね」

湯田さんは相変わらず俯いていたが、その言葉を聞いて顔を上げた。

吾妻さんは震える声で黒瀬さんに問いかける。

「本当に分かつたんですわね、息子の自殺の理由が」

「ええ。ですがね奥さん。自殺じゃあないんですよ。ですから遥さんが自殺したと言うのはやめてあげてください」

「ええ……？」

黒瀬さんは昨日の箇条書きのメモを印刷したものを私たちに広げて見せた。

うるさいものと、うるさくないものだ。

「これは先日遥さんの部屋で見た家具を分けたメモです。うるさいもの、うるさくないものと別れています。これらには共通点があります。アキラ、わかるか？」

「ええと」

メモに書かれた家具のことを思い出してみる。

そういえば、パソコンやテレビは壊れていた。冷蔵庫はコンセントが抜かれていたし、スマホもインターホンも壊れていたのだ。

「うるさいものは、全部うるさくないよう壊されていました

ね」

「そうなんだ。うるさいものは破壊なりなんなりして、物理的に静かになっていった。遙さんはなぜそうしたか?」

「……作曲に集中したかったから」

湯田さんの小さな声は、この静かな部屋では十分すぎるくらいはつきり聞こえた。

「その通り。彼は作曲に集中したかったんだ。大事な曲を作っていたんだろうね。冷蔵庫は時々音が鳴るからコンセントを抜いたんだろう。友人から連絡が来る電子端末はすべて破壊した、遙さんと連絡が取れなかったのはこれが原因だね。時計の針を刻む音ですらも彼の邪魔をした。だから彼はすべて壊した」

「それじゃ、息子の部屋があんなにめちゃくちゃになっていたのはヤケになったんでも、藍人くんと喧嘩したからでもないんですわね」

「そういうことです」

ここで、私はようやく、黒瀬さんが昨日言っていた「少々強引だが」の意味を理解した。

確かにそうだ、理由はそれしかないが、あまりにも強引だ。

「黒瀬さん、まさかとは思いますが」

「そのまさかだよ。遙さんはなぜ自分の心臓を刺したりなん

てしたのか」

それは、その理由は。

「心臓の音がうるさかったからさ」

吾妻さんは「そんな馬鹿な」とハンカチで口元を抑えたが、

湯田さんだけは悔しそうにこぶしを握り締めていた。

本当に、そんな馬鹿な、だ。

そんな話があるものか。あつていいものか。

「ではなぜ彼の心臓はうるさい、くらい動いていたのか」

黒瀬さんは、遙さんが作りかけにした曲を鼻歌で歌い始めた。

あの、うるさいくらいに情熱的で、何かを訴えかけるような曲。

「この曲は君へのラブレターなんだね、湯田さん」

湯田さんはピアノの方を見つめていた。

「はい。あれは遥からのラブレターでした。……未完成でしたけどね」

そう言つて笑つたあの顔は、遙さんの話をするときだけ見せる、愛おしそう、優しいあの顔だった。

「曲の題名はベゴニアとなっているが、それより前に書いていた題名は『藍人に捧げる謝罪』となっている。どうやら最初は君に謝ろうとするつもりで曲を作っていたようだね」

「……あいつは、気持ちを曲で表現する癖があるんです」

「喧嘩のことを謝りたかつたんだろう。自分もカッとなつてしまつたから……とか、私には分からないが、とにかく君のことをそれだけ大切に思つていたんだらうね。そして、その想いは友という垣根さえ超えてしまつた」

黒瀬さんの言わんとすることは私も吾妻さんも察したが、湯田さんだけが苦しそうに顔をゆがめていた。

「ベゴニアの花言葉は、愛の告白だ。遙さんは恐らく、君に謝罪の気持ちを伝えようとして曲を作つていたら、別の想いを持つていることに気づいたんだらう。そしてそれは止められなくなるくらい溢れた。君に全てを伝えるため、彼はこの曲を謝罪の手紙からラブレターに変えたんだ。君が遙さんの部屋で、三日間も死体の横でピアノを弾いていたのは、このラブレターを読んでいたからだね」

「探偵さんにはそこまでお見通しなんですわ。……これでわかつたでしょう、遙は俺が殺したも同然なんですよ」

湯田さんが「自分が殺した」と一点張りだつた理由はこれだつたのだ。

自分への想いを綴つた曲を作つてるとき、あまりにも高鳴つた心臓がうるさくて刺してしまい、死んでしまつた遙さん。湯田さんは彼の家を訪ねて、遙さんの死体を見て、

作りかけの曲を見つけたとき、真つ先に彼が死んだ理由を理解したのだから。

だから彼は、胸に刺さつていた包丁をぬいて、ベッドに彼の遺体を寝かせ、未完のまま終わつて「ラブレター」をずつと読んでいたのだ。

こんなにも熱い想いを、返事もできぬ友人から受けとつて。

「あいつはほんとに馬鹿なんですよ。馬鹿で不器用。猪突猛进、考えないでとりあえず実行するタイプ。集中力は無いし」それは馬鹿にしたようなぶつきらぼうな言い方であつたが、私たちには全てが愛情として伝わつた。

「けど、そんなあいつのことを、俺は」

そこまで言つて、彼は言葉を詰まらせた。

それから、今までとは違つた確固たる感情の籠つた目を私たちに向けた。

「遙に会わせてください」

◇

私たちは遙さんの遺体が安置されている霊安室へ足を運んだ。

吾妻さんが付き添いながら彼を促すと、湯田さんはしばらく固まっていたがすぐにその歩みを進めた。

その足は静かに遙さんの元へと向かい、やがてたどり着くと、静かに、寄り添うように見下ろした。

彼は全身が震えていた。

その手は、冷たく、そして固くなった故人の頬をそっと撫で、その目は、愛おしそうに細められている。

湯田藍人という青年は、感觸のない青い唇にそっとキスをした。

「俺もだよ」

彼は言った。

言葉尻が震えていた。

それから堰を切ったように泣き始め、言葉にならない叫びをあげ、ただ、冷たい軀に縋り付いていた。

「藍くん、ごめんね……遙がごめんね……」

吾妻さんは泣き崩れた。

二人のこの声は、もう遙さんには届かない。

だけど、こんなにも虚しい死に方があるだろうか？ 私  
はやるせない気持ちでいっぱいだった。

黒瀬さんはぼつりとつぶやく。

「愛は人を狂わせるなんて、上手いこと言ったものだよ」

どこからか涼しい風が吹いて、彼のくせつ毛ひとつない髪をサラサラと弄ぶ。

私はそんな彼の、諦めたような、それでもまだ何か思いを秘めたような横顔を、ただただ見つめていた。

「性別なんて関係ない時代になったが、二人はお互いが自覚する前から、とんでもない大きさの愛を胸の内ですべてしまっていたんだな」

「それっていけないことですか？」

まるでダメな事だったとしても言うように話すから、私は思わず横から口を挟む。今のはきつと彼の独り言なのに。

けれど、いつもみたいに嫌味は言わないで、黒瀬さんは答えてくれた。

「いいや、何もダメなことじゃないさ。ただ、それが結果的に最悪な事態を招いてしまっただけ」

「運命は、誰にだって平等だ」

あれから数日後、吾妻さんからお礼の手紙が届いた。

その後遙さんの葬儀を済ませたことや、湯田さんのコンサートを見に行くことなどが書かれていた。

湯田さんからも連絡があり、あれから、遙さんの書きかけの「ラブレター」に返事を書いているという話を聞いた。

でも、書いたことがないから書ききれぬか不安だ、と笑っていた。

「曲で手紙なんて、書くのは初めてですから」

その電話から三日後、湯田さんは包丁を胸にさして死んだ。

そのことを教えてくれた片桐さんの話では、彼はピアノの前に座ったまま息絶えていたらしい。

書きかけの鎮魂曲を残して。

「愛は人を狂わせる」

窓際で遠くを見つめていた黒瀬さんは、そう、まるで自分に言い聞かせるみたいに呟いていた。

シャーロット・ホームズの事件譚

渡辺  
結香

僕の友人であるシャーロット・ホームズは、かの有名な探偵シャーロック・ホームズの子孫である。それを町の皆知っていた。彼女は、探偵になるつもりはないようだが、事件に巻き込まれたときや、このように関心を持ったときなんかは、あの名探偵に引けを取らない観察力と推理力をみせる。

初めて僕たちが事件に遭遇したのは、去年の春のことだった。

他の友人に誘われたので、映画館へ行くためにバス停へ向かっていると、前方から歩いてきた男が突然前のめりに倒れた。

この後のことはあまり覚えていない。何しろ僕は初めて死体を見たのだから。

ゆつくりと地面に広がっていく血だまり。

混乱。混乱。吐き気。

思わず建物の壁にもたれかかり目を閉じる。警察や救急車を呼び、死体の周辺を観察したり少し遠くへ移動したりするシャーロットの気配を感じた。

到着し事情を聴取しようとした警察官に対し、彼女は犯人の特徴を正しく語ってみせたのだ。

以後、殺人事件だけではなく、学校で起きたある怪事件

など様々な事件を解決してきた。

友人として、また相棒として事件に関わる日々は僕にとつて、大変なことも多いけれど、刺激的だった。彼女と出会うなければ経験出来なかつただろう。

これは僕たちが関わつてきた事件の一つの話だ。

ある日の夜、僕の友人であるシャーロットから連絡が来た。

内容はこうだ。

やあ、ジョニー！ 調子はどう？

君は、昨日の夜の深夜、スミスさんの屋敷の前に救急車が来たのを知っているかな。つい三日前には異臭騒ぎもあつたし、ゴシップ好きの近所のご婦人方は、今日一日彼の噂で持ちきりだよ、一体何があつたのかつてね！ さつきスミスさんから家に電話がきて、聞いてほしいことがあると言われたんだ。おそらくここ最近の出来事と関連している話に違いない。

そのことで君に質問があるんだ。明日は学校も休みだし、話を聞きに行く予定なのだけど、一緒に来ない？ 君を友人として、そして相棒として信頼しているし、スミスさん

にも了承を得ているんだ。もし、良ければだけだね。

じゃあね。

シャーロット

僕は行くという旨をすぐに伝えた。

翌朝の八時、僕がシャーロットのお母さんに迎えられ家の中に入ると、彼女が二階から走って降りてきた。

「やあ、シャーロット」

「ジョニー！ よく来てくれたね。そういえば、お父さんが海外出張から帰ってきているのでしょうか。相変わらずおじさんは日曜大工が好きなんだね。君の部屋の机を改造してくれるみたいじゃないか。楽しみだね。それに、不器用な君が珍しく手伝っているようだし」

「え、どうして知っているんだい？ 確かに昨日父さんが帰ってきたし、机の上に物をより置けるようにしてくれているし、僕も来る前に少し手伝ったよ」

シャーロットはいたずらが成功した子どものような笑顔をみせる。

「ふふふ、スミスさんの家に向かいながら話そうか」

これから自分に助けを求めてきた人の元へ行くとは想像できない程楽しそうに家を出る。僕もしぶしぶシャーロットの後に続いた。

「さっきの話の続きをしてよ」

「ああ、あれは至極簡単な話だよ。まず服のよれが目立つ。次に、肩や裾に僅かだが煤や埃、木くずもついている。君の家は丁寧に掃除がされていることは知っているからね、おのずと汚れていそうな場所は限られてくる。さらに腕の裏、スカイブルーのペンキ。ペンキが置いてあるのは、おじさんがノコギリなどの道具をしまうための倉庫。そして、前に君はおじさんに机の改良を頼んでみるかと話していたこと」

「なるほどね。話を聞くと、なんて単純なことなんだと感じるのだけだね」

「私はいつでも観察しているの、推理の根拠となる証拠を見落とさないようにね。お父さんやおじいちゃんから小さい頃からよく聞かされてきたことだよ。さて、スミスさんの屋敷が見えてきたね」

アルバート・スミス氏は、若くしてIT関連のベンチャー

企業を立ち上げ、成功した事業家だ。彼の邸宅は、町の中でも最も大きな建物の一つだった。

門の前に若い女性が立っていた。彼女を注意深く観察してみる。美しいブロンドの髪、小麦色の肌、エメラルドグリーン色の瞳に、背丈はおよそ五フィート七インチ。カジュアルな服にエプロンをつけているので、家政婦だと思った。どこことなく僕たちを見る視線が厳しいと感じる。

「ようこそ、ホームズさん。そちらはご友人のウィルソンさんですね。私はスミス様に使えております、家政婦のエマと申します」

僕たちは屋敷の一階の左手奥にある客間に案内される。そこには一人の男性が二人掛けのソファに座り、すぐ横の暖炉の火を見つめていた。

「ご主人様。ホームズ様とウィルソン様です」

男はエマさんに声をかけられても気づかず、物思いにふけていた。エマさんは彼の側に行くと、手を膝の上におき、頬にキスをするのではと思う程に顔を近づける。

「ご主人様、また奥様のことをお考えになつて居るので何か？」

僕は、その艶かしい声に、何だかどぎまぎしてしまった。思わず横を向くと、隣でシャーロットが険しい表情で彼ら

を見つめていた。

僕たちが部屋に入ってきたことに気づいた彼は、慌てて立ち上がる。その眉目秀麗な顔には怯えや悲しみといった感情があらわれていた。

「すまない。少々まいつていて。本来ならこのような事に巻き込むわけにはいかないのだろうが、とある恐ろしい事件が起こつてね。私には全く手に負えない！ どうか、あなた方に助けてほしい」

「もちろんです、スミスさん。どうか落ち着いて。まずは何が起こつたのかお話ししていただけますか？」

「ああ、そうだ。気が動転してしまいました。さあ、二人も座つて。込み入つた話になるだろうからエマは下がつていくれ」

エマさんは一礼すると部屋から出ていった。そして僕たちはソファに座り、彼と向かい合う。

「この家に私の妻、生まれて一年も経たない息子、住み込みで雇つて居る執事のオリバー、家政婦のエマと住んでいる。妻は、ニュースなどで知っているかもしれないが、社長令嬢でね。しかし、根は真面目で勤勉なんだ。自分の地位に驕ることなく、仕事に熱心に取り組んでいることを私は知っているし、愛している。そんな彼女がおかしくなり始めた

のは、一年くらい前だった。妊娠中でお腹が大きくなってね。もうすぐ私たちの子どもに会えると楽しみにしていたのを覚えてるよ」

「おかしいとは、例えばどのようなところが？」

「例えばよくイライラしていたり、突然泣きだしたりするようになったんだ。他にも、これは最近知ったことなんだが、ちようどその頃から雇い始めたエマに手を出したこともあるらしい」

「なるほど」

「妻の様子は出産後も変わらなかった。むしろ悪化したと思う。私が帰宅すると騒ぎ声が聞こえるので見に行くと、妻が息子を抱えながらエマに向かってヒステリックに叫んでいたことがあった。かわいそうに、息子が怖がって泣いているものだから止めに入った。そういうえば、仕事でのミスも増えたな。もともと彼女はミスなんて滅多にしない人だったから、どうしたのだろうと思ったよ。私は出産や慣れない育児で疲れているのかもしれないと考えていた」

スミスさんは、小さな笑みを浮かべたり悲しそうな顔をしたりとくるくる表情を変えながら話し続ける。

「あの悍しい事件が起こる七日前だったかな。エマから、彼女に手を上げられたと伝えられた。このときに何度か妻か

ら暴力を振るわれていると知ったんだ。私は信じられない気持ちだったが、ここ最近の様子を考えると分からなくなつた。聞いてみると、金切り声でやっていないと叫ぶものだから、この日は彼女を信じることにし、宥めて終わつたんだ。私も、愛する妻が暴力を振るつたと考えたくない気持ちが強かつた」

「そして、一昨日の深夜に事は起きた、と」

「ああ、そうだ。あの日、妻ともっと話していたら、息子はあんな目に合わなかつたかもしれない」

彼は俯き頭を両手で抱え、悔しそうに呟いた。

「何があつたのですか？」

シャーロットは続きを促す。

スミスさんは少し顔を上げた。僕には彼の目しか見えなかつたが、その目や眉間に刻まれたしわから彼の苦悶を感じ取つた。

「私は自分の仕事部屋で、遅くまで作業をしていたんだ。突然、エマの悲鳴が聞こえた。声が聞こえたのは息子の部屋からだつた。嫌な予感がして、急いで向かつた。部屋に入つた瞬間、目の前に広がるあの惨劇と言つたら。ああ、何という悪夢！ 私は見てしまったのだ、息子の首元に噛みつく彼女を。口の周りには、べつとりと息子の血がついてい

た。あれはまさに吸血鬼のようだった。そして彼女は、顔を上げ私の方を見た瞬間、走り出し自室へ閉じこもったまま、今も出て来ない状況だ」

話し終えると、スミスは長い悲しみのため息をついた。

僕は衝撃のあまり言葉が出なかった。まさか、ホラー作品のような出来事が現実には起き得るのか。女性が赤子の首にがぶりと噛みつくのを想像し、背筋が寒くなる。

沈黙を破ったのはシャーロットだった。

「日頃から奥様とエマさんの仲は悪いのですか？」と質問する。

「そうだな。私には仲が良いとは言えないが、陰悪の仲だとも感じなかった。雇い主と家政婦として会話していたと思っていたが。そういうえば、雇い始めてすぐの頃に一度、妻からエマを解雇しないかと言われたことがあったな。しかし、確か私が必要はないと却下したのだったかな」

「エマさんはどんな方？」

「彼女は働き者で良い家政婦ですよ。言ったことはきちんとかなしてくれる。貧しい家庭で育ち、お金を稼ぐために家政婦として働いていると聞いた」

「ふむ。ところで今、息子さんはどちらに？」

「息子は、病院に。オリバーさんに付き添いでついて行って」

もらっている。オリバーさんは長い間妻に仕えている方で、もうかなりのご老体だが私も信頼している人だ」

「オリバーさんはこの出来事はご存知で？」

「いいえ、彼はあのときに部屋にいなかったので詳しくは知らない。彼には、これは事故よる怪我だと伝えている」

スミスさんはテーブル越しに手を伸ばし、続けるようにシャーロットの肩を掴む。

「私は今回の出来事が周りに広まることを恐れている。吸血鬼なんて絵空事だと思っていたし、かつてはそのような嗜好を持っていたと言われている貴族も存在していたが、まさか現代で、しかも自分の妻に吸血嗜好があるとは思っていなかった。これが世間に知られたらどうなる。私の会社だけではなく、お義父様の会社もマイナスの印象を持たれてしまう可能性がある。それに一番私が心配なのは、私の可愛い息子だ。一昨日の夜は、エマが見つ付けてくれたおかげで助かったが、次も襲われたら、助からないかもしれない！ それを私は恐れているんだ」

「私に任せてください、スミスさん。ですが、まだ根拠となるピースが少し足りません。この屋敷を見て回ってもよろしいですか？」

「もちろん。案内するよ」

一度外に出るとシャーロットは、回収のため道路に置かれていたゴミ箱の方へ歩いていく。ズボンのポケットからゴム手袋を取り出すと、物色し始めた。

「何をしているんだい？ 汚いよ」

スミスさんは驚いて言った。

「ゴミを回収する日は、犯行に使ったものを捨てるのには都合の良い機会です。何かしら根拠となるものが得られるはず」

僕もゴム手袋を手渡されたので、本当はやりたくないが、ゴミ箱の中から一つビニール袋を取り出す。

その瞬間、嫌な臭いが鼻を刺した。

「うええ、何だ、この臭いは。うわあ！」

袋の中には腐敗したネズミの死体が何匹か入っていたのだ。僕は気分が悪くなってきた。

「何てことだ」

スミスさんは驚きのあまり絶句している。シャーロットは、険しい顔をしながらネズミの死体を観察する。

「六日前にこの屋敷で異臭騒ぎがありましたね」

「ああ、おそらくこれが原因なのだろうな」

スミスさんは頷いて言った。

「はい。あと、これ以上この臭いを嗅ぐのは危険です。ジョニー、君は向こうの庭のベンチで休んだ方が良いでしょう。新鮮な空気を吸うんだ。スミスさんには、あそこで例の騒ぎについて少し伺いたいのですが」

「分かった。坊や、歩けるか？」

スミスさんに支えてもらいながら、移動する。庭にはたくさんさんの植物が生えてあり、シャーロットはそれをじっと見つめた。ベンチはちょうど木陰になっていて澄んだ空気が心地良かった。

「大丈夫かい？」とスミスさんは尋ねた。

「少し楽になりました。たくさんさんの草花が素敵ですね」

「良かった。オリバーさんとエマが庭の手入れをされていてね。こちら辺はエマがしていたはずだ。ええと、六日前のことだな。朝の七時くらいに隣の家から電話が来たんだ、私の家から悪臭がすると。普段はほとんど使っていない別棟で臭いがあることに気づいて、エマに業者を呼ぶなりして臭いをどうにかするように言ったんだ。私は朝から仕事だったので、その後は分からないな。帰宅したら、もう臭いはしなくなっていた」

「うむ。ここでこう繋がるのか。その別棟に、いや、奥さん

のことが心配だな」

シャーロットが呟く。

「どういう意味だい？ 妻のことで何か分かっていることがあったら、何でもいいから教えてほしい。私はもう気が狂ってしまいそうだ」

「もちろん、私はあなたに真実を伝えるつもりです。ですが、急いで仕事を仕損じるといふでしょう。どうか私なりの方法で調査することを許してください。最後のピースは奥さんが持っているかと確信しています。彼女は健気にもある秘密を隠している」

「彼女が……。分かった。ホームズさん、君を信じているよ」

奥さんの部屋は玄関ホール階段を上がり、右に曲がってすぐの所にあつた。ドアの前に来ると、スミスさんはドアを強くノックする。

「ああ、我が愛する人！ どうか話をしてくれないか。ここにあのシャーロック・ホームズの子孫である、シャーロット・ホームズさんと、その友人であり相棒でもあるジョン・ウィルソンくんが来ているんだ。この子たちがいかに優秀なのかはよく聞いているだろう」

すると、部屋の中から女性のかすれた声が聞こえた。耳をすまして、やっと聞こえる程に小さな声だった。

「シャーロットさんとウィルソンさんなら良いわ。あなたとは話したくない。あなたが絶対に入つて来ないと約束するのなら、私はドアの鍵を開けるわ」

「ああ、約束する。絶対に」

鍵の開く音がする。

「私の妻を頼むよ」とだけ、スミスさんは僕たちを見つめながら言い、一歩壁側に避け、前を譲つた。

中に入ると、女性が窓側でアンティークな革張りの肘掛け椅子に座っていた。ブラウンの巻き毛は乱れている。顔色が青白いので、泣いて目元が赤くなっているのがよく分かった。

こちらを睨んでいたが、自分の夫ではないと分かり、視線を外に向けた。

「こんにちは、スミス夫人」

シャーロットが話しかける。

「私は、あなたが何を隠しているのか、何に怯えているのか分かっています」

スミス夫人の肩が僅かに揺れた。

「私のことは良いの。私の可愛い息子は？」

「今は病院にいと伺いました。オリバーさんと一緒にいる  
そうです」

僕が答えた。

「そう、オリバーと。なら、良かった」

彼女は安堵したのか、姿勢を崩し、椅子にもたれ掛かった。

シャーロットが再度話しかける。

「あなた方家族の平穏な日々を取り戻すため、私たちはスミスさんに呼ばれました。彼はあなたを信じたいとおっしゃっています」

「嘘だわ！」

夫人は僕たちに視線を戻し、興奮した様子で立ち上がる。

「あの人は私を信じてくれなかった！ あの晩、私を見る彼の眼を、私は覚えてるわ！ ああ、私はどうしたら良いの。もう終わりよ。全てを知っているなら、分かるでしょう。あの子の次は私の番なのよ。誰が私を守ってくれるのかしら！」

「私たちがあなたを守ります」

「どうやって！」

「スミスさんに真実を知らせるのです。そのために、あなたの協力が必要不可です」

「協力？」

「はい。少々危険な目にあうかもしれませんが、私たちがあなたの命を守ると保証しましょう」

「何をすればいいのかしら」

「窓の外を見てください。この二階の窓まで伸びている木がありますよね。私たちがあの木に登り合図をするので、部屋の中に入れてください」

「その後は？」

「あなたの旦那さん以外の人で最初に来た人を、部屋の中に入れてください」

「分かったわ」

「それでは、またすぐにお会いしましょう」

シャーロットはそう言うと、僕の手を引いて部屋を出る。スミスさんは廊下を歩き回っていたが、僕たちに気づくと、部屋の前に戻ってきた。

「ホームズさん、彼女の様子は？」

「彼女はとても強かな方です。独りになっても、自分の子どもを案じていました」

「しかし、息子を襲ったのも彼女だ」

「じきに真実をお教えしましょう。私たちは、ひとまず準備をしなければなりません。一度帰らせていただきます」

「ああ。しかし、本当にこの事件を解決してくれるのだろうか」

ね」

「ええ、もちろんです。この事件が片付く目処は立っていませんよ」

僕たちは一度家に帰る振りをして、邸宅の広い庭の中に隠れる。

「僕は何をすれば良いんだい？」

「君には、スミス夫人を襲おうとする人物を、私が合図を出したときに止めてほしいんだ」

「ラジャー」

作戦会議が終わり「そろそろ行こうか」と、シャーロットが言う。

一気に緊張感が増した。何が起こるか予測出来ない不安と、一つの家族を守るという責任感が、僕の上に重くのし掛かってきたのだ。僕は努めて冷静であろうとした。

僕たちは、夫人の部屋の真下に移動した。最初にシャーロットが木に登る。無事に部屋に入ったのを確認し、僕も続いた。

僕が窓から入ってくるのを見てから、シャーロットは「夫人は普段通りには過ごしてもらいます。私たちはいないも

のだと思ってください」と話す。

「分かったわ」

夫人は首を縦に振り、言った。

「じゃあ、私たちはベッドの下に隠れていようか」

「オーケー」

僕たちはベッドの下に隠れる。夫人がベッドへ上がる音が聞こえた。僕はいつでも出られるように、ベッドの脚の方で息を潜める。部屋は静寂に包まれた。時折布が擦れる音と、ベッドが軋む音がするだけだ。

どれくらい時間が経ったのだろうか。僕にはひどく長い時間のように思われた。神経が張り詰めていく。横にいるシャーロットや自分の息遣いが大きく聞こえる。

誰かの足音が聞こえた。部屋の前で止まると、ドアをノックする。

「誰？」

夫人は尋ねる。

「奥様、エマです」

「エマ？」

「はい、私はあなたが心配で来たのです。もう三日はお部屋から出ておりません。食事をきちんと摂られているか気になります」

「本当かしら。あなたが私を心配するなんて」

「本当です。奥様、軽く食べられるものをご用意しました。

開けてください」

「今開けるわ。ちょっと待っていなさい」

部屋の中に緊張が走る。夫人がベッドから降り、ドアへ移動した。僕たちはベッドの下から体を半分出した。

夫人がドアを開けた瞬間、エマさんが彼女に飛びかかる。

その手にはナイフがあった。夫人が転倒する。エマさんが馬乗りになり、ナイフを振り上げた。僕は横から押し倒す。彼女の手からこぼれ落ちたナイフを、シャーロットがすかさず拾う。

「エマさん、あなたはこの強く気高い女性には敵わない。諦めるべきです」

彼女は一切抵抗しなかった。

「何の騒ぎだ！ 一体何が起きたんだ？」

スミスさんは走って来ると、部屋の状況を見て驚いた。

「エマさんこそが、息子さんを毒牙にかけようとし、そして今まさに夫人にも危害を加えようとした犯人です」

「何だって！」

「まず、妊娠してから奥様の態度が変化したことから話しましょう。苛ついていることが増える。涙もろくなる。ミスが増える。これらは、うつ病の症状です。妊娠中または出産後、大きく変化する体や生活、母親としての責任感からくるプレッシャーによりうつ病になることがあります」

「そうだったのか。すまない、君の苦しみに気づいてやれなくて」

スミスさんは夫人の側に行き、肩を抱いた。

「次に、三日前あなたが見たことの真相です。事実、奥様は吸血鬼などではありません。しかしあなたは、奥様が息子さんの血を吸っているのを見た」

「はい」

シャーロットは、スミスさんの目の前に先程のナイフを出す。

「よく見てみてください。先端に血液と何か液体が付着していますよね。これは、毒物です」

スミスさんは息を飲む。シャーロットは続きを話し始めた。

「庭に生えていた植物の中に毒をもつ植物がありました。そして異臭騒ぎとあのネズミの死体は、毒の効果を調べるための実験をしたためと思われる。人は毒を盛られたら解

毒しない限り死んでしまいますよね。あの日、毒が塗られたナイフで刺された息子さんの応急処置として毒を吸い出していったのです」

「疑って本当にすまなかった。そしてあの子の命を守ってくれて、ありがとう」

スミスさんは夫人を強く抱きしめた。シャーロットの方に向きなおす。

「なぜエマはこのような犯行に？」

「嫉妬ですよ、ご主人様」

シャーロットが話し出す前にエマさんが遮った。

「私はこの家であなたと過ごすうちに心を奪われました。しかし、あなたは奥様を愛していた。それに当時奥様は妊娠中で、大きくなったお腹を、慈しむように触れるあなたを見た私の気持ちと言ったら！ ああ、憎い！ 私はあなたがこんなにも好きなのに！」

エマさんは感情のままに叫ぶと、むせび泣き始めた。

「ああ、なんてことだ」

「これが事の真相です。では、そろそろ私たちは退出させていただきます」

僕たちは、部屋から出て、スミスさんの邸宅を後にする。空は綺麗なオレンジ色になっていた。

「日が暮れそうだね。そうだ、今日の夜、私の家で夕食を食べていかない？ お母さんが簡単なピザを作ろうと言っていたんだ」

「じゃあ、食べていこうかな」

「うん。早く帰ろうか。お腹すいちゃった」

僕たちはシャーロットの家へ帰り道を急いだ。

一  
二  
乘探偵

遠山  
晴人

「……わかりました。ではその時間に」

顔も知らぬ依頼人との通話を切り、携帯電話を胸元にしまい込む。

見上げた空から照り付けてくる太陽は未だその熱気を保ったままだ。もう夏は過ぎたものだと思っていたが、置き土産の残暑はまだしぶとく居座り続けているらしい。

ともかく人と会う予定がある手前汗をかくのは好ましくない。指定の時刻までの時間潰しがてら、どこか涼める場所でも……などと思案した折、ふと浮かんだ案のままに足を動かす。

「だあああッ！　なんでそのタイミングで立つんだよ！　経済動物の分際で人間様の資産紙屑に変えてんじゃねえぞこの馬畜生がああッ！」

「……うるっせえな。真昼間から何やってんだあの野郎」

数分歩いた後に辿り着いたのは古びたアパート。その一室から飛ぶ怒号を確認しつつ、俺はここご時世に施錠もさされていないドアノブを捻った。

探偵事務所。その表札が掲げられた文字通りのハリボテは今日も空虚に映る。

「鳥羽」

蓋を開ければそこにあるのは直視に耐えない凄惨な現実。

罵声が響く部屋にプラ容器やビニール袋が散乱する様は仮にも人を迎え入れる場所とは考え難い。

着々とゴミ屋敷への道を辿るその光景に顔を曇めつつ、部屋の中央でラジオを怒鳴りつける小柄な男へと声を向けた。

「お、大木か。丁度良かった。金貸してくれ」

「……来て早々に直帰を促す才能は相変わらずだな」

「才能……いい響きだ。悪い気分じゃないな。だがおだてても何も出ないぞ」

「褒めてねえよ死ね」

「相変わらず直情的だ。ちったあ洒落つてもんを楽しむ余裕を持つとっぜ」

「お前こそその墮落した生活をどうにかしろ」

辛うじて確保された足場を進み、鳥羽と呼んだ男の眼前に位置する業務机に腰を下ろす。真隣に放られたラジオの発する競馬実況が喧しかった。

「で、何の用だ？　見たところ俺の危機を察知して金を貸しに来てくれた訳じゃなさそうだが」

「別に大した用じゃない。この近くで依頼人と会う予定だったんだが、ついさつき向こうから時間を変更して欲しいとの連絡が来てな。それで時間潰しがてらお前のアホ面でも拝みに来た訳だよ」

「はっ、探偵学校首席のみならず個人事務所も波に乗ってるエリート様はお忙しそうですね」

「お前の方は……聞くまでもないか」

鳥羽裕貴。探偵学校時代の同期であり、今は俺と同じく個人事務所を構える私立探偵。

一応はスーツを着ているものの清潔感はずいぶんなく、本人の尊大っぷりも相まって印象は最悪だ。当然こんな奴に依頼を出す物好きはそういない。

よって、この探偵事務所は常にこんな有様である訳で。最早ここを探偵事務所と呼ぶことが全ての探偵職に対する冒涇のようにも思えてくる。

「依頼人ってことは仕事の話だよな。今回はどんなのだ」

「詳しくは会って伝えるとかいう話だったが、現状聞いた分には人探しだと考えてる」

「人探し……はは、矮小な仕事だな」

「働いてもない奴が偉そうだなダメエ」

「俺に見合う依頼が来ないだけだ。浮気調査だの慰謝料の請求だの……んな地味な仕事この俺がやる訳ないだろ」

「……回してやった依頼が尽く返ってきやがるのはそういうことか」

「やる気が湧かねえっつーか、俺に相応しくない。適材適所っ

て言うだろ。優れた者にはそれ相応の依頼が回ってくるべきた。調査依頼なんざ基礎中の基礎じゃねえか」

「基本だからこそだろ。そういう地味な仕事を積み重ねてこそ実績が——」

「なんかその地道にコツコツつてのが性に合わなくてな。俺は一発ドカンとデカいのを打ち上げて名も上げたいんだよ」

「ああもうホント死ぬよお前。てか殺させろ」

日に日に悪化してゆくコイツの傲慢さには頭が痛くなる。

早いもので鳥羽と探偵学校で出会ってからも数年。コイツも少しは成長したと思っていたものだが、結局何も変わっていない。もう本当心底呆れる。

「……なあ、鳥羽。お前俺の事務所まで働く気はないか？」

「殺害予告の次は勧誘とか情緒不安定過ぎるだろ。ツンデレのヒロインでももうちょっと主張安定してるぞ」

「お前の能力だけは買ってるんだよ。確かにお前自身はホントにもうどうしようもないゴミだが、その能力をこんな掃き溜めに捨て置くのは惜しい」

「……今ざりげなくデイスつたら」

「真正面から貶してるわ。……で、どうだ？ 勤務内容にもよるが給料も払うし、悪くはない条件だろ」

「ふむ……そうだな。確かに、現状無職同然の俺に対する待

遇としては破格と言える」

情け混じりの俺の提案に、鳥羽は考え込むように喉を鳴らし――。

「だが断るツ！ この鳥羽裕貴の最も好きなことの一つはなあ、自分が優位だと思ってる奴にNOと断ってやるこ――  
―― ああ嘘ゴメンゴメン調子乗ったのは謝るからその握った酒瓶下ろしてくれ。な？」

本当に何で生きてるのだろうかコイツ。法さえ許せば殺してるのに。

「ま、誘いは有り難いが断る。人の下で働くとかは死んでも嫌だからな」

「言える立場じゃないだろお前……」

こめかみを抑えて溜息をつく。何をどうしたらコイツみたいなのが誕生するのか不思議でならなかった。

「無駄足だったな。これ以上は体調に支障をきたし兼ねないから帰る。邪魔したな」

「おお、待て待て。どうせこの後仕事なんだろ？ 俺も行く」

「は？」

「競馬も終わって暇なんぞな。お前の言う地道な仕事の積み重ねつてのがどんなもんなのか見定めてやるよ」

などと陳腐なヴィランのような台詞を並べて鳥羽がよう

やくその腰を上げる。

「それに仕事の内容によってはさっきのお前の提案、飲んでやらんこともない」

「……」

予想外の言葉に一瞬自問する。

正直コイツを面会の場合に連れていくことには百害あって一利なしだ。鳥羽は洞察力や勘と言った感覚的な面では他にない程の鋭さを有しているが、それ以外の能力、取り分け探偵に求められるスキルは殆どないと言っても過言ではない。

加えてこの人としては完全に終わっている性格だ。会話に割り込んで話を阻害してくる未来は容易に想像できるが……。

「…邪魔だけはすんじゃねえぞ」

「あたぼうよ」

腐れ縁としての老婆心が勝り、不安を孕みつつも承諾してしまふ。

一応、無駄とわかりつつも注意喚起だけ飛ばし、問題児を連れて事務所を後にするのだった。

「あ、姉ちゃんこれと同じのもう二つ頼む」

「……やっぱ連れて来るんじゃないかった」

BGMとして流れるオルゴールの音に混じり、モダンな空気を醸す店内喫茶店には不似合いな咀嚼音が充満する。昼食時ではあるがこの喧しきは群を抜いていた。

クライアントから待ち合わせ場所として指定された喫茶店……なのだが、隣で食欲のままに食い散らかしているアホを見ているとここに来た目的を忘れそうになる。

「しっかし遅いなその依頼人。予定ずらしておいて遅刻するとかどんな神経してやがる。寝坊か？」

「お前にだけは言われたくないだろうな」

だが鳥羽にしては珍しく正しい指摘なのも事実。予定では午後12時にここで落ち合うとの話だったが、時刻は既に半時を過ぎそうとしている。こちらも仕事である手前大声では言えないが遅刻するにしても少々非常識だろう。

「……大木さん、で宜しいでしょうか？」

だが噂をすればなんとやら、思案する脳内に入り込んでくる声。

振り返った先で見たものは俺達よりも少し年上と思われる男性の顔だった。鳥羽とは対照的に確とスーツを着こな

す姿は様になっているの一言だろう。

「……ええ、大木探偵事務所の大木弘人です」

「そうですか……遅れてしまい申し訳ない。私は柳と申しませう」

名刺の交換と共に簡単な挨拶を交わすと、柳と名乗った男は続けて言った。

「個室の方を予約してあります。詳しい話の方は、こちらで」  
言葉尻で店員の一人が顔を覗かせ、説明の通り俺達を店の奥の個室部屋へと案内する。

メインホールをそのまま個室のサイズにまで縮小したといった雰囲気、部屋の中央にはあちらよりも質感の高い卓子が設置されていた。

「改めて約束の時間に遅れてしまい申し訳ございません。少し仕事の方が長引いてしまっています」

促されるままに備わった座席へ腰かけ、差し出された紅茶を口に含む。店員が閉じられた戸の向こうへと姿を消したタイミングで柳さんは口火を切った。

「お気になさらず。それでご依頼との話で伺いましたが、今回は如何なされましたか」

「……ええ。実は——」

「ああ思い出したッ！ お前、アナウンサーの柳隆司か！」

多少の疑念も孕みつついざ本題へ移ろうとしたその時、何か考え込むように黙っていた鳥羽から喧しい声が飛ぶ。

早速懸念していた事態を引き起こしたバカは額を抑える俺などに気に掛ける様子もなく、まるで親の仇とでも対峙したかのように柳さんへと食って掛かる。

個室だったのは幸いだが、そんなことを言っている場合ではない。早急に鳥羽の首ねっこを掴んでは柳さんから引き剥がす。

「おいしい……！ テメエ邪魔すんなつたるが」

「これが落ち着いてられるかってんだ！ 柳隆司だぞ？ あ

おみるの旦那だぞ!？」

「あおみる……?」

「テメエ柏碧海知らねえのかこの非国民が！ 元とは言え国民的アイドルだぞ?！」

「非国民はお前だこの社会不適合者。……で、そのアイドルがどうした」

「コイツとの結婚を機に引退したんだよ！ 俺に潤いを与えてくれるオアシスだったのに……テメエ俺達のおおみるを返しやがれ!」

鳥羽を連れて来るという過ちを犯した数時間前の自分と巡り合わせの悪さを心底呪う。コイツにアイドル趣味があ

るとは知らなんだが、よりによって依頼人が推しの旦那とは想像できない。

「あのー……、大木さん。こちらの方は……?」

「……一応、私と同じ探偵の鳥羽です。私個人の判断で助っ人として連れてきました。……お気に障られたのでしたら今すぐ追い出しますが」

「いえ……お力添えは多いことに越したことはないのでは……」

完全に想定外な事態に更なる頭痛を覚えつつ、一先ずは話を伺うことにする。

出来れば摘まみ出したかったのが本音だがクライアントにその意図がない以上強行はできない。鳥羽も食い下がないだろうし余計なことで時間を食う訳にもいかないと考えれば猶更だった。

「……妻のことを知っているなら話は早いかもしれませぬ。鳥羽さんが仰られた通り、碧海は私の妻です」

「ああマウントか!？」

「うるせえ。……それで、依頼と言うのは奥様絡み、ということではないんですか?」

「……はい。実は、数日前から妻の行方がわからなくて……」  
「はぁッ!？」

今日一の大声と共に卓子を叩いた鳥羽が腰を上げる。拍子に卓上のカップが転倒し、まるで天罰を下すように奴の下腹部へとその中身をぶちまけた。

「どあっちッ!？」

「ああもう喧しいな。トイレットペーパーか何かで拭いてく  
りゃいいだろ」

「競馬とツイてねえな今日……」

「こつちの台詞だ」

ぶつくさと文句を垂れながら鳥羽が室内から消える。意図せず厄介者がいなくなった隙にと、床に零れた分を手持ちのティッシュで拭きとりつつ柳さんに問う。

「行方がわからない……とは、単純に連絡が取れないという  
解釈でいいですか？」

「ええ……数日前に家を出たきり帰ってこなくて、電話や  
メールも繋がらず……」

「奥様方のご家族やご友人には連絡しましたか？」

「勿論です。……ですが、碧海は顔を出してないと……」

「……」

羅列された情報に眉を寄せる。

人探し、と言う大方の予想は当たっていたが、その内容は予想の範疇を遥かに超えていた。

「依頼を受ける立場としてこんなことを言うのはどうかとは思いますが……正直、我々探偵が請け負うには事件性が高すぎます。警察の方に連絡なさっては……」

「それが、そもいかなくてですね……」

「……と、言いますと？」

「……私としても立場がありますし、それに先程鳥羽さんが仰られたように妻は元々人気のあるアイドルでした。なのでその、少し過激なファンの方もいらつしゃるといいますか、もし大事になるようなら……」

言葉を選んだのか、その先が続くことはなかったが、何を言わんとしていたかは薄々察知する。

つまりはこの件の露呈による偏向報道や、柏碧海のファンによる凶行を懸念しての行動らしい。前者はともかく、鳥羽を見た後だと後者に納得できてしまうのが嫌だった。

「典型的な自己中って感じだな。行方不明だとか言つて、旦那に愛想尽かして出てっただけじゃねえのか」

戻ってきて一番に鳥羽が言い放ったのはそれだった。思っていたよりも早い帰還に心中で舌打ちする。

「……お前、いい加減にしるよ。ついてきた以上これはお前の仕事でもある。私情と混同するな」

「いいんです大木さん。……否定は、出来ませんから」

時折朝のニュース番組で見かけ耳にする語り口とは対照的な、暗く沈んだ声音。

それには流石の鳥羽も牙を抜かれたか、間が悪そうに目を逸らしては悪態づいている。

そんな重苦しい、数拍の間の後、停滞した沈黙を打ち破るように柳さんは頭を垂れた。

「どうかお願いします。妻を……碧海を探し出してはくれませんか」

「しかしですね、ここまで民事離れを疑う状況となると……」

「俺が受ける」

返答は一瞬。俺が答えを切り出すよりも早く受諾の意志を示したのは鳥羽だった。

これには俺は勿論のこと柳さんも困惑の色を浮かべるが、相も変わらずそれらを意に介す様子もなく鳥羽は続けた。

「元とはいえ、推しの危機的状況を救うのはフアンの務めだ。ここは大船に乗ったつもりでこの天才探偵、鳥羽裕貴様に任せなさいな」

「泥船の間違いだろ……！ そもそも、この話はお前に持ち掛けられたものじゃ……」

「いいから大木は引つ込んでなさいよ。どうせお前、請け負う気ないんだろ？」

「それは……」

「つー訳だ柳隆司。その依頼は大木に代わって俺が受ける……それでいいな？」

「は、はあ……」

どこから湧いてくるのかもわからない自信を胸いっぱい張りながら、奴は鷹揚に言ってみせる。

こうして半ば強引に、鳥羽裕貴は探偵人生最初の依頼を受け持つのであった。

「……お前、本当にこの依頼受けるつもりか？」

柳さんとの話を終えた帰り。まだ高い位置にある太陽を拝む車道を進みつつ隣に坐した鳥羽へと問う。

「おいおい……探偵たるもの一度受けたと言った依頼を投げ出すものじゃないぜ大木君」

「どの口がほざきやがる……」

差し込んだ斜陽が如何にもノリノリと言った様子の鳥羽を照らす。自信あり気な様が余計に不安を煽るようだった。

「……正直俺は警察に届け出るべきだと思ってる。繰り返すが俺達私立探偵が受け持つような仕事じゃないぞ」

「いいんだよ。その方が燃えるじゃねえか……やつと俺の求めてた仕事が舞い込んできたって感じた」

「……お前ほどお気楽ならさぞ人生が楽しいだろうな」

道筋を立てているのか、鳥羽が口を閉じてからはまた暫くの沈黙が流れた。

適当に掛けた邦楽の音だけが充滿する。常時騒々しいコイツと共に静けさが居座る様は少し異質に、かつ新鮮にも思えた。

「……なあ、覚えてるか。俺が探偵学校辞めた日」

赤信号で停止していた車が再び進みだした折、ふと鳥羽が零す。

「……忘れる訳ないだろ。あんなふざけた理由で辞めたのは後にも先にもお前くらいだ」

鍛錬を積むのが面倒だからばつぱと独立して有名になる、などと抜かされた時は他の同期も含め聞いた口が塞がらなかつたものだ。

その結果は現状が示している。探偵に限らず、自営業は例え専門的なスキルを持ち合わせていたとしても成功するとは言い切れない。だからこそ、経験すらも積まなかつた鳥羽の行く末は当然とも言える。

「てつきり手続きやらで頓挫するものかと思ってたけどな。

ここまで続いていると知ったら同期の連中も驚くだろうよ」

「ま、正直あまりにも稼げなくて辞めようとか思ったこともあつたぜ？ けどここまで来たら真つ当に働くのも馬鹿らしくなつてな」

「……まるで俺達が真つ当に働いてないかのような言い草だな」

「普通の仕事と呼び難いのは確かだろ。……とにかくまあ、色々面倒な手続きも踏んで開いた事務所だ。畳むにしても何かしら一つ、デカイ功績が欲しくてな」

そう語る鳥羽の双眸には、確かな羨望が含まれていた。殆ど自業自得とは言え、プライドだけは無駄に高いコイツのことだ。満足な機会も得られない日々、苛立ちを募らせることもあつただろう。

無謀ともいえる今回の依頼受諾も、そう言つた側面があるのかもしれない。

「……まあ、殆どお前の暴走とは言え俺が巻き込んだのも事実だ。出来る範囲でなら協力してやる」

「いや始めからそのつもりだが。とりあえずあおみるの友人関係とかその辺漁ってくれよ。ちんまい作業はめんどくせえ」

「……」

少し仏心を見せればこれだ。俺も学習しないとつくづく思う。

「だが言った通りこの件に鳥羽を関わらせたのは俺だ。コイツが何かやらかせば、俺にも何かしらの飛び火が燃え移る可能性は大いにある。協力するしないはさておき、監視役としての関与は確定だろう。」

「不本意ではあるが、関わる以上は俺もそれなりの尽力を――。」

「とりあえず俺は今から菊花賞の予想で忙しいから、お前はそっちの方頑張ってくれ。二日以内な」

「この一瞬でここまで協力する気削げるのは最早才能の域だな……」

などと言いつつも力を貸してしまうのが俺の悪い癖で。

「……柏碧海の最近の動向、出来る限りだが集めてきたぞ」

指定された通り、二日後。

微かな苛立ちと共に鳥羽探偵事務所の戸を開いた俺は、数枚の紙束を鳥羽の奴のデスクへと放る。二日前よりも雑然とした卓上には何かしらのメモと思しき紙切れが散見で

きるが、どうせ競馬の予想であるだろうし触れない姿勢を貫く。

「思ったよりも集まったな。正直あんまり期待してなかったが」「柳さんが知り得ている範囲の友人から更に別の友人へと辛づる式に渡ったんだよ。彼女の両親にも少しだが話を伺ってきた」

「おっ、流石。普段からチマチマ陰湿に情報集めてる奴の手際は違うな」

「褒めてんのかそれ……てか、本当ならお前がやるべきなんだから」

手伝ってしまったっている時点で俺にもそんなことを言う資格はないのだろうが。

もしや鳥羽の現状は俺が甘やかし過ぎた結果ではないのだろうか。そんな

「それで、なんか手掛かりになりそうな情報あったか？」

「……正直結論まで辿り着けるほどではない。やはりいなくなっただけで、俺からの連絡で知った人が殆どでな……だが強いて言うなら」

鳥羽に手渡した紙束の内、一枚を引っ張り出してはそれらの真上へと置く。

柏碧海の友人へ電話で伺いつつ記したメモだが、口頭で

説明する分には資料はこれだけで事足りるだろう。

「友人の一人が柏碧海が旦那ではない男性と一緒にいるのを見かけたらしい。これに関しては色々憶測があるが……まあ、何か疚しいことがあったとして、考えられるのは浮気だろうな。人の目を気にする動機としては一番自然だ」

「ざけんなお前もおおみるは皆のアイドルだぞ。浮気なんてする訳ねえだろ」

「私情と混同するなつつつたろ。てか、愛想尽かしたとか言つてたのお前だろうが」

とにかく、これで少しだが事件性が薄れたのは確かだ。今でも一定のファンがいる元アイドルなため一応は誘拐等も視野に入れていたが、その可能性は低くなり安堵する。「ま、おおみるに何かしらの意図があつて行動してるのは事実みたいだけどな。これ見てみる」

そう言つて鳥羽が見せてきたのはスマホの画面。羅列された短文の上部に位置するのは風景写真と思しき画像だ。

「……SNSか？ それがどうした」

「これ、おおみるの裏垢」

「は？ お前それどうやつて」

「オタクつてのは往々にして推しの過去掘りだの裏暴きだのをすんのが大好きな生き物なんだよ。おおみるクラスになる

と古の勇者達がとつくに掘り当ててつから調べりゃ出てくる。まあちつとディーブな部分まで行かないとだが、四六時中ネット徘徊してる俺には造作もないな」

何故わざわざ追いかけているアイドルの知らなくてもよい裏の顔まで暴こうとするのか。俺には理解し難い感情だが、確かに柏碧海の動向の意図を探る情報になり得る。ド貧乏のくせにネット回線だけは意地でも切らなかつた鳥羽の行動がここで生きたか。

それで何かあつたのか、と視線で問えば、鳥羽は答える形で言葉継いだ。

「裏垢つつても、動いてたのは売れる前までだけどな。あんま動かしてるとめんどくせえオタクがねちねち噛みついてくつから、メジャーデビュー後は当然として結婚後も更新されることはなかつたんだが……それが昨日突然、こんな画像が投稿された」

鳥羽のタップで画面中央にあつた画像が拡大表示される。木々が生い茂る山林の中に神社と思しき建物が佇んでいる。更にその後に投稿された眩きには「午後三時」と記されている。

「位置機能のおかげで場所はもうわかつてる。午後三時……飛ばせば間に合いそうだな。おい大木車出せ行くぞ」

「はあ？ おいちよつと待てお前！　せめて何か説明しろ！」

「移動しながら説明する。とにかく依頼を受けたのが俺な以上決定権は俺にある。いいから行くぞ！」

何かを悟ったように目を見開いた後、別人のように機敏になった鳥羽を追って早くも事務所を後にする。

「あおみるはわざと居場所を知らせてんだよ。あの裏垢を使つてな」

高速道路を経由し、柏碧海がいるという場所へ向かう車内で鳥羽は自身の推察を語った。

「あおみるとしてはあの旦那がすぐに警察に連絡すると思つての行動なんだろうな。警察だつて無能じゃない。捜査ともなればいずれ裏垢には辿り着くだろうからな」

「ちよつと待て、色々とすつ飛ばし過ぎてて伝わらん。段階を踏んでから話せ」

「つまりこれはあおみるからのSOSだ。でなきやご丁寧に位置機能までオンにする訳ねえだろ」

「だからつまりなんなんだ！」

「わかんねえ奴だな。旦那から逃げてんだよあおみるは！　理由が何だかは知らねーが、あの胡散くせえ旦那のことでDVだのなんだの、明るみに出来ねえことがあつたんだろ

うよ」

「だつたらなんでここまで大掛かりな真似をする必要がある。それこそ警察なり弁護士なりに直接訴えればいいたろうが」

「それだけじゃ解決しないような何かがあつたんだろ。だから本格的に警察が動くような逃走劇に仕上げることで世間の注目を寄せて、その内容を明るみに出そうとした……まあ、野郎はそれすらも危惧して俺達探偵に頼み込んだみてーだが」

常識的に考えて、なんて言葉は通用しないのだろう。あの夫婦は芸能人であり業界人だ。文字通り俺達とは住んでいる世界が違う。熱弁する鳥羽の瞳孔にそう論されるように。

「こつそい真似しやがつてあの野郎……隠蔽しようたつてそうはいかねえからな！　あおみるは俺が守る！　わかつたら急ぎやがれ大木もう時間ねえぞ！」

鳥羽の熱量を糧とするように、俺の愛車は速度を上げる。

物理的に熱量の上がつてゆく社内の中、俺もまた静かに、散りばめられたピースを埋める思索を加速させた。

「……どうしてこう、山道つてのは斜面やら曲道が多いんだ……」

「山道だからだろ」

「……もう少し人間様を考慮しやがれ……クソ、気持ちわるい……」

不規則な揺れで完全に酔ったらしい鳥羽を残し、停止させた車から出でる。

山林地帯だけあって肌に触れる空気は都会のそれとは違っていた。見回してみれば生い茂る木々やその中で特徴的な屋根瓦を覗かせる神社などが散見でき、確かに投稿されていた画像と一致する。

時刻は3時手前。鳥羽の推測が正しいのなら、ここに柏碧海が姿を見せるはずだが……。

「——もしもし？ 佐竹さん？ 今どこにいるの？」

半ばグロッキー状態の鳥羽を連れ山道を散策していた頃、どこからともなく届いた声音が耳朶に触れる。

「急にいなくなるから心配で……届いてるなら何かしら連絡が欲しいのだけど……」

声の主はすぐに見つかった。留守電でも掛けているのか、スマホを耳に当てた女性が道の傍らに停めた車の窓枠から

顔を出し何かを探すように辺りを見回している。

そしてその女性の容姿が記憶の中にあつたそれと一致した刹那、俺は鳥羽を放つては足早に彼女の方へと寄った。

「……すみません。柏……いや、柳碧海さんでよろしいでしょうか」

「……え、あ、ああ、はい……。貴方は……」

「探偵の大名と申します。ご主人……柳隆司さんから貴方の捜索を依頼された者です」

「ッ……！」

その名を口にした俺に一瞬期待をするような表情を見せるも、身分を明かすと共にそれは驚愕へと変化する。

「探偵……？ 警察じゃ、ないんですか？」

「……ええ。ご主人の方から、出来る限り大事にはしたくないと我々に——」

言い切るよりも早く。

会話を断ち切るように突如ドアウィンドウを閉じた彼女は焦燥に駆られた様子でハンドルを握り、次の瞬間に踏み込まれたアクセルは俺を跳ね飛ばさん勢いで発進。瞬く間に斜面を下ってゆく。

「逃げた……？ とにかく後を……鳥羽！」

見失う前にと自分達も車に戻らんとするが、直前まであつ

たはずの鳥羽の姿が見当たらない。

まさか投げ捨てた拍子に森林部へ転がり落ちたか。そんな不安が頭を過るが、それは直後に投げかけられた声によって杞憂に終わる。

「……なあ、大木」

鳥羽は木々によって分断された分かれ道、その反対側で立ち尽くしていた。

一瞬の安堵と共に、その声音に違和感を覚える。何か様子がおかしい。

「こりゃあもう、俺達だけじゃ解決できない領域まで来ちまったらしいぜ」

招かれるままにその傍へと寄り、鳥羽が指し示した先を見て言葉を失う。

ガードレールを隔てた、森の中へと続く斜面の下。侵食により剥き出しになった岩盤へその身を預けるように、物言わぬ男の亡骸が打ち捨てられていた。

「だあああ……づつかれた……！」

「お勤めご苦労さん」

とつぷりと空を暗闇が包んだ頃。

心身共に摩耗極まりといった様子の子の鳥羽を静かに出迎える。

「おかしいだろ……第一発見者ってだけでここまで尋問するか普通……！」

「まあお前だしな。犯人扱いされても仕方はないだろ」

「クソポリ公がああ……！」

俺達が遺体を発見してから大体8時間経っただろうか。あの後すぐに警察へと通報した俺達だったが、あの場へ至った経緯が経緯なため事件への関与が疑われ暫く事情徴収を受けていたのだった。

特に鳥羽は元の粗暴の悪さが災いしだいぶ絞られたようで、警察署を後にしてからもネチネチと愚痴を零し続けている。

「……しつかし、まさか殺人現場に居合わせるとはな」

「あ？ あおみるが人殺しなんざする訳ねえだろが」

「誰もそうは言ってるねえだろ……だがまあ、警察の方は柏碧海が犯人と睨んでいるらしいがな」

事情徴収を受ける傍ら、事件に関するある程度の情報を得ることは出来た。

まず転落死と思しき遺体として見つかったあの男の名前

は佐竹将。柏碧海の熱烈的なファンだったらしい。

柏碧海自身もあの後警察によってすぐに身柄を拘束され、今も佐竹殺害を疑われ尋問が続いているそう。曰く佐竹とは頻繁に会っていたようで、彼女の友人の言う見知らぬ男とは彼とみて間違いないだろう。

だが殺害に関しては一貫して否認を続けているようで、それが俺達への徴収が長引いた原因になっていたらしい。

「まあともかく、警察沙汰になった以上もう俺達が関われることはないな。あとは成り行きに任せよう」

「……だな」

昼間はあれだけ騒がしかった車内に会話は無い。心地の悪い沈黙をも乗せた車体は、永遠にも思えた夜闇の帰路を進んだ。

「柳さん！ 報道の件について一言！」

「私も先程報道で知ったばかりでまだ何も……」

「碧海さんの不倫の件はご存じでしたのですか!?」

「いや、だからあの……!」

「奥様が人を殺したとお考えですか!?」

「とにかく！ 気持ちの整理がつき次第お答えします！」

「柳さん！ 柳さん！」

「何か一言！」

帰宅すると既にハイエナの如く群がっていた報道記者の群れを押し分け、逃げ入るように自宅の中へ雪崩れ込む。

どうしてこうなった。落ち着かない足取りで家中を歩き回る。

大事に至らせなくなかったからこそ私立探偵に依頼をしたというのに……気付けば人死にすらも発生しこの有様だ。

どうする。どうすればいい。このままではいずれ……。

「……?」

やがてマスコミによる騒音も止んだ頃、静けさを取り戻した屋内にインターホンの音が響く。

やり口を変えてきたのかと身構えるが、恐る恐る確認したモニター映像に表示された人物を確認し多少の緊張を解いた。

「鳥羽さん……?」

「よ。なんか大変そうだな」

微塵の心遣いも感じない労りの言葉と相乗りし、戸を開いた少しの間を突きすけずけと上がり込んでくる変人探偵。

「報道する側だったアンタが今やマスコミの槍玉にあげられ

てる……数奇なもんだよな」

「ええ……まさかこんな事態になるだなんて」

依頼を達成したとは言い難い状況を謝罪するでも、依頼内容自体は達成したと報酬をせびるでもなく、淡々と鳥羽は言葉を重ねる。

相変わらず神経を逆撫でてくるような態度には反感を覚えるが、一先ずは取り繕った顔で応じた。

「私が妻の心情にさえ気付いてやれていれば、人を突き落とすことも……」

「あー、いいいい。そういうのいらん」

だが求めているのはそうでないというように、極めて自己中心的な空気を保ったまま鳥羽の眼光が剣呑に灯った。

「単刀直入に聞くぞ……佐竹殺ったの、お前だろ」

迷いなく放たれた鏃に、努めて取り繕っていた心が綻ぶ。

「いきなり何を言い出すのかと思えば……」

「あおみるが人殺しなんてする訳ねえだろ。だったら消去法でお前しかいない」

「ふざけてるんですか」

「それにお前今、人を突き落とすことも、つて言ったよな？確かに佐竹は突き落とされたみてーな形で死んでたが、死因の方はまだ究明中で今はただ遺体として発見されたとし

か報道されてねえんだつてよ。実際に転落した現場を見たのはせいぜい俺達と警察くらいだ……なのに何でテメエ、突き落としたりつて言い切れんだよ」

「つ、妻の件を警察から聞いた際にそちらも知らされたんですよ。……冷やかしながら出て行つてください！ 名誉棄損で訴えますよ！」

悪夢でも見ているのか。有無を言わさぬ勢いで捲し立ててくる語気をその体ごと撥ね退け、玄関の外へと押し返す。

「……そうなれば鳥羽は消えるし、事件は解決するで二石二鳥ですわね」

だが、悪夢は覚めないからこそ悪夢なのであつて。

待ち構えていたかのように戸の向こうで佇むもう一人の探偵が、終わらぬ悪夢を最悪の結末へと導こうとしていた。

「……鳥羽の言った通り、消去法つてのはあながち間違いじゃない。現状佐竹将の殺害に結び付けられるのがアンタしかいないんだ」

玄関戸越しに盗み聞きした鳥羽の推理を引き継ぐ形で俺の推察を並べる。別れ際に念のため鳥羽を着けてきたのは

正解だったか。

「そんな馬鹿な……こんなことは言いたくありませんが、それこそ妻が一番怪しいでしょう。遺体のすぐ近くにいたんでしょう？」

「……確かに柏碧海は佐竹の死亡現場のすぐ近くにいた。だが、彼女には佐竹を殺す理由がない」

「…何故そう言い切れるのですか」

「彼女が、アイドル、だったからだ」

「は……？」

意味がわからない。そんな顔が向けられる。当然だろう脈絡もなくこんなことを言われたら誰だつてああなる。故に順を追つて説明する。

「……柏碧海は佐竹と共謀してアンタを陥れようとしていたんだよ。世間を騒がせるほどの逃亡劇を繰り広げ、それに至るまで柏碧海が経験した苦難の日々を明るみに出す……こんなシナリオでな。まあ偶然か否か、アンタが警察でなく俺達探偵に依頼したからその目論見は潰れた訳だが」

だから結果的に過剰とも思えた柳隆司の判断は正解だったと言える。

「……何故妻はそんなことを……？」

「言つただろ。彼女がアイドルだったからだ」

「だからそれがなんだつて——」

「アイドルつてのは承認の上で成り立つてる存在……中には自らの他者承認を満たしたいが故にその道を選ぶ者もいる。……ああおみるにとつて、自分はまだそのアイドルだった……そう言うことか？」

無機質な鳥羽の声音が、この事件のキモを代弁する。

「ああ。初めからそうだったかはわからんが、少なからず今の柏碧海にとつてのアイドル像は鳥羽が語つた通りのもので、彼女自身もまだそのアイドルとしての自分から抜け出せていなかった。……要するに、彼女はまた注目を浴びたかつたんだ」

無言が停滞する。俺の二の句を待つ沈黙だ。

「自尊心や虚栄心。夫との生活の中でそれが満たされることの無かつた柏碧海は……初めはちよつとした渴きを満たすためだったんだろうな。自分のファンだったという佐竹将との浮気の関係を持った」

ここまででは事情徴収中に警察が漏らしたことだった。お前も浮気相手の一人だったのではと疑われた際は流石に呆れたものだが、結果としてそれが真相の手掛かりとなったのだし多くは言うまい。

「だが一度タガが外れると際限ないのが人間だ。佐竹との浮

気を機に肥大化していった欲求は歯止めが聞かなくなり、やがてはかつてのように注目されたいと思うようになった。その結果が今回の失踪事件だ」

取り出した携帯を操作する。液晶に映し出すのは鳥羽が発見した彼女の裏垢だ。

「だがただ旦那から精神的苦痛を受けている、と言うだけでは注目されるにはインパクトに欠ける。だからこそ世間がその答えに辿り着くまでの経緯を大掛かりなものとしたんだよ。内容自体はありふれた夫婦内のすれ違いだとしても、逃亡を図るまでのものとなれば必然的に世間では話題になる。望んだとおり、あくまでも、被害者、と言う体の柏碧海には注目が集まるからな。後は鳥羽の推察した通り、頃合いを見てSNSで自らの居場所を明かし、やってきた警察を通じて旦那から逃げたいたというシナリオを世間に向けて語るだけだ」

「ですが、ニュースにもなっていない状況でどうやってタイミングを……」

「……アカウント主限定の機能だが、投稿のアクティビティ見りやどの程度閲覧されたかなんてすぐわかんだよ」

「……とのことだ。まあ今回は俺や鳥羽の所作で閲覧数が伸びた訳だが、結果的にそれを警察や世間に見つかったと捉え

たんだろうな」

元々そう言う目論見だったのだ。数年も運用してなかったアカウントの過去投稿の閲覧数が急に伸びれば流石にそう思うだろう。

「……妻の行動動機はわかりました。けれど何故それで妻が人を殺さないことに繋がるかが私には……」

「言っただろ。彼女は再び注目を浴びたい……要するにちゃほやされたいと考えてたんだ。そんな奴が一時の迷いでも人を殺すと思うか？」

「しねえだろうな。人殺しなんざしたらそんな欲求、一生満たされる訳ねえからな」

少し誇らしげに鳥羽が胸を張る。加えて俺達があの場所へ辿り着いた時、柏碧海は明らかに佐竹を探していた。その点からも彼女が殺したとは考えにくい。

「だから私が殺したと……貴方達と同じように妻の裏垢を見たファンが押しかけたという可能性は？」

「勿論考えはしたが……それも今、鳥羽がアンタから事件現場の状況を聞きだしたおかげで消えたな。やはりアンタがそれを知っているのは不自然すぎる」

「それは警察の方から聞いたと言ったでしょう？ それに、私には殺人をする動機がない！」

「この際それはいい。俺達がいるのは事実の話だ。だから事実だけ並べる……アンタ、浮気してただろ」

「……な、何のことだが……」

「女はちゃんと選んだ方がいい。調査初めにアンタが俺に紹介した柏碧海の友人、躊躇いなくアンタと浮気を口にしたぞ」

「な……」

「なんで嫁の友人の連絡先を知ってるんだ、って時点で怪しくはあったがな」

「それがどう私が殺したことに繋がるん？」

「結論を急ぐなよ。ただ事実確認をただけだ……ただまあ、アンタの行動の一端には関わってるんじゃないか？ この依頼の件だ」

「……警察に連絡すりゃ否が応でも身辺調査が入るもんな。それで浮気がバレて世間からバッシングされるのを避けたと思えば……ま、確かに妥当だな」

「……」

これは凶星だったのか、今度は押し黙る。

「俺達に依頼を持ち掛けたように、アンタは自分の手の届く範囲でこの件を解決したかった。だからアンタ一人でも出来る限りのことをしていたはずだ……その末に見つけたん

だろ、この裏垢」

表示したままの液晶画面を小突く。

再び沈黙が鎮座した。これは肯定と取つていいものだろう。

「指定されていた時刻は午後三時。朝のキャスターのアンタなら向かえる時間だろうよ。行動記録に関しては俺達に知る術はないが、まあ警察が調べればすぐわかる。いずれは辿り着くさ」

ダメ押しと言わんばかりに掛けた揺すりが決定打か。

逃げ道を塞ぐように玄関戸へ立つ俺達を見ると、観念するのように頭を垂れた。

「……ええ、そうです。妻のアカウントを見つけた私は、投稿されていた時刻に合わせ画像の場所へ向かいました」

そうして語られる真相。

アナウンサーとして聞くそれとは程遠い、酷く感情に震えた声だった。

「妻が浮気をしていたことは知っていました。ただ私も他の女性と関係を持っていた手前大きく出ることができず、なんとかできないかと頭を悩ませていました。そんな時に、妻がいなくなっただんです。……浮気相手と何かやっていることはすぐに悟りました。だから何とか行方を探し出し、そ

の場へ向かおうと思いましたが。浮気の突きつけ、その場で妻と別れるために」

「……それで俺達に？」

「はい。仰られた通り、警察に相談すると私の方まで探られる危険があつたので。……まあ、偶然とはいえ、結果として自力で妻の居場所を特定した訳ですが」

数多存在するアカウントの海から、ピンポイントで柏碧海に繋がる情報を掴んだのは執念の一言か。ただそれが今回、最悪な方向へ向かつてしまった訳だが。

「ただ、殺す意図があつた訳はないんです。画像の場所に着くと、トイレか何かにでも行つてたんでしょね。妻の姿はなく、代わりに佐竹さん、でしたか。その浮気相手の方だけがいました。そして私を見るや否や車から出てきて、妻は自分が守るなどと言つて……」

「……それで揉み合いになって、なんかの拍子に突き落としました」

「……はい。それで怖くなって、逃げてきてしまいました」

「なんでただ逃げたのかね……俺ならもつと上手く誤魔化すぞ」

「警察がお前を犯人扱ひしたのも納得の一言だな。……まあ、気持ちにはわからなくもないが、やつてしまったことも、そ

こから背いた事実も変わらん。そこだけは恥じる」

「……」  
事の露呈を恐れて探偵に依頼する程の彼だ。事故とはいえ自らの手で人を殺めてしまった時の不安感はずり知れないものがあつただろう。

それ自体への同情はするが、結局は自分自身の行動が招いた事件だ。自己保身に走つた行動含め看過する訳にもい

くまい。  
「それでどうする。自首するなら送るが」

「……そうですね。では、お願いできますか？」

アナウンサーであり殺人犯を自らの運転で送り届ける。そんな奇妙な体験は後にも先にもこれだけだろう。

ともあれこうして、鳥羽探偵事務所最初の依頼は幕を閉じたのだつた。

「……他人に幻想なんぞ抱くもんじゃねえな。アイドルつても、所詮は文字通りの偶像つてか」

数日後。俺の持ち込んだ新聞に目を通しながら鳥羽が零す。

一面を飾るのはやはりあの夫婦だ。結果として注目を浴びたいという柏碧海の目論見は叶った訳だが、こんな形は彼女も望んでなかったものだろう。

「推しの黒い部分は見ちまうし、結局美味しいところは全部お前が持つて行くし……やっぱ関わんじやなかったぞこんなモン。報酬も出ねえしよ」

「……そう悲観するモンでもねえだろ。こんな案件は初めてだったが、お前のおかげで早く真相には辿り着けたしな」

それどころかコイツの推理は間違つてなかったし、粗はあったものの結果として俺よりも早く真実に辿り着いていたのは事実だ。

やはりコイツには光るものがある。こんな場所で捨て置くには惜しい。

「……なあ、鳥羽。お前はやっぱりうちの事務所に——」

そう言いかけた利那。

ふと、鳥羽の手が弄ぶ物体が視界に入り、同時に思考を遮る。

「おい……なんだそれは」

「これか？ 帰り際に柳の部屋から拝借してきた現役時代のおおみるのサイン入りグッズ。殆ど絶版決まったみてーな今なら高く転売できるだろうって……あ、やべ」

「……まだ刑務所にブチ込み損ねた犯罪者がいるみたいだな」

「あの……大木さん？ 一応俺事件解決には貢献してるし、昔馴染みの好もありますしここは……」

「うるせえ一生刑務所の臭い飯食つてろ」

「ちよ、お願いだからその携帯しまつて!? どこに掛けようとしてるの!? ねえちよつと!? 頼むよ大木後生だからああ!!」

爆発的な喧しさが生まれる。立ち去ろうとする俺の足にしがみつき懇願してくる様は何ともまあ情けない。

今後このバカに振り回される未来に頭痛を覚えつつ、とりあえず俺はあるべき場所へと通話を繋げた。



あとがき

読書の皆様、読んでくださりありがとうございます。二年目のゼミ誌、人生初のミステリを執筆しました。慣れないジャンルでしたが、なんとか矛盾も破綻もない作品に仕上げる事ができたかと思えます。「酷い」と憤りを感じても、その感情は殺してください。ミステリだけに。（私の作品は人は死にませんが）

このゼミに入る以前、ミステリに触れたことがほぼゼロ。そう思うと、このジャンルの執筆というのは、ある意味貴重な体験でした。ゼミ生の皆様や先生方にも感謝しています。改めてありがとうございます。

佐野 文哉

わーい。

大石 龍佑

君は本を後ろから読むタイプ？

熊谷 美咲

作中に出てきた夕の手紙の内容は皆さんが自由に想像してください。私の中には「これ」といった手紙の内容はありませんが、私の中にある手紙は作者である私が考えたからと言って正解ではないです。笹雨が十五年黙る理由。内容によつては弟。風の選択が、皆さんの想像した手紙の内容で変わります。彼が凧自身へと戻るのか、それとも兄のふり続けるのか。彼が生きているのか、それとも死ぬ道を選ぶかは皆様の自由です。物語は終わつて続きが無くても、皆さんの中で彼らは生き選択し続けるので。彼らは私の手から離れました。これからの続きの作者は私ではなく想像するあなた。これは作者である私から読者である貴方に課す問題。ビバ二次創作（ピース）

藤吉 直樹

卒制がねm……zzz (sleeping message)

そんなことより、あとがきですね、あとがき。

今回はキャラクター設定増し増しで赤毛組合やコロナボで出てくるトリックなどを多重構造にした……え？何の話ですか？没にしたプロットの話です。当然こんなもの

制限内に収まる訳がなく、この中から赤毛組合のみに絞って書き始めたものもなぜか文字数超過となり断念。設定等を回収し、青いガーネットベースに書いたのがこの作品になります。このため、読みにくかったのではとかなり反省しています。

渡辺 結香

完全版のプロットを使った作品は、卒制が終わったら書きたいなあ〜とプロットの死亡フラグで供養したところで筆を置きたいと思います。

メモリ使用率50%越えのPCより

渡邊 真

菊花賞はヴァイスメテオール予想でしたがタイトルホルダーに全部持つていかれました。

遠山 晴人

ゼミ誌の締切って、近づけば近づくほど朝日が眩しくなってきましたよね。生きていることを実感しますよね。私はあのとき確かに生きてました。今は死んでます。

フロムゲーか格ゲーやってるよって人いたらぜひ声掛けてください、一緒に遊びましょう。

篝火に 火を灯せ。

イトメ

そもそもミステリを読んだことがなかったですし、書いたことなどもちろんなかったので詰んだと思っていた（それなのになぜこのゼミに入ったかは聞かないでください）のですが、思いのほか読めないこともないかもしれない……：：：くらいの作品が書いてよかったです。編集委員同士は喧嘩上等になると聞いていたのでリアルに殺人事件が起きないか（起こさないか）ひやひやしていました。もう一人が優秀だったので助かりました。たのしく作ることが出来てよかったです。ここまで読んでいただいて、ありがとうございます。

ゼミ誌編集委員　くりすていの　アヤノ

ゼミ誌に掲載する話を書くのは二年目となりますが、相も変わらず計画性のない進行で話を綴りました。今回はバスティーシュとのことでいざ実践、とやってみたものの、パスティーシュ舐めておりました。とつても難しかったです。抑もキャラクターを作ることが苦手なので、どこから始めたものかと頭を悩ませました。今度挑戦する機会があれば、もつと計画的に速やかに書きたいと思います。女性探偵にしよう！ という事しか決めていなかった夏休み初日の私を殴りたい。

こうして無事ゼミ誌が出来たのは、先生方や共にゼミ誌を作り上げてくれたゼミの皆、そして一番そばで支えくれていたもう一人のゼミ誌委員のお陰です。多大なる感謝を！ 読者の皆様も、読んでくださり有難う御座いました。楽しんでいただけたのでしたら幸いです。では、また。

ゼミ誌編集委員　馬場　楓

# 探偵依頼書

探偵協会 日本支部 責任者:高野

氏名		
住所		
性別・年齢	男・女	歳
依頼内容 (地球に存在する 言語で)		
犯罪レベル		
犯罪レベル参考	A 殺人 特級事件 B 窃盗 第一級 テロ C 恐喝 第二級 タイムトラベル関連 : 第三級 アボトキシン486関連 Z 猫探し	
指名探偵		

## 注意事項

ご依頼された全ての案件に対し、当探偵協会は一切の責任を負いません。なお、クレーム等の受付もいたしません。

ご了承ください。

署名



探偵依頼書

授業開講年度 令和三年度

授業名 文芸研究Ⅱ

ゼミ名 高野ゼミ

発行日 2021年12月3日

発行人 高野和彰先生

編集人 阿部素 北川綾乃

発行所 日本大学芸術学部文芸学科

東京都練馬区旭丘2-42-1

印刷所 有限会社 国宗